

081.7
N627
H
00253464





春景

浪速葦書

卷十二

浪連叢書

卷十二

081.7 N6274

增誌

其一



253464

浪速叢書 (第十二)

目次

蘆	分	船	(…1—186)
○難	波	鑑	(187—342)
難	波	十二景	(343—370)
難	波	十觀	(371—394)
浪	花	のな	がめ(395—498)
浪	花	の	梅(499—612)
附			
大	阪	地	圖(二種一鋪)



地誌貳冊のうちの『其一』として、本冊には、その記述が我が浪速の全體に及べるものを選び、前頁目録の通り六種貳拾四冊の著作を収めることに致しました。附録の大坂地圖二種のうち、寶曆の原圖は佐古慶三氏が希有文庫の秘藏。元祿の原圖は大坂の町人學者として名高かつた故山片蟠桃が家に藏されてゐたのが、目下大阪市愛日尋常高等小學校に保存されてゐるもので『思則堂』の藏書印がございます。元祿の大坂、寶曆の大坂は、この二つの地圖に依りて、その當時を偲ぶことが出来ませうと存じます。

解題

一 『難波名所蘆分船』は、またの名を『大坂鑑』ともいひます。延寶三年乙卯(我が二三三五西曆一六七五)の開板。原本は天地八寸九分、左右六寸四分。總丁數壹百十八丁。著者は一無軒道治。内容は大坂及び大坂附近の名所案内記として最初のものです。行文素朴にして、まかも趣き深く、古雅な挿畫が殆どその半を占めてゐます。この『蘆分船』は十數年前活字に組まれて、他の書と共に、某所から發行されたこともありましたが、興趣の深い挿畫が其の十分の一だも収録されませんでした。今次、本叢書刊行會が本冊に此の書を收めるに際し、高木利太氏の祕藏本と大阪府立圖書館本とを底本とし、挿畫は一枚も省かずこれを凸版とし、その製版に就ては及ぶ限りの注意をしましたが、猶ほ不満足な點のあるのは遺憾です。

一 延寶三年といへば、大坂落城後僅に六十年です。それで其頃既に一大商都の面目を發揮してゐた浪速の有様は、この書によりて明瞭に描かれてゐます。著者一無軒道治が此の書の稿を起した動機に就いては『自分が此の稿を思ひ立つたは、花實庵貞富といふ人に誘はれ、天満宮に詣で、梅の木蔭に憩ふた時、浪速に名高き神社佛閣につき知れることを書き記し置かばやと思

ひつき、花實庵が家で此の稿を起した』との意味を書いてゐます。

一 著者一無軒道治は紀伊の人、藤原氏、初め紀伊侯に仕へたが、國君の旨に忤ふことがあつて學窓の人となり、後、醫術を養壽院道作法印に學びて奥義を承け、名を海内に知られたばかりか、『通念集』の著者として仁和寺惣法務宮の御前にも召され、また御室宮の執奏によつて、道治が筆蹟は長くも天覽を忝うしたとも傳へられます。この『蘆分船』も、浪速の旅館に假寝の日を重ねてゐるうちに脱稿したもので、彼が學殖の片鱗は、これで知ることが出來ます。唯、玄かし、この大坂名所案内記の最初の著者たる彼の傳記が、霞がくれの花にも似て、その生年月日も、歿年月日も、またその最後の場所、享年、法號、または其の墓の有所さへも知り難いのは、いかにしても遺憾のきはみです。

一 『蘆分船』原本は六冊、冊毎に題簽の文字がちがつてゐます。前々々ページの三字は、原本第一表紙うらの文字を縮寫製版したものです。

十日に雨堤をもちてふの風を
たやぶ潮のさしけ遠の波乃鼓
のうちを舟をもちてふの風を
おくり夕波をもちてふの風を
小舟をもちてふの風を
筒の口をもちてふの風を
堀の口をもちてふの風を
もやれ波をもちてふの風を

東洋舟の心の中をのりてくれば
 世の風俗は清くありて尚も今昔を
 ねくまじくしりて考ふれば十は
 十乃百は好まじくしりて早も
 舟の心の中をのりてくれば
 三は一人もかれも百は一人も
 是れは心の中をのりてくれば
 幸しくは心の中をのりてくれば

舟の心の中をのりてくれば
 海は袖乃は懐きし泉は乃は懐きし
 舟の心の中をのりてくれば
 乃は心の中をのりてくれば
 遠くは心の中をのりてくれば
 舟の心の中をのりてくれば
 舟の心の中をのりてくれば
 舟の心の中をのりてくれば

かゝるにきと形勢の多しをいふ
 可もやや花も泪もそくたに海
 乃濱松物つらやの回よくや
 うらむをれ踏ふたをいふ
 神社仏閣のころ城ちり多き後
 六冊といふはさうなる極度被
 言檀にたもいふけなると人の
 名は入るもあつた物と

年々おれもかやうに捨てて
 なるおれも此も葉をはらふ
 名つげく葉をたやうと
 出交三乙卯海生末より難波乃
 遠彼より海より作る物なり

一五軒 道法輯

蘆分船第一

目録

難波京

堀江

今宮夷
馳川

逢坂清水

井七不思議

松蟲塚

一心寺

茶臼山

安居天神

真清水

大江岸

勝鬘院

天王寺
附龜井水

庚申堂

舍利寺



分 船 第一

難波京

○人皇十七代。仁德帝の皇居仁徳天皇の御居。今の高津宮。又難波村東北に城あり。御治世八十七年。延寶三乙卯年迄千三百六十三年にあたる。御父應神天皇。登霞し給ふ

時。春宮を。宇治の雅倉の宮に。譲り給ふに。仁徳は。兄にてましましけれ。是ををそれ。宇治の親王辭し給ひき。仁徳へ。又御讓にあらねば位につき給へ。三年迄にぞなりぬ。國のさ、け物も。朽うせて。民の愁たり

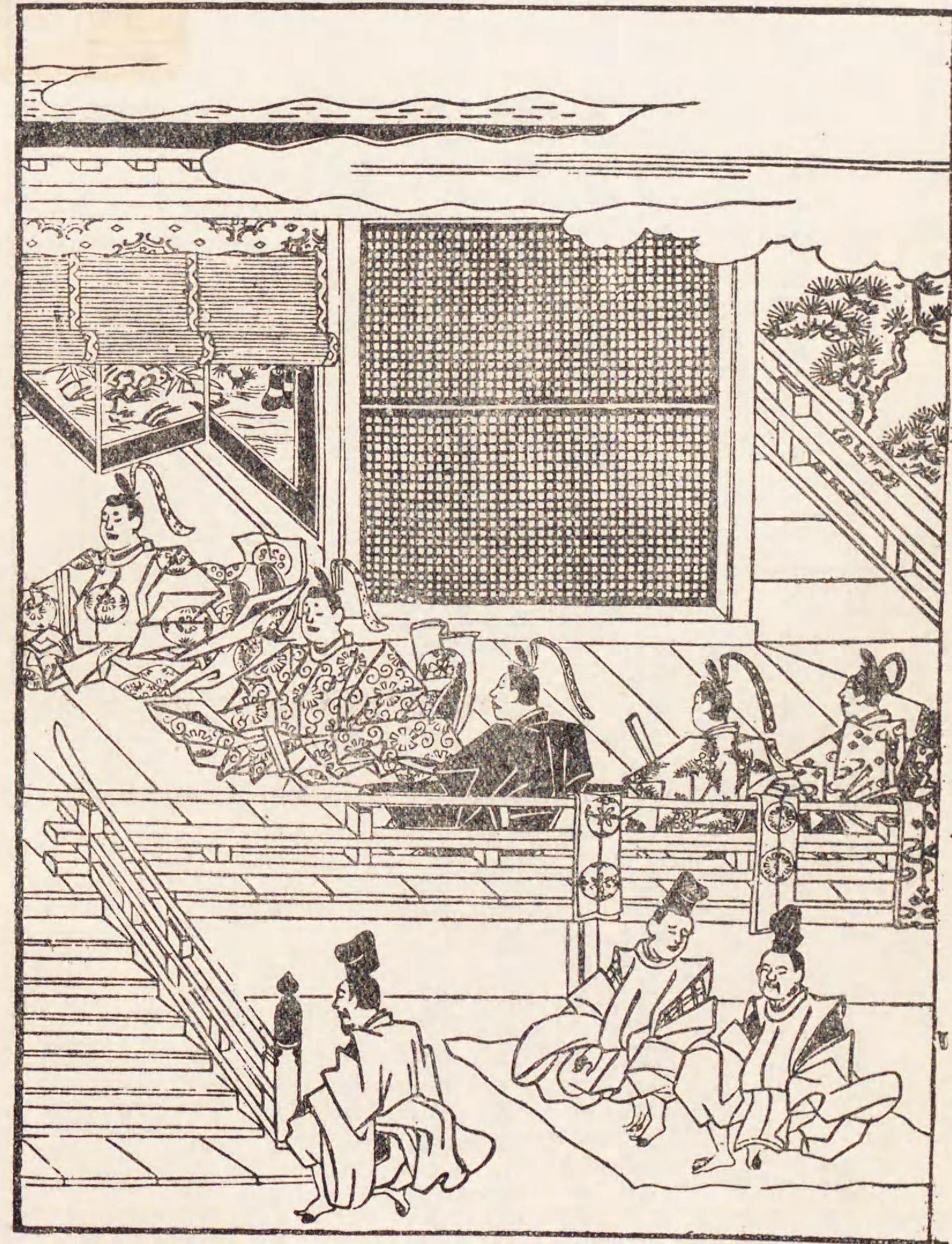
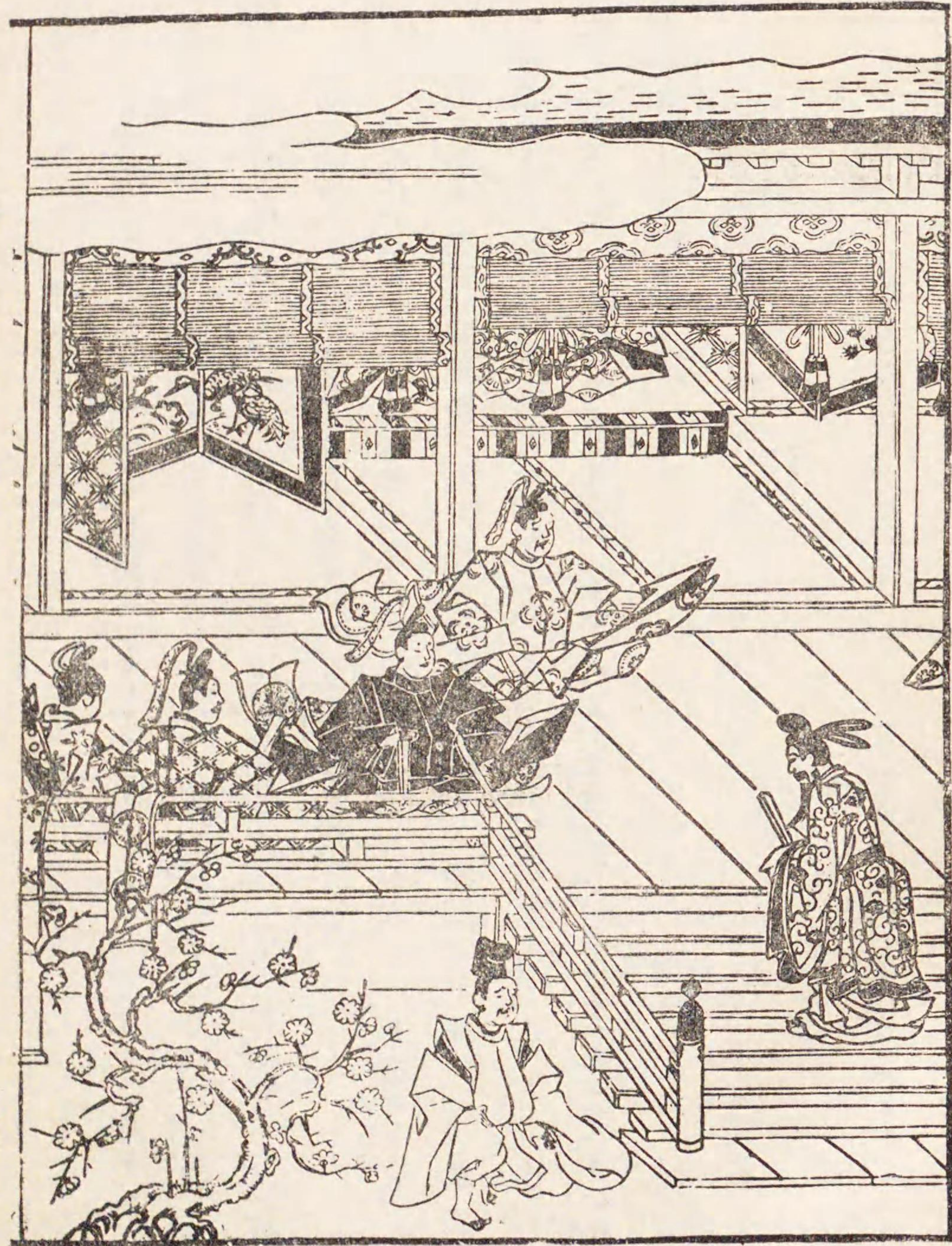
爰に宇治の親王。神變をもて。かくれ給ぬ。其後仁徳へ。猶即位なかりき。其時王仁と申て。日本の文道の師の

爲に。應神の御時。高麗より。來朝せしか。仁徳をいさめ奉りて。よめる

難波津に咲や此はな冬こもり今へ春へとさくやこのはな

異國の人。和歌をもて。いさめ申ける事。えならぬ理也。まことにやんごとなき。王仁を師とし。文學世に行へ

せ給ひ。政道かしこく。民の勞をいたはり給ひ。御調物を。ゆるしをかせ給ひて



高きやにのほりてまれへ煙たつ民のかまとは賑にけり

又三十七代。孝徳天皇は。冬十月難波の長柄の豊崎に。都をうつし給ふと也。御治世十年の閒也。難波と云こと日本記には。波花と見えたり。あかるを。難波と誤りけるとかや。三の浦といふこと。蘆津。汐津。難波津といふ人もあり。又御津ともいへとも。此説いつれか。是なることを知らず。予おもふに。御津とは。仁徳の皇居の津なれい。御の字をそへたるか。敷津。高津。難波津といふ。是等に随べきか

住吉の松のいはねをまくらにて敷津のうらの月をみるかな 後大徳寺左大臣

むかしおもふ高津の宮に跡ふりて難波のあしにかゝる春風 慈 鎮

難波人あし火たくややすけたれとをのかつまこそとこめつらなれ 人 丸

又大坂と。いひならはせしことい。いつれの御時にかありけん。大坂茶屋と云名によるとかや。今の嶋屋町の。小坂是也。尋ぬへし

堀 江

○仁徳天皇。十一年の冬。十月南水を引て。西海に入因て以て其名を堀江と號し給ふと。日本記に見えたり。今の木津村と云所也

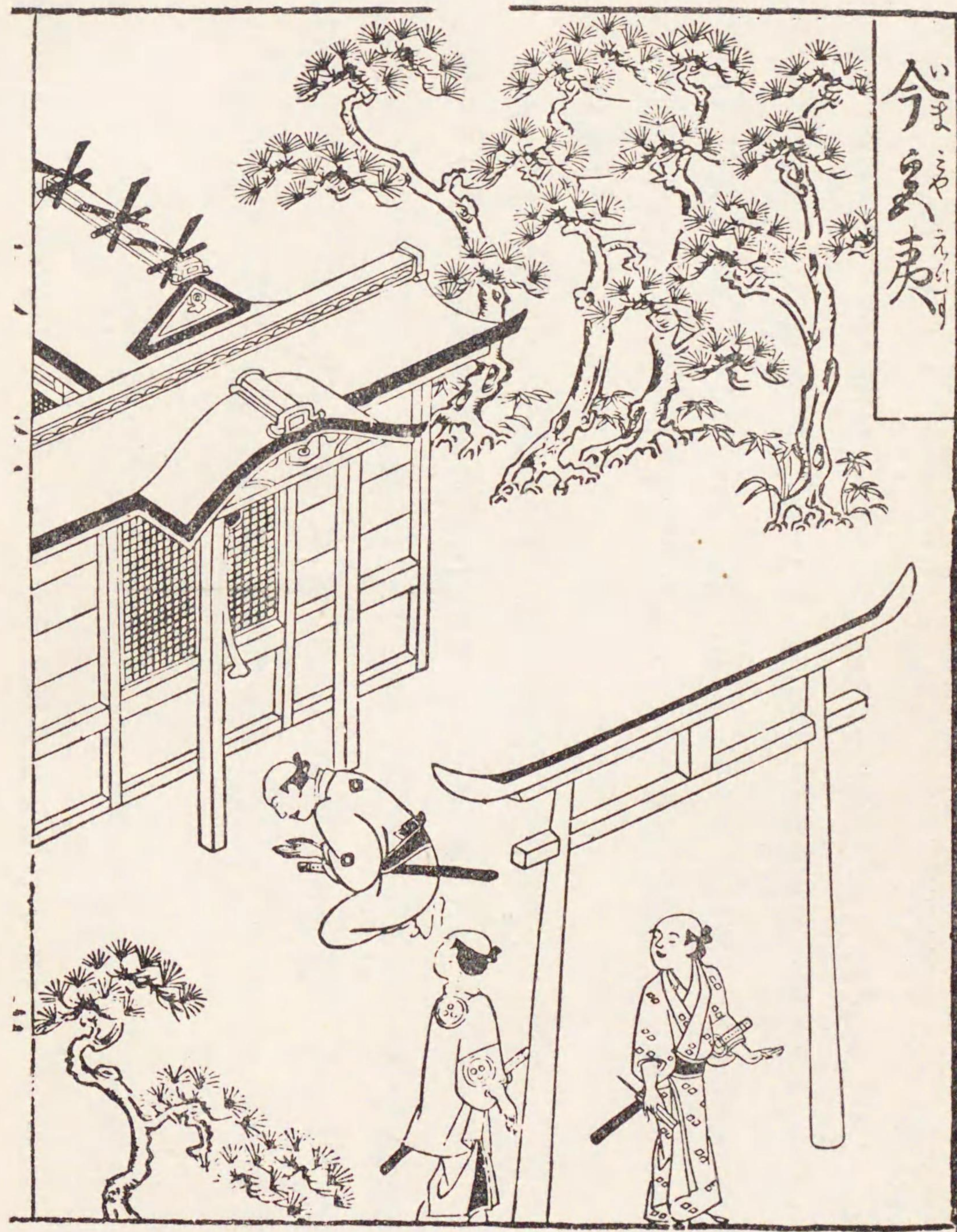
萬葉 船きおふ堀江の河のみなきへに來るつゝ鳴は都鳥かも 江 鳥

今 宮 夷

○此やしろい。天照太神宮蛭子。素戔嗚の三神也。并廣田大明神。當社より北。あかれども。蛭子を。所の守護神と。あふき奉る也。抑此御神い。伊弉諾尊御子也。既に三歳にならせ給ふまで。脚猶たゝす。かれ天の岩櫨樟船に載て。風のまゝに。はなちすてけれい。根の國へなかれよらせ給ひしを。沖の釣する夷。ひろひ奉りて。養君の三番目なるかゆへ。夷三郎とあかめ侍る也。又二神に。三男とも申傳へたり
かそいろはいかにあはれとおもふらん三とせになりぬあしたゝすして
又源氏あかしの巻に

わたつ海にまなへうらふれ蛭の子の足たゝさりし年は經にけり
縁日はとしごと。孟春十日也。俗につたへて。十日夷と云。長月十八日には。此やしろにをいて。俗人の舞ありて。神輿を天王寺の西門まで。遷幸し奉る。又いつのころよりか。洛陽祇園六月の御神會に。此所の里人。神輿をふる役に。まいるなり。まことに由緒あること也。當社より。乾のかたに。星か池といふあり。是は此御神悪星を射落し給ふ所と也。又かたはらに鼈川といふあり。其いにしへ。天王寺造營のとき。用木を引のほせし川

今夏夷



となり

逢坂清水

○此清水は。天王寺の。三水の随一なりと。申傳へり。いかなる三伏の夏。早魃にも。靈水なれば。涸る事なし。此水頭にいたれば。をのつから。下くゝる水に焔もかよふかとおもはれ。むすぶ泉の手さへ。すゝしくて。夏なきと詠せるも。かゝる所なるらんと。おもひ出られ。侍るぞかしまた哥には玉出の水ともよめり

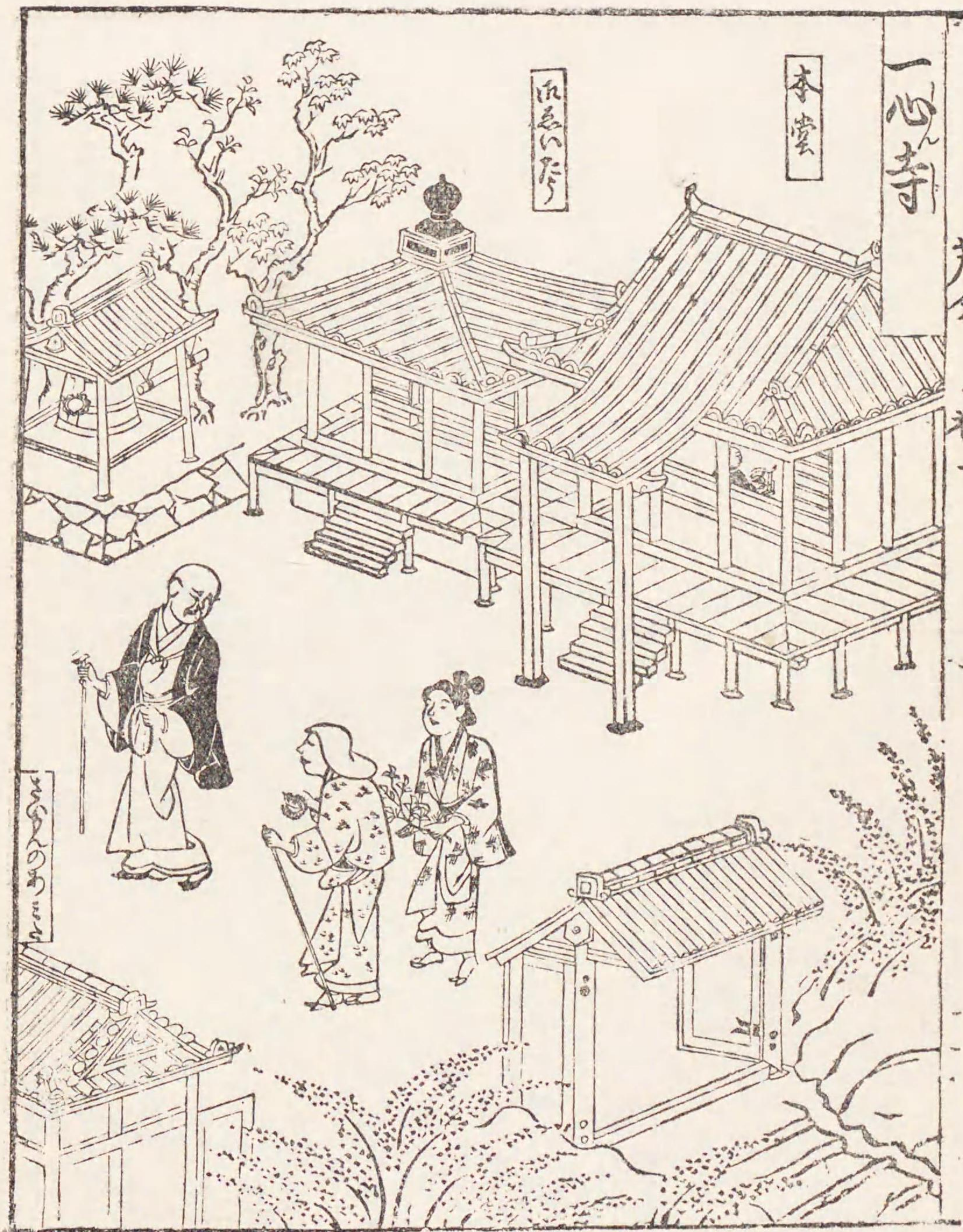
續後拾遺

まらいしの玉出の水を手にくみて結ふ契りのすへにこらし 前太政大臣
柳陰ちらて焔たつ清水哉 宗 祇

松蟲塚

○後鳥羽院の御ン時。松蟲といへる。宮女の塚也。其比法然上人。都ひかし山にて。別時念佛をはしめ給ふ。聽聞の貴賤羣集しける時。鈴蟲。松蟲とて。此二人發心して。出家せしかは。帝大に逆鱗ありて。上人を。土佐國へながさせ給ふなり。すゝむしの向後は。いかゝありけん。松むしは。此ところにきたりて。身まかりぬるゆへ。其印にのこしをける所とて。名つけて。松むし塚といふ。是すなはち。七不思議の樗の下也。此靈木俗につたへ





て説々あまたあれと。いつれを。證としかたしいかさま子細あることにや

經よみて其あととふか松むしの塚のほとりにちり、んの聲

藤原言因

一心寺

○坂松山高岳院一心寺は。不斷念佛の道場也。御本尊阿彌陀佛。并二菩薩也。中尊。御長三尺毘首。文治元年後白河法皇と。法然上人と。日想觀を。修し給ひし時。天王寺の西門の岸に。新別所として。四間四面の。一字を建立し給ふ。其堂の西の小壁に。上人の御筆して。六字名號を。あそひし其傍に。書付給ふ

阿彌陀佛といふより外は津の國のなにはのこともあしかりぬへし

今に傳て難波名號といふ是也。されハ。上人此所におはしける時。明遍僧都。善光寺へ。まうで給ふ折から。尋來らせ給ひ。上人に對面し給ひて。僧都此度いかして。生死をはなるべきとあれば。上人南無阿彌陀佛と唱て。往生をとけんには。あかしとその給へハ。僧都又。誰もさハ。見およふに侍れとも。念佛の時。ころの散亂し。妄念のおこりしハ。いか、侍るへき。上人云欲界の散地に。生を受もの、心なんぞ散亂せさらんや。煩惱具足の凡夫。いかてか。妄念を止へき。其條は。源空もちからおよす。ころハちりみたれ妄念ハきおひおこるといふとも。口に名號をとなへ。彌陀の願力に乗して。決定わうしやうすへしとの給ひけれハ。僧都これをうけたま

へらんか爲に。まいりていつるなりとて。やがて出さり給ひければ。はじめて對面の人の一言も。世間の挨拶のこと葉なふして。いてられけるよとて。人々たうとミ。あへりけりとぞ

一 慶長年中 東照神君。當寺に御黒印等を下したまはる。于今現然たり。又高臺院殿。并木下宮内少輔。翰墨數通あり。靈寶あまたある中に

一 聖德太子御直筆之御影

一幅

一 中將姫御直筆之御影并縫之觀音同ク稱讚淨土經

一卷

一 法然上人一紙三行之六字名號

一幅

一本多出雲守忠朝元和元年。五月七日。戰死す。則此寺に葬り三光院殿石譽良女居士と改名し。并家臣殉死の輩まで。いまに石塔あり

茶白山

○仁徳天皇。御治世八十七年春正月。御とし百十齡にて崩御し給ふ。御廟は。今の博勞町平野大明神也。其としの冬十月。陵を此所に。きつかむとありしに。いかなることや塚より巽のかたにあたりて。百舌鳥野といふ所に。葬り奉りしと也。それより此所を。荒陵といひけるとなり。あかるを。いつの比よりか。山のすかた。茶臼によく似たれば

とて。かく世俗にいひ傳へり。又元和年中。御進發の御とき。恭征夷大將軍源朝臣内大臣家康公。此山頭に御本陣ならせ給ひ。御武運益たかく。御還陣の節。勝山と殿命ありしより。于今此名を呼來れりとそ其比何れの御人やらん

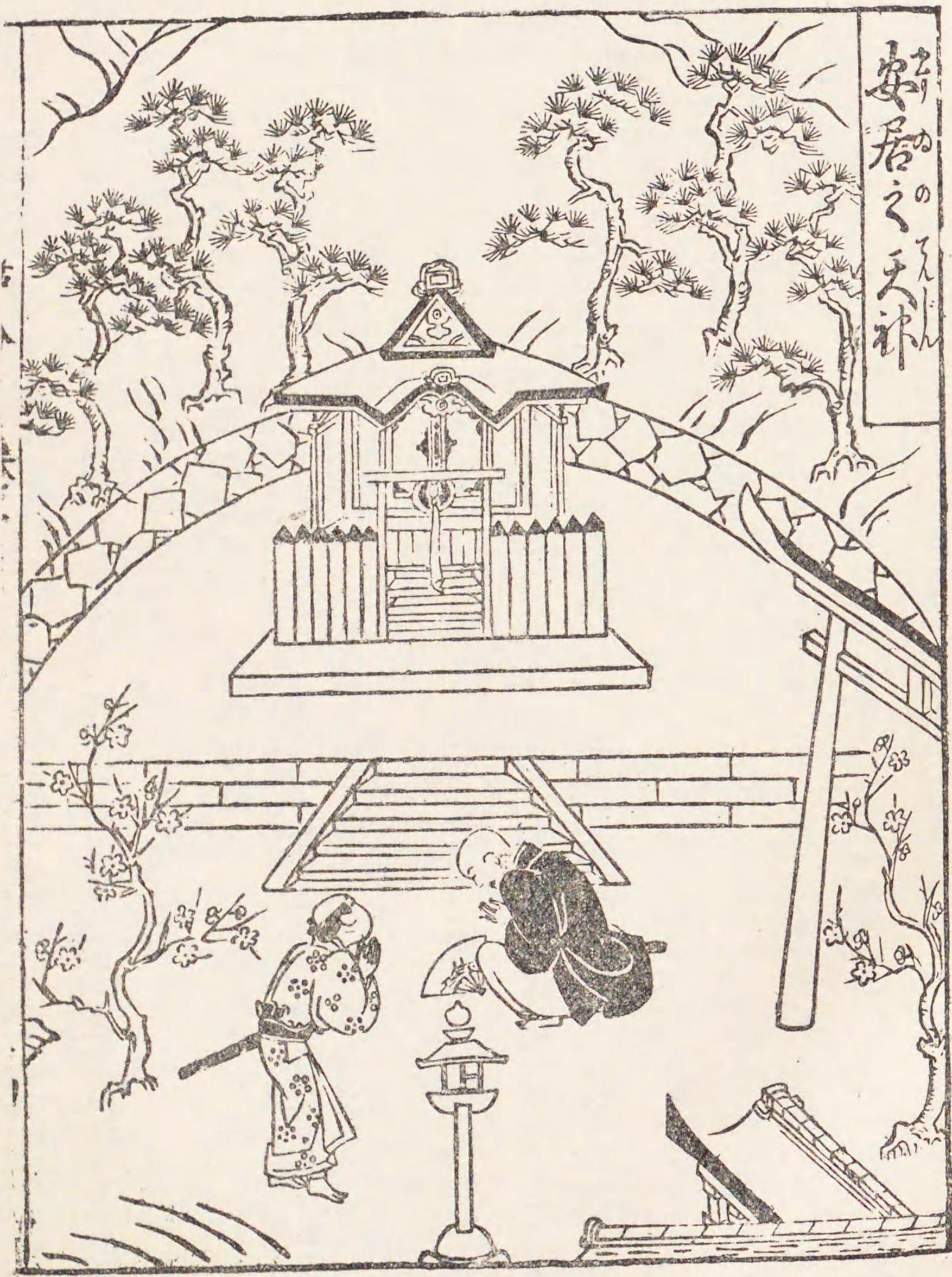
御所様はミなもとうちの茶白山引まへされん武士へなし

安居天神

○菅丞相。昌泰四年。正月廿日。太宰權帥に。遷されて。筑紫へ。ながされ給ふへきに。さたまりにければ。左遷の御かなしみにたえて。一首の歌をつらね。亭子院へたてまつり給ふ

なかれ行我はミくつとなりぬとも君志からミとなりて留めよ

法皇。此歌を御覽して。御泪御衣をうるほしけれハ。左遷の罪を。申宥させ給ひむとて。御參内ありけれども。帝遂に。出御なれば。法皇御憤を含て。むなく還御成にけり。其後流刑さたまりて。遂に配所に。趣き。左遷の罪にあつて。延喜三年二月廿五日。はかなくなり給ひ。つくし安樂寺に。葬りける。まかるに。猶讒言の御憤やます。雷となりて。あたをむくひ給へんと。都へのほり給ふ時。亡魂の御すかたを。此所にあらし給ふゆへに今にいたりて。亡魂の天神と。申つたへり。此御神の事ハ。人皆志れることに侍れども。あらく志



るし侍るへし。抑御父は。參議從三位是善卿也天。神の御名ハ。道眞。字は。三。世に管三と稱し奉る。幼して。和漢の才にとめること。父祖にも。過給へり。御とし十一歳の時。父菅相公。御髪をかきなて。若詩やつくりたまふべきかと。問まいらせたまひけれハ。すこしも。案じたる。御けしきもなくて

月輝如晴雪、梅花似照星、可憐金鏡轉、庭上玉芳馨

寒夜の即事を。五言の絶句に。つくらせたまひけると也。貞觀年中。對策及第し。段々任官あり。昌泰二年。右大臣になり給ふ。此時左大臣の左大將。藤原朝臣時平。又本院の延喜帝。御位に。つき給ひし後ハ。菅丞相共に。上皇の詔をうけて。天子をたすけ。萬機の政を攝し給ふ。ある時延喜帝。朱雀院へ上皇行幸の時。上皇延喜帝へ。仰せことにハ。菅丞相ハ。としもたけ。才かしこし。専もちる給ふべしとて。菅丞相をめて。そのむねをのたまふ。時平是を聞て。大にいかりて。陰陽師をめされ。王城の八方に。人形をうつミ。冥衆をまつり。菅丞相を。咒咀し給ひけれとも。天道わたくしなれば。御身に。災難來らす。さらば。讒言をかまへて。罪科に沈めんとおもひて。時々菅丞相。天下の世務に。わたくしあり。民の愁を去らず。非をもつて。理とせるよし。申されければ。帝さては。世をミたし。民を害する逆臣にして。忠臣の臣にあらずと。おほしめされけるよりして。配所の難に。あひ給へり。當社の御まつりハ八月廿日也。俗につたへて。芝原祭といふ。また相公。親筆の觀音經等を。靈寶とせり。定此御神ハ。風月の道を守り。殊に無實の罪を。はらし給ふなれば。たつとミても。猶

たつとむへし

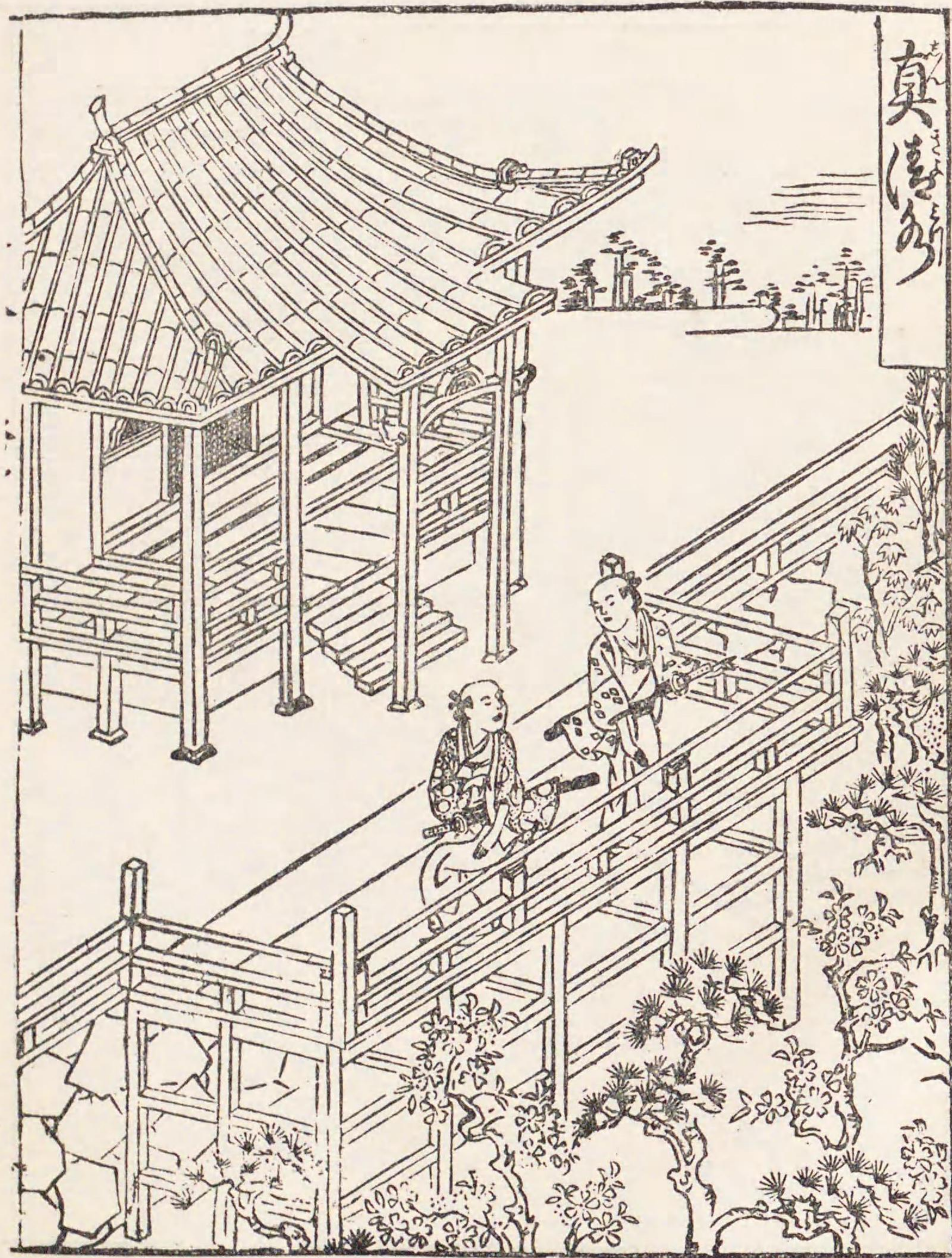
眞清水

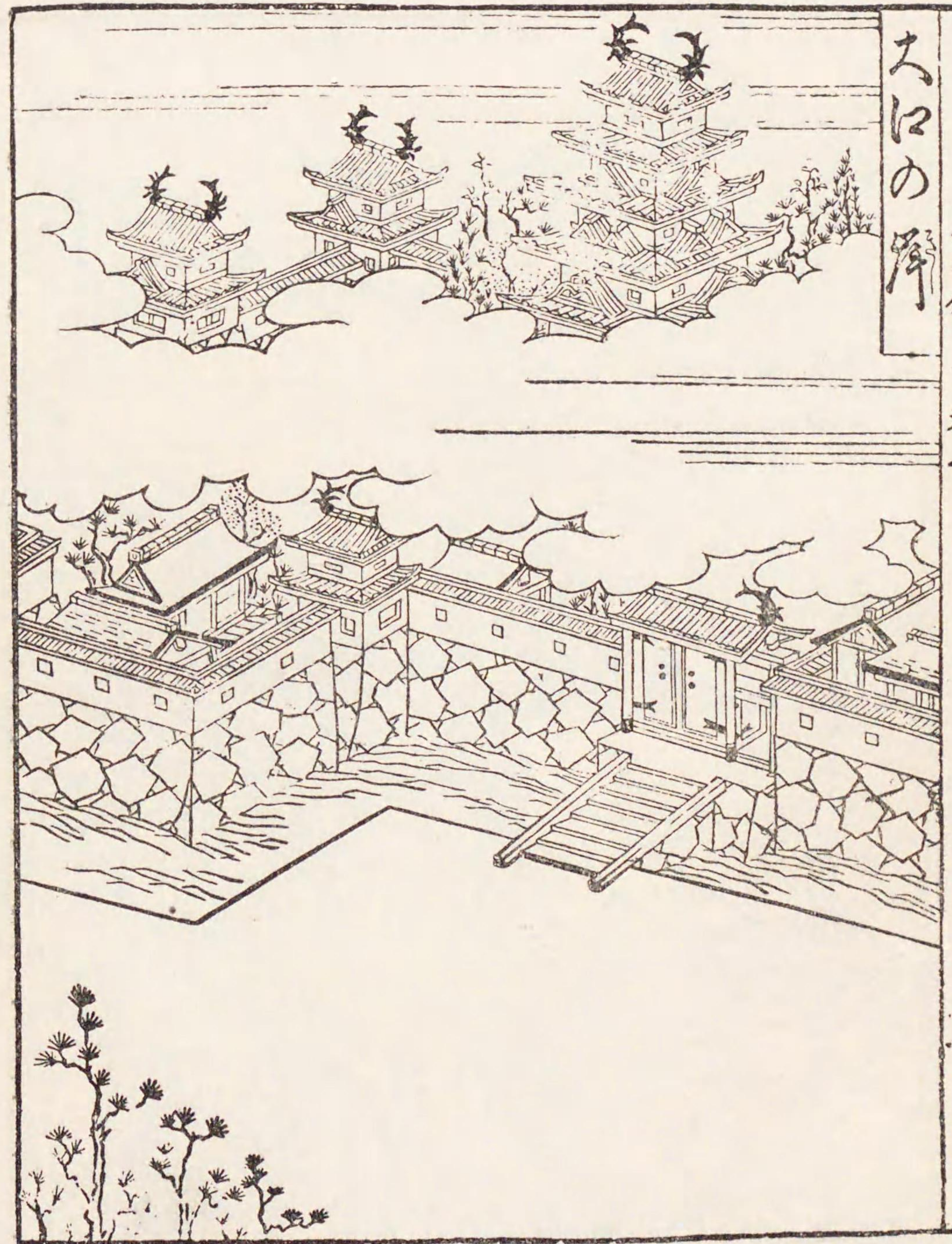
○山號有飛河山といふ。阿闍梨延海の建立也御本尊は。洛陽清水寺の。別院におへします。千手觀音の靈像を。安置せると也。則聖德太子彫刻の尊也。むかし此所に。地藏菩薩。昆沙門天の。堂閣左右にならひて。天然の勝地あり。あかるに。花洛清水寺の觀世音ハ。此二尊を。脇仕とし給ふかゆへに。其靈なる所を。靈とし。眞清水と號せり。されハ此尊の威徳を。尋ぬるに。三世如來大慈悲。皆集。一體觀世音とあれバ。諸の佛の慈悲を集て。觀音一尊の功德とし給へり。寔三十三身の。月のひかりあまねく。六道四生の闇を照し。一十九種の。御法の聲ハすべて。三途八難の眼を。さまし給へり就中千手の誓には。枯たる木にも花咲。菓生るといへば。況や。心あらん人。一心に御名を。唱奉らハ。災難をばらひ。壽福を得ん事。疑あるべからず。誰か此尊を念ぜざらんや。此地景。またあるへきとも思へれす。前にハ。淡路嶋山の夕けしき。松の葉越を詠れハ。沖漕舟の遠望。猶云にたらず

清水の手水鉢かとおもほゆるおいしミかけの海つらの景 花實庵 貞富

大江岸

○大江浦。大江橋など、歌にもよめり。あかれども。所の人の説。くだくしく侍れハ。いづこを。證としかた





し。今の眞清水より。御城の前あたりを。惣名とせるなるへし。昔日。齋宮はしめて。伊勢へくたり給ふ時は。逢坂を越させ給ふ。歸京のときは。かならず。さだまりて。立田越を経て。大江の岸を。とまりとす。つねはあれて。一代に一度つゝ。假殿をたつるを。大江殿といふ。こゝにて。御祓など。ありしと也。其所尋へし

後拾遺 渡邊や大江の岸にやとりして雲井にミゆる伊駒山かな 良暹法師

勝鬘院

○御本尊愛染明王也。并寶塔。大日如來也。此堂を。勝鬘院と。名づくることハ。聖徳太子。勝鬘經を。製し給ふ。其遺法によれるか。抑推古天皇。太子に勅して曰。太子初て。勝鬘經を。講せしより。此かた天下隆安にして。朕か身も。平穩なり。國に災害なし。朕今逢に。其經の義理をおもひ。再三すれども。遺忘あり。其文に對といへとも。猶其義にまよふ。望らくハ。朕か前にをいて。重而。疏の文を。講し給へ。太子辭せずして。香を燒。御前にして。經を張。講讀し給ふ。諸番の法師。座に侍りて聞。三日ありて竟ぬ。天皇大に。御感ありて。信受し給ふと也。かゝるゆへある御經なれハ。今に其名を残しけるか。くわしく。太子傳に見えたり。毎年水無月一日にハ。常にかはりて。參詣の老若。男女。所せきまで。羣集して夥しくそ侍る



あわうまん院

天王寺

○當寺は。人王(皇)三十三代。用明天皇の皇子。聖德太子の御創建也。太子本朝に。佛經を弘め給ふを。守屋の大臣。法敵となれりて。たゝかひにおよび。太子三度まで。戦ひ給へとも。勝利なかりしゆへに。太子多聞。持國。增長。廣目の。四天王の像を。白膠木にてつくり。御髮の中に。さしはさみて。誓て曰。我此戰に。うち勝なは。四天王を造立し給へむと也。あかるに。守屋を。本意のこごとく。亡し。佛法繁昌の。國となれるにより。玉造の岸の上に。四天王寺を立。件の像を。安置し給へり。其後推古天皇元年に。難波の荒陵の。東にうつし。黄陵寺といへり。又敬田寺ともいへり。則青龍かくれけるにより。黄陵院といふ。池もあり。太子みづから。髮六筋をぬき。佛舍利。六粒を加て。六趣に表し人間を。すくひ給へむが爲。塔の柱に。おさめ給へりと也。則。寶塔第一。露盤ハ。閻浮檀金。一千兩をもつて。鑄たれり。末代にいたりて。色變する事なしとかや。おなじく。天竺靈鷲山より。天龍に。銀を運せて。地にまかれたるゆへ。雨落くほまさるといへり。又池水の蛙の。鳴さる事ハ。此いけの底に。十丈の大蛇を。まつらしめ給ふ事。七頭これあるゆへに。息を立て。なかさるとなり。惣して。寺内の大木。金堂寶塔より。たかく生上らす。もし天にのほれとも。枝は下へさすと也。毎日。天人あまくだり。石上にて。法會をのべ。供養をなし給ふゆへ。枝へ上へさすくだと也。石の鳥井ハ。忍性といふ沙門。

永仁二年に。是を立られしとかや。されば此鳥井ハ。極樂淨土の東門の中心に。あたるといへり。西門に。二王を立らるへきに。南大門に立らるゝ事ハ。太子末代にいたりて。補陀洛山に。通ひ給ふかゆへに。南大門に。たてられけると也。此二天。金剛像王は。印度より。下給ひて。みづから。力士七像王を造り給へば。日本に。作者ハなしと。云々。又此二王の上に。小鳥もさらに。飛すとかや。鳥井の額ハ。小野道風となり

拾玉 この國の難波のうらの大寺の額のめいこそまことなりけれ 慈 鎮

同 難波津に人のねかひをみつ鹽は西をさしてそ契りをきける 同

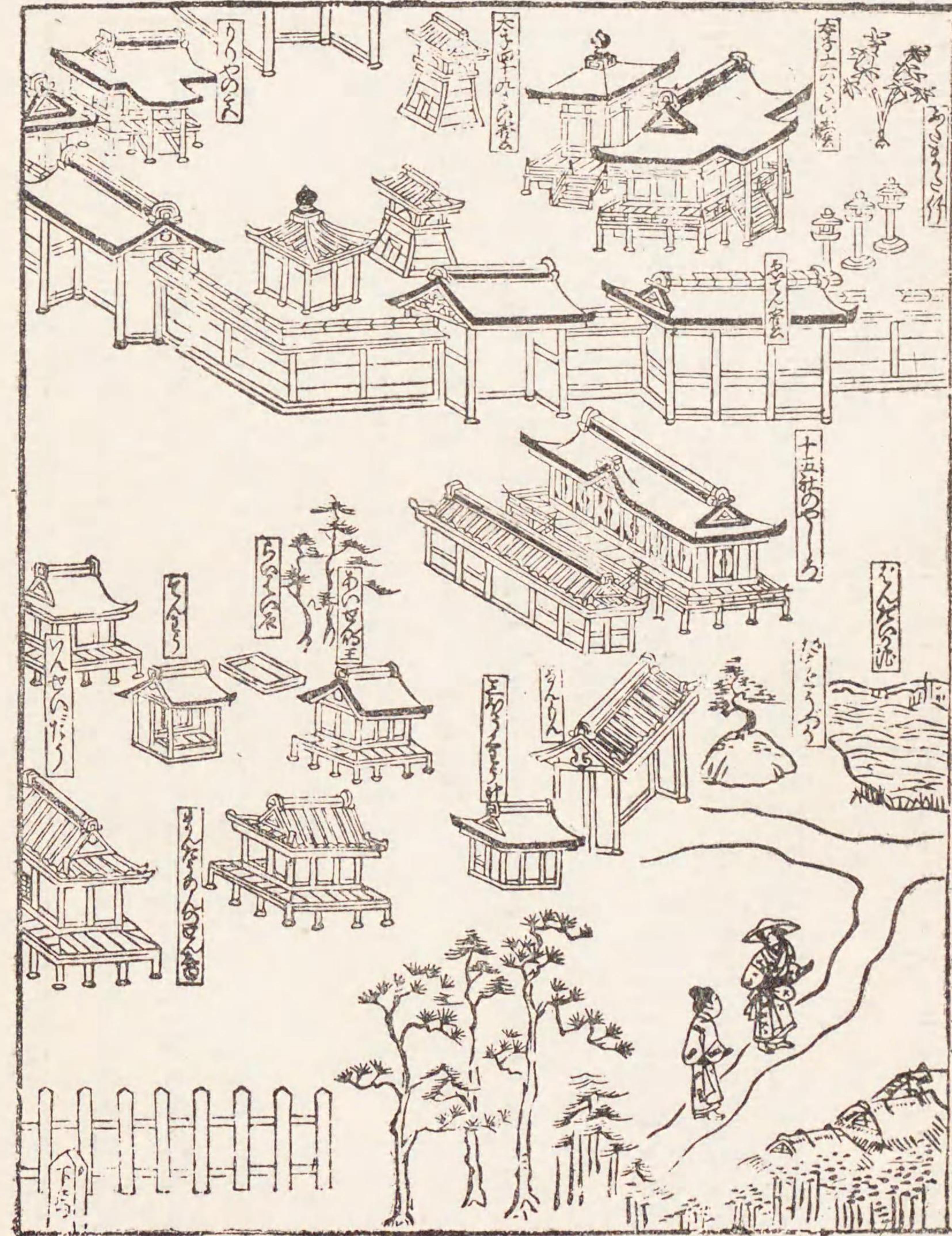
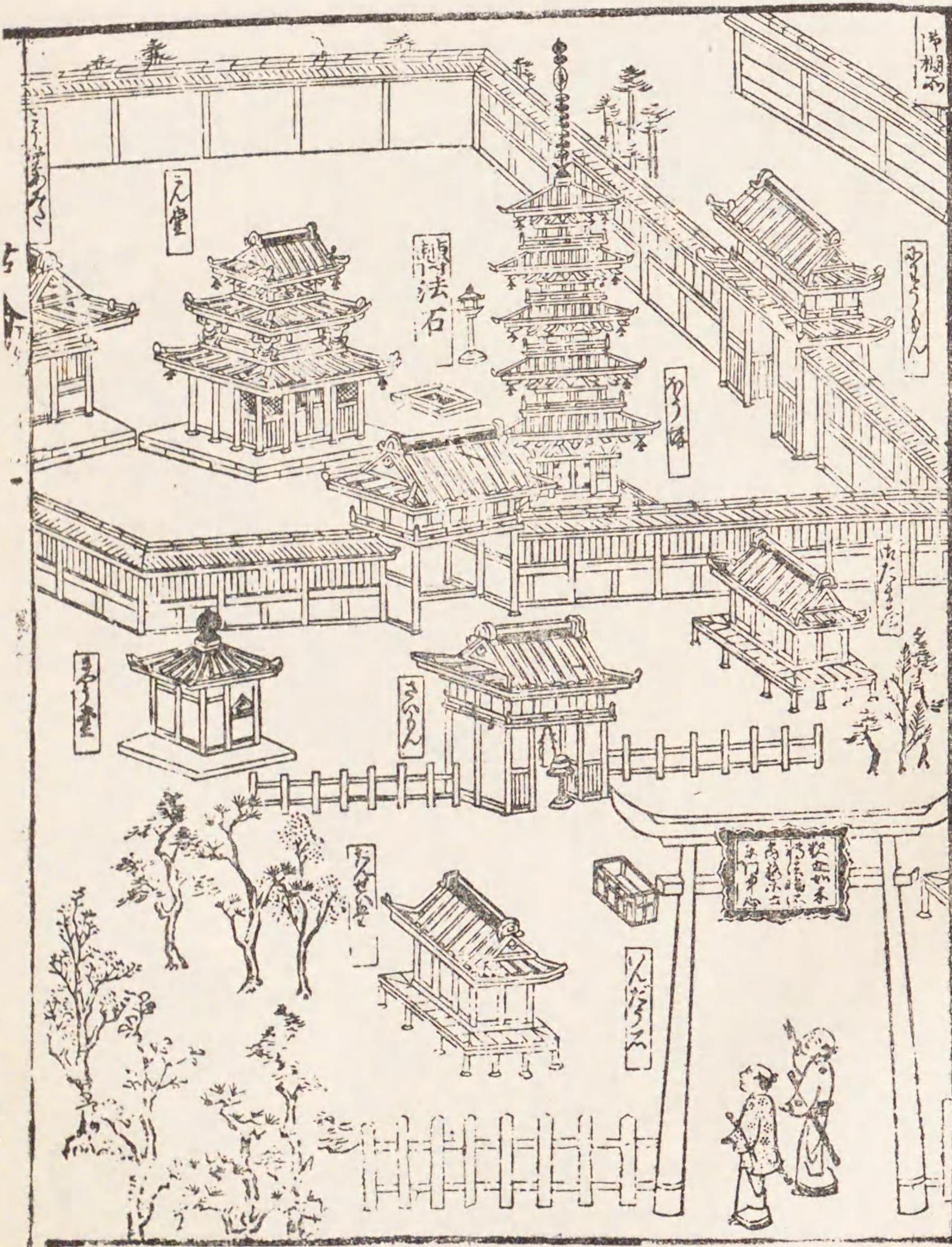
同 にしへとてむかふる君をたのむみちは難波の寺の御門なりけり 同

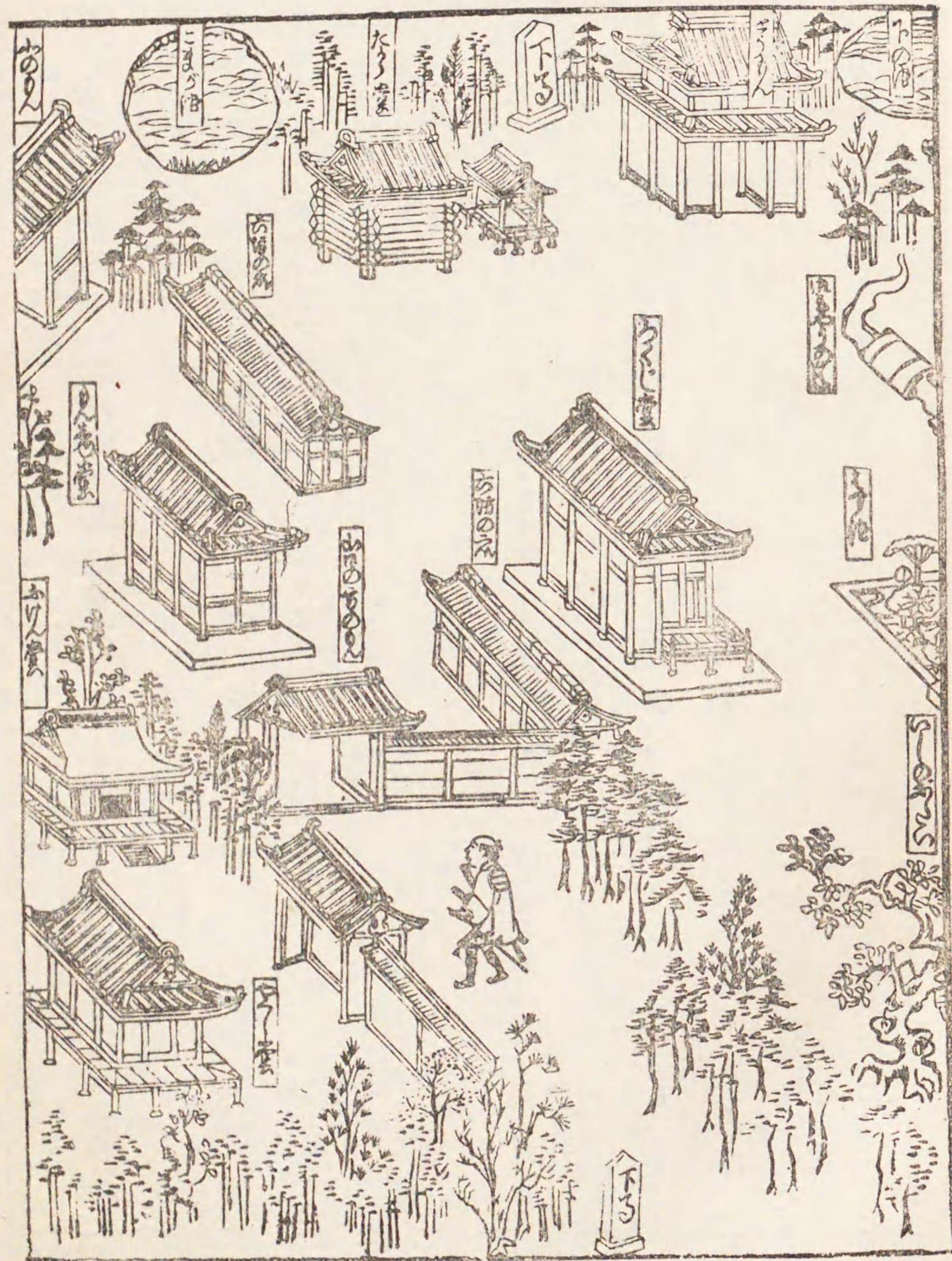
續後撰 今更に袂は玉と成ならん難波の寺の人忘れ貝 前太政大臣

新勅撰 さへりなく入日を見ても思ふかな是こそ西のかとてなりけり 安 藝

又六時堂の前の。鐘黄鐘調の。最中にて。是を二月涅槃會より。聖靈會までの。中間を指南とす。祕藏の事也とかや。寔に當寺の舞樂の。都に耻すとは。かゝる事にや。抑俗人のおこりを。尋ぬるに。黄帝のとき。伶輪といふ。樂人あるにより。今我朝に傳て。俗人といふとかや。太子御忌日。二月廿二日也。當日法會ありて。舞樂を奏しけり。其外年中行事。あるすにいとまあらず

一 當寺に。三水四石とて。七不思議とせり。猶識者に尋へし彼萬代かいはの龜ハ甲に三玉を備へたりとうたふ。





池のほとりをすきて。たたりらうのはしなと。いふところもあり

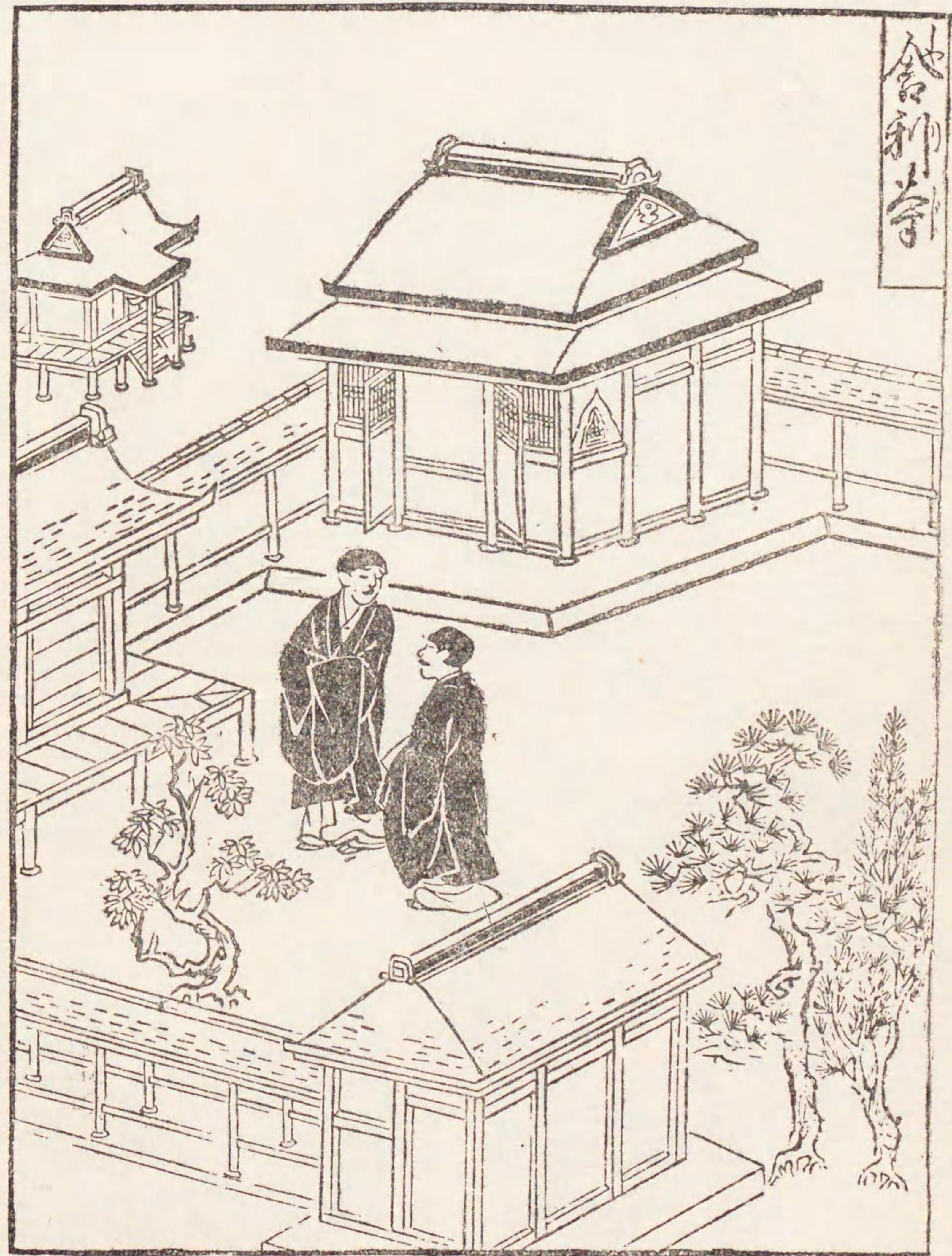
一 龜井の水。是は印度無熱地より龍宮城へ銀樋をかけ。また龍宮より。天王寺へかけたる所の靈水なりとかや。是又三水の随一と也

山家集 淺からぬ契の程そくまれぬる龜井の水に影うつしつゝ、
夫木 萬代に御法のなかれたえしとや龜井の水のきよくすむらん 俊成 西行

庚甲堂

○青面金剛のこと。世間流布の縁起に見えたれい。其趣書つらねんも。事舊りにたれと。あらましを志るし侍る。抑大寶年中。天王寺に。民部僧都住善と。いふありけり。庚甲のとし。正月七日。庚甲の日の。さるの時。いづくともなく。二八はかりの童子。忽然と來りて云。我は。是帝尺天より。御使に下りたり。日本にいて。寺多しといへとも。天王地は。佛法最初の靈場なれば。彼地より。諸佛ひろまる也。あかる間。今民部僧都に。庚甲の祕密を。傳受すべしと。云々あかるによりて。今諸國の庚甲の。本寺とあふくも。かゝる由緒あるによりて。なりとかや。寔に諸人の濁仰。大形ならず。信心をなす輩に。其願成就せすと。いふことなし。たつとむへし。敬すへし





舍利寺

○堂の御本尊。聖徳太子也。此寺の來由。異説さまざまなれハ。いつれをかもちひ。いつれをかすてん。されハ。聖徳太子。天王寺御草創のとき。伽藍造畢のあいた。御舍利を。此所にあつけをかせ。給ふによりて。なりとかや。まことに。此説によらハ。舍利寺と。命せられけるも。かゝるゆへならんか。されハ。舊跡の泯せんことをおしミ給ひ。寛文中。黃壁山隱元禪師。又去じとしには。木庵和尚も。此寺に住し給ひ。絶たるをつき。廢たるを。おこし。こゝろざしを。はけまし給ひて。再興ありとなん

南無佛の御舍利を出す七つ鐘むかしもさそな今も雙調 和泉式部

蘆分船第二

目録

住吉	津守	遠里小野	小町塚
名所付	霰松原	飛田	
出見濱	附角松原 荒神宮		
忘浦水			
那古海	太刀造江	安部野	
名越岡	附得名津		
粉濱			
淺香浦			
淺澤小野			

蘆分船第二

蘆 分 船 第 二

住 吉

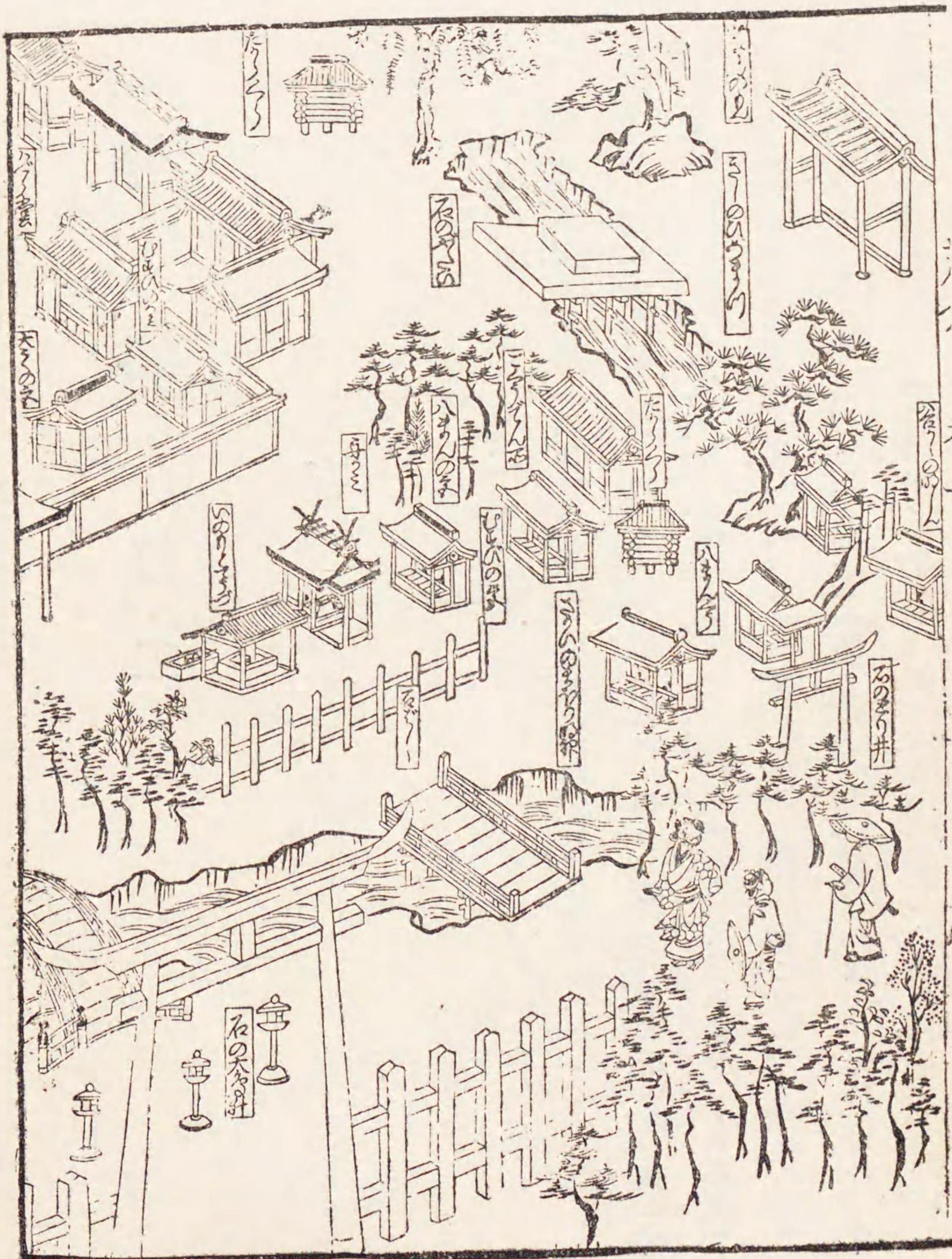
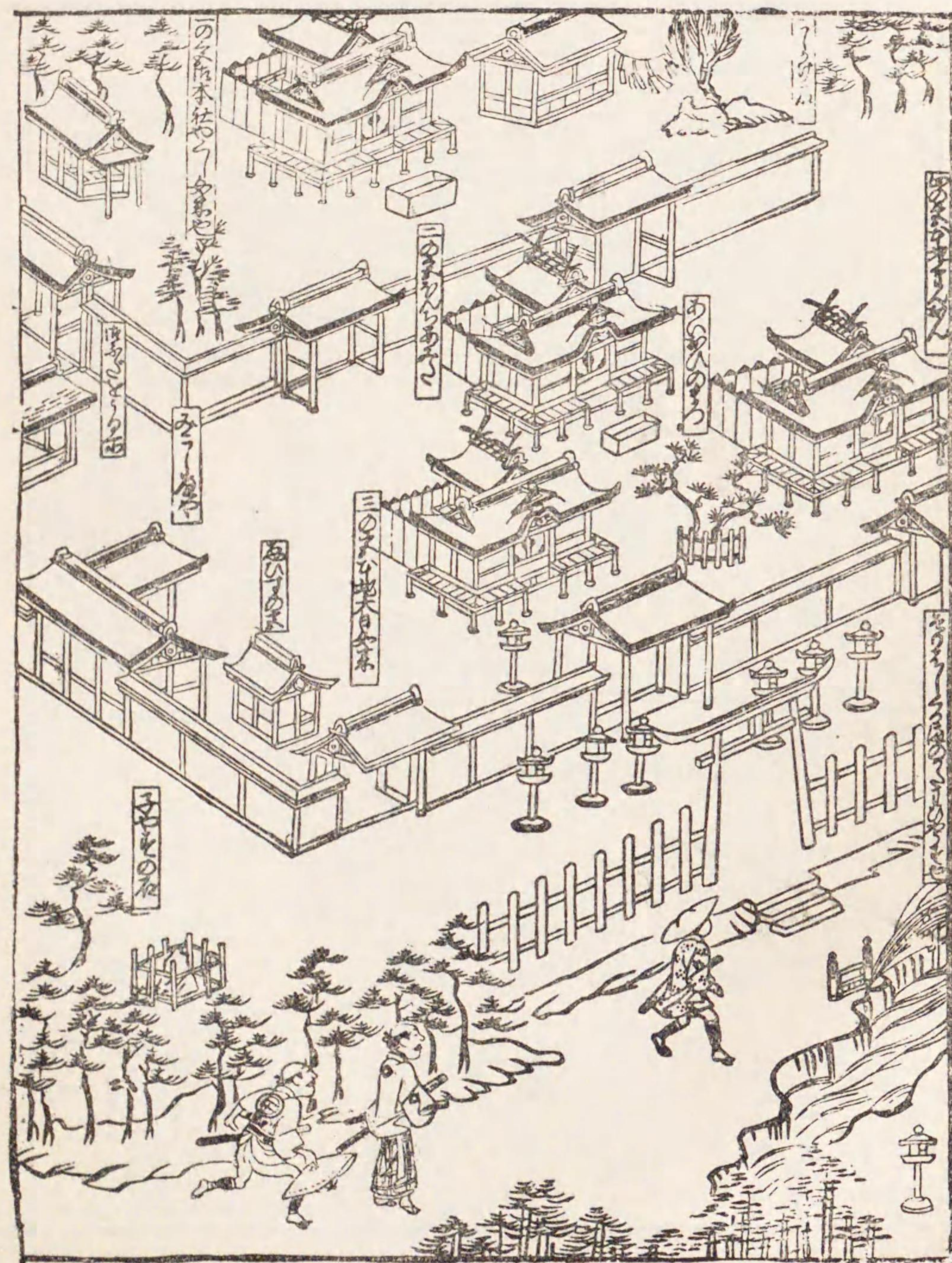
○當社ハ四所也

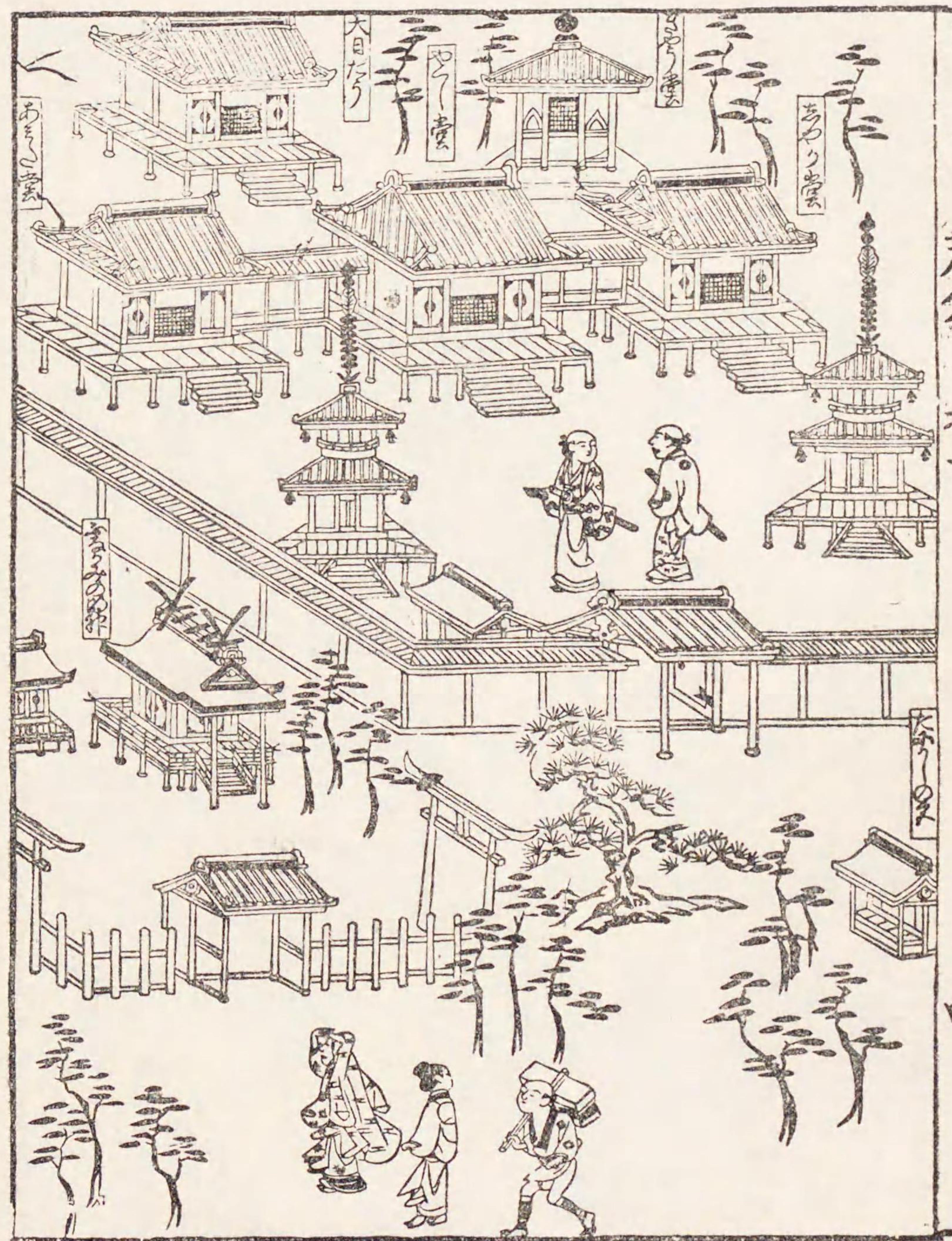
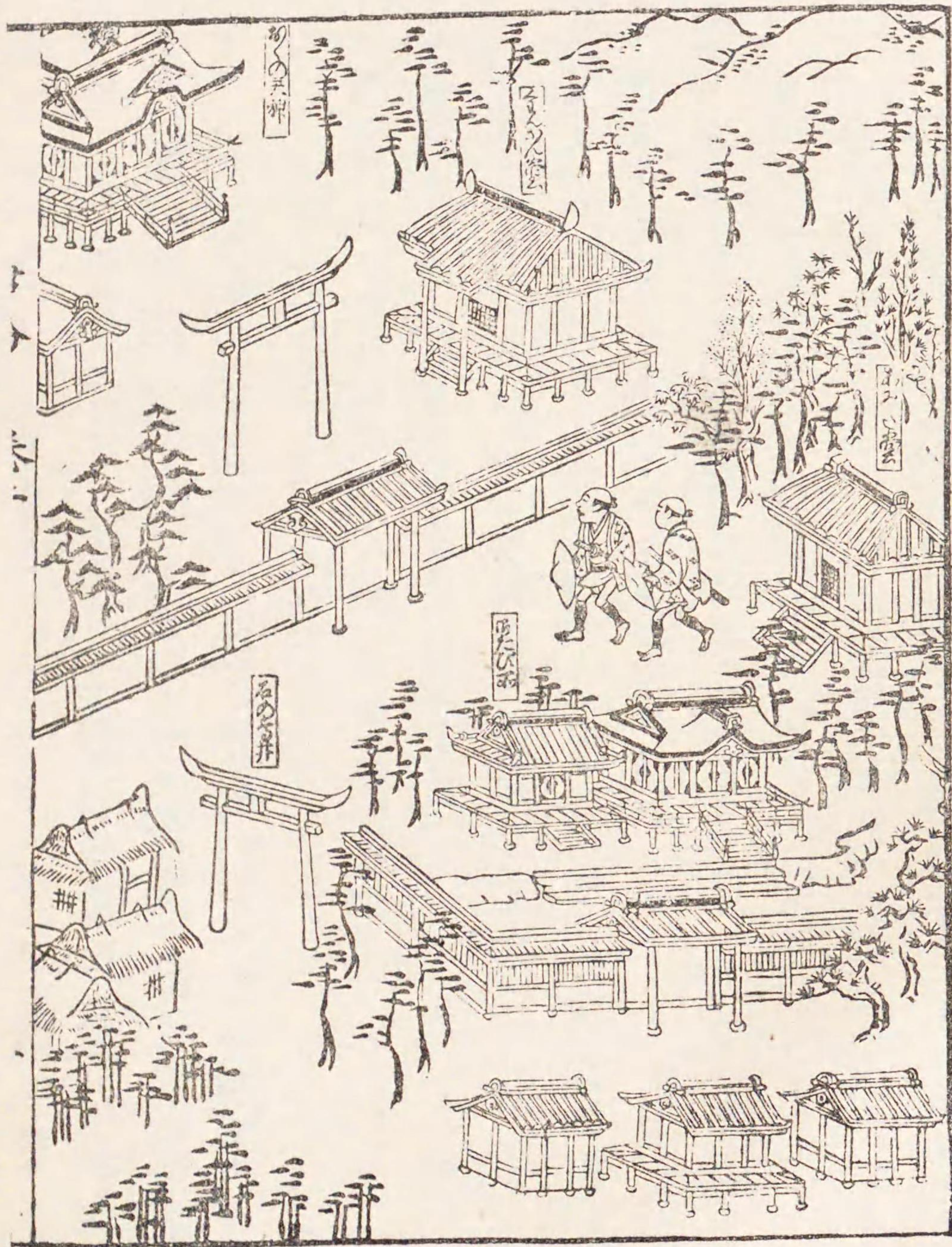
第一 天照太神

第二 宇佐明神

第三 底筒表筒中筒爲一座 第四 神功皇后又三神と神功皇后を四所共いへり

此御神の事。延喜式。神名帳に見えたれハ。今更いはむこには。あらねど。昔日伊弉諾の尊。既に黄泉に趣給ひて。伊弉册尊を。ミそなへし給ひて後。此國に立歸りて。吾黄泉火食せりと。の給ひつゝ。觸穢をきよめ給ひむがために。日向の小戸の。橘の櫛か原に。いたりて。御祓し給ひし時に。潮につれて。顯へれ給へる。御神。三ばしら。ましましけり。潮の底より。生出る神を。底筒男命と。名つけ潮の中より。生出る神を。中筒男命と名つけ。潮の上より。生出る神を。表筒男命と。名つく。此三はしらの御神。筑前の國にしては。志加の社と申





侍り。長門の國。豊浦の郡にして。則住吉の明神と申す。今此所に。跡をたれ給ふ事ハ。神功皇后の三韓を。退治し給ふ時。此三の神あらわれ給ひて。神功皇后の。荒御前の。守護神となり。御舟を。難なく。三韓の地にいたらしめ。新羅。高麗。百濟を。平らけ給ひて。皇后無爲に。還陣し給ふ。この時にあたりて。今の敷津と。いふ所に。宮をつくらせ給ふと也。又子細ありて。和歌の道をも。守り給ふと也。萬葉集第六に。墨吉の荒人神と。よめるも。神功皇后の御事也。又卜部兼直が歌に

西の海憶か原の鹽路よりあらわれ出し住吉の神
天安年中。文德天皇。當社へ。行幸あり。業平供奉。つかふまつりて

我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世經ぬらん
御神現形し給ひて

むつましと君はちら波瑞籬の久しき代よりいはひ初めてき
光源氏都より。當社へまうて給ふに。明石のうへに。あはせたまひて

ミをつくしこふるあるしにこゝまでもめぐりあひぬるえにハふかしな
猶ミをつくしの巻に見えたり。抑ミをつくしといふハ。難波津にはしめて。立けると袖中抄にあり。まかれとも。其年代。いつといふ事あらず。能因か歌枕に。水の淺き所に。たつる木を云と也。また蛙の歌のことを。尋ぬる

に。いにしへ紀良貞。此社にまうて。忘草をもとめんとするに。美女にあひて。來會を。契てわかれけるに。後
の日。またこのうらに。行けれハ

住吉の浦のみるめもわすれねはかりにも人にまたとへるへき
其外古歌多し。寔に松の隙より。詠やる海つらのけしき。淡路嶋山の遠望。いかてかいひ述ん。さて又年中の神
事。さまざまありといへとも。悉くハいはず。いつれの時よりか。傳へけん。年こと。五月廿八日。堺の遊女き
たりて。早苗とる事有。是を御田植といへり。又御祓ハ。六月晦日也。是諸人のあれる事也。長月十三夜。神前
にをいて市をなす。名づけて。寶の市ともいへり

神慮やへらく國の田哥哉

立 仲

名 所 付

○住吉のあたりを。見めくれバ。其名ある所かちにして。ふるき歌を。たよりとして。彼見ぬ世の人の。跡をま
たひ。日くらし尋ありきて。硯をならし。筆を染書出し侍る。いよく。後の君子の考を。俟もの也
岸 野 夫 木 夕されハ錦と見ゆる住の江の岸野の萩を洗ふ白波 右大臣
忘 水 夫 木 春の色や淺澤をのゝわすれ水たえく霞む住吉の松 雅 經

那古海 夫木ひろふてふ玉ひかるなりすみよしのなこの濱邊の焔の夜の月
 名越岡 名寄住吉のなこしの岡の玉つくり数ならぬ身は秋そかなしき
 粉濱 千首住吉やこすのとこ夏それなから岸野の草の花も忘す
 浅香浦 夫木住吉の浅香の浦のいそまくら鹽みちこすへこにあかさ
 出見濱 焔の夜ハ月のひかりもすみよしの出見の濱の在明(有)の空
 浦初嶋 夫木浪かけぬ松の梢も白妙にふりつむ雪の浦の初嶋
 長居浦 千五百君か世を長居の浦にゐる田鶴も萬代までと聲聞ゆ也
 佐比江 後撰年を経て濁りたにせぬ佐比江には玉も歸りて今そすむへき
 細江 千首住吉の細江漕出る海士船の蘆間あらそふ夜半の月影
 浅澤小野 住吉のあさ澤水のたえくゝに岸のあら田ハ種蒔にけり
 又住吉の鹽干とて。としこと彌生三日。此浦へさかい。大坂の人はさら也。洛陽よりも。つどひ來れり。されば
 當日は。曲水宴とて。盃をは。水にながす事こそあれ。船にのりて。あそふことは。きこへすといふ人あれど。
 其證なきにしもあらず。唐土にも。あれへこそ。白居易が十二韻の詩等も侍り。又舍衛國の。就伽川にて。此日
 其水をあび。河のほとりにして。逍遙すれハ。諸罪を滅すともいへり

萬葉十七大伴池主詩云

暮春風景初三日
 半江惆悵却廻船
 柳陌臨江縹絃服
 羽箭催人九曲流

流世光陰半百年
 桃源通海泛仙舟

欲作閑遊無好伴
 雲鬢酌桂三清湛

から人の船をうかへてあそふといふけふにわかせこはなかつらせな

家持

津守

○御本尊。薬師如来也。則住吉の御本地堂と也。并辨財天一社。又磯の御前ともいふ。抑津守氏と申は敷津明神の
 社務の家にて。歌人の名高し。往古後三條院すよしハ。行幸ありし時。帝みづから。遠嶋の眺望といふ題を。
 津守國冬に。下し給りけれハ

朝夕に見れハこそあれ住よしの浦より遠の淡路しま山

其外にも

拾玉 おもふこと津守の浦のもしほ草いくらあけりぬ住吉の神

慈鎮



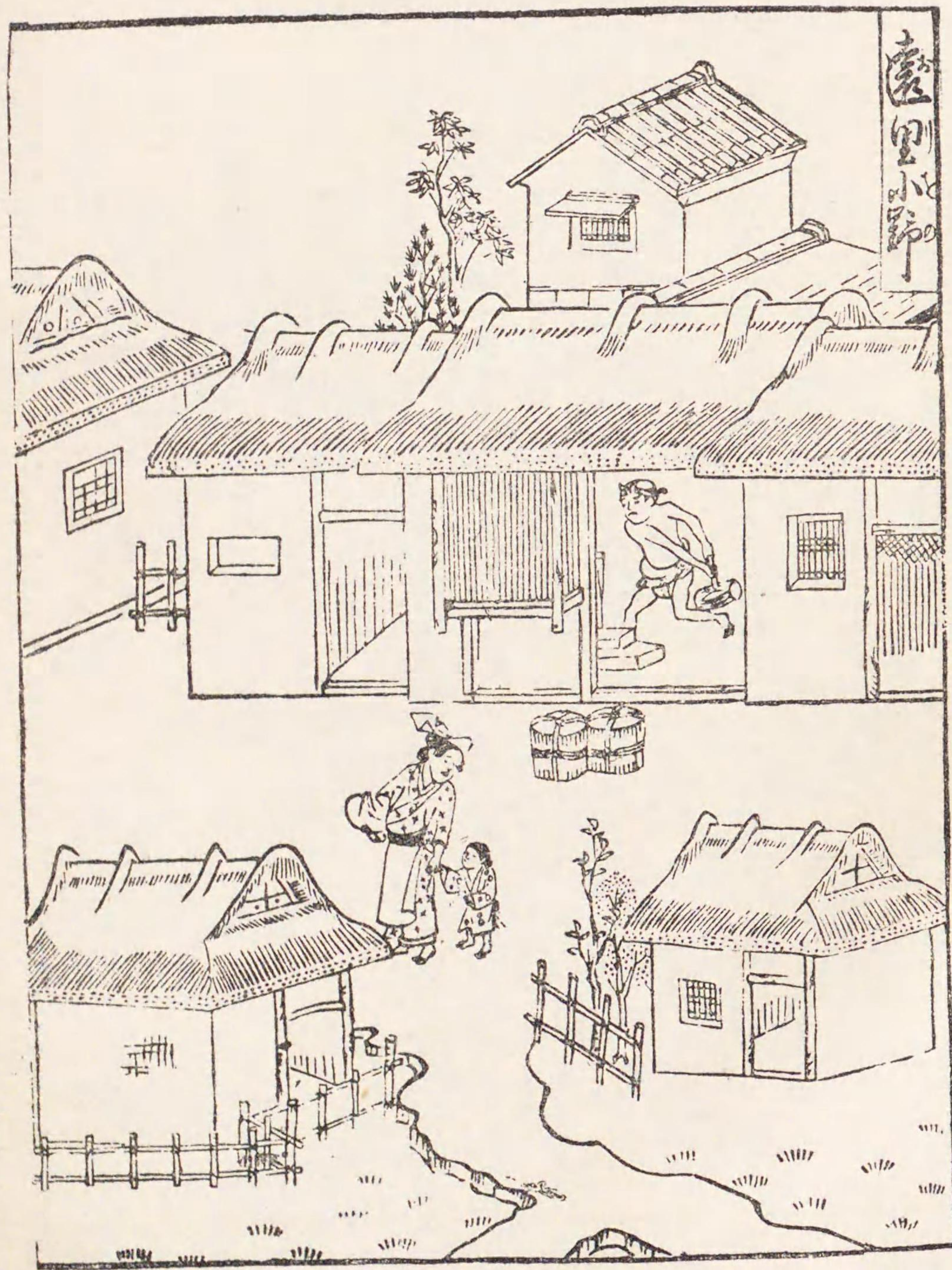
御集 行末ハ猶も津守の浦かせに曇らぬ月の影の長閑さ 後鳥羽院
かたはらに。せうさあんとして。紫野一休和尚の。すみ給ひし。舊跡あり。いろく靈寶もありとぞ

霰松原 附角松原荒神宮

○此荒神。勸請何人といふ事を知らず。ちかれとも。當所守護の神と。あふき奉れハ。邪惡魔障の難を滅除し。擁護の地となれり。つき嶋の毘沙門天。是ハ住吉の四天王の。隨一なりとかや。今ハ十有餘町の。人家軒をならべ。繁榮す。則歌によむ。霰松原。角の松原なととつ。け侍るも。此所なりとぞ
建保 さよ更て霰松原すミよしの浦ふく風に千鳥なく也 知家
吾妹にいなはは見せつなつき山角の松原いつかまめさむ 高市連黒人

太刀造江

○古記にはく。いにしへハ。善事爲江と。稱すと云々
後拾遺 萬代を君かまほりといのりつ。たちづくりえの志るしとを見よ 前太政大臣
此うた。奥義抄。其外他書にも。書出すといへとも此太刀づくりえといふは。玉づくりえといふ。所の名もある



に。よりて。たちつくり江と云所も。あるかとの事にや。是はた、太刀つくりえたるをるしとを見よと。よまれ
たると。顯昭の注し給へ今爰に。引用む事。いかしく侍れとも。名寄等にもあけたれ後の参考を俟もの也。
其外、朴津など、いふ名所。あり。猶尋見給ふへし

住吉のえなつにたちて見渡はむこの泊を出る舟人 黒 人

遠里小野

○住吉より。南の方の在所をいふなり。むかし民家ありけるやらん。春の里人。衣うつなど、つ、けたり。その
かみ。此所と。山崎にて。油をまほり。世にひろめけるといへり。山崎の名は。四方にきこえのこれども。此里
の事は。人あらず。されとも其由緒于今のこりて住吉明神の。灯明の油は。此里よりまいると也

夫木 待よひは遠里小野のあふらうりあかつきかたの皮香のこゑ

其外古歌多し。悉書載もいとまあらねは

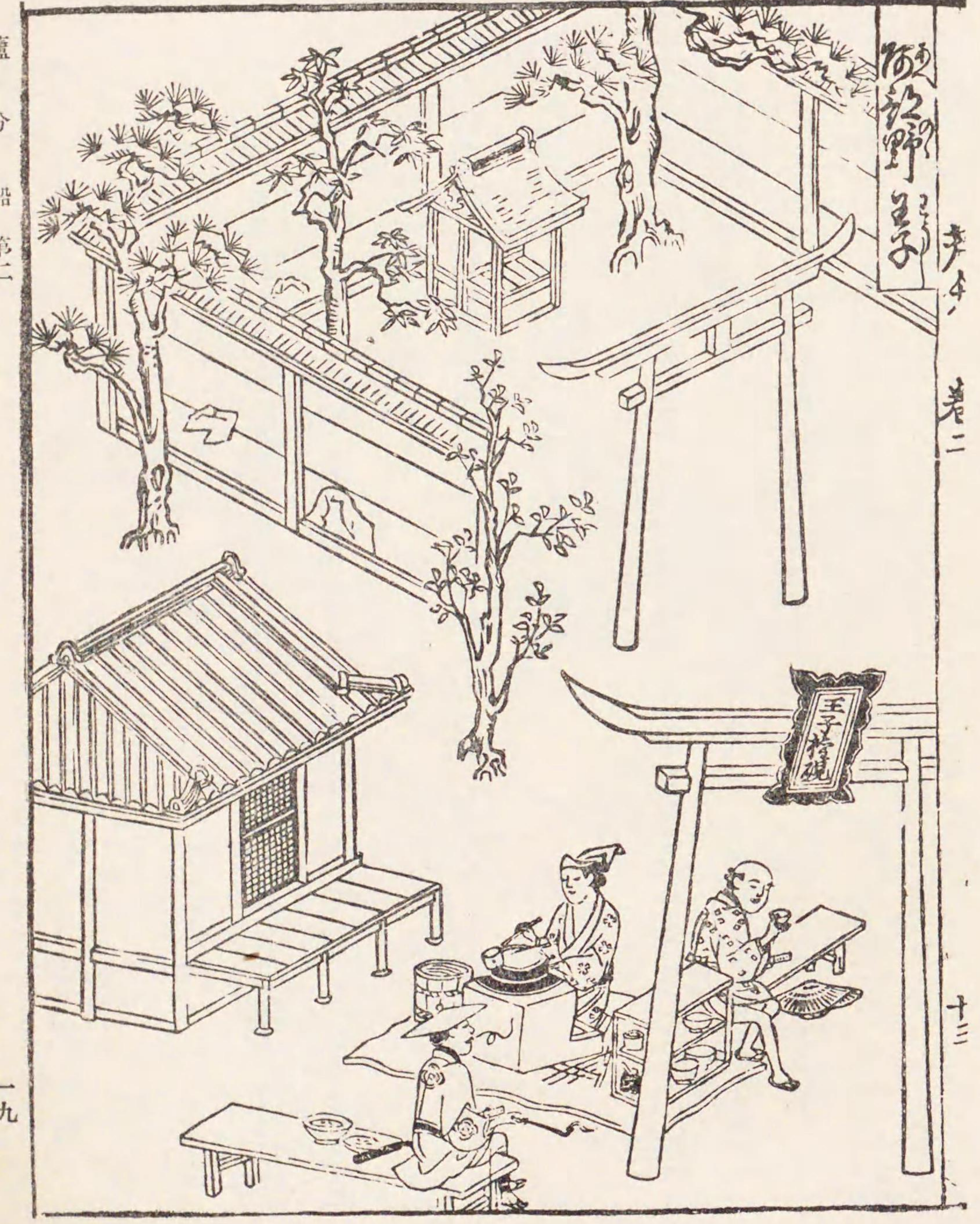
萬葉 住吉の遠里小野のま萩もてすれる衣のさかり過行 人 丸

飛田

○火葬の煙絶やらす。白骨ハ地よりもたかく。涙の雨は。あきりに。古塚の草葉の露と消にし人々をかぞへ見れ



は。たれありてのこるべき。われらか。生る間。きのふは。けふのむかし。おもへばく。蜉蝣の飛あかるに。似たり。よく。幾の日をか期せん。權花一晨の榮。おもへは。一炊のほと也。身はこれ。金石のたくひにあらず。とし月とともに。うつされて。色おとろへ。かたちかじけぬ。命は。鶴龜のたぐひにあらず。天府の壽算。をのくかきりあり。高きも。いやしきも。老死の二。たれかのがるべき。我もいついかなる日か。つねなき。風にさそはれ。つるに。消へき事をおもへは。いよくこころほそく。まことに。けふもはや。命のうちに。くれぬめり。幾日かかくて。すきつらん。入逢の鐘のつくくと。あはれにおほえ侍る。されば難波の中に。おほき人。志なさる日はあるべからず。墓所爰のミにもあらねは。送る數おほかる日はあれと。をくらぬ日はなし。されば。棺を齧もの。手のいとま得る事なしとそ。かくあだなる世とは。ありなから。たれしも。利欲の汚に。おほはれて。本心の靈性をくらし。十纏八邪の妄想に。牽れて。奈梨耶の。鐵門に鎖れ。つるに。無漏地の。實際にかへる事を。得ざる也つとめてしゆせよ。つゝしみておこたる事なかれ。人々所具のほんしやうは。唐虞の聖なるも。匹夫の凡なるもさらに一にして。かはる事なし。かれも人也。われも人也。三世の志よぶつも。もとは人なり。つとめておこなひ。すゝみて。忘す。放光座蓮へ。踵をめぐらすへからざるへし。され。佛書にも。火葬。水葬。林葬。土葬の四修あり。むかし。我國にも。土葬のミなりしを。文武天皇の御時。元興寺の。道昭を。火葬にしけるより。事おこれるとかや



娑婆てこそ男女の差別あれ骨となりてはかへらさりけり

夢窓國師

安倍野

○其むかしは。海邊にて。有つるか。家隆卿の歌にも。岩の上に波こそす。安倍の鳴つ鳥。うき名にぬれて。戀つゝそふると。よめれば也。いにしへより。此所に阿部野の王子御座す。いつの比誰人の勸請と云こと。さたかならす。然共熊野の二の王子と。申傳へり

夫木 阿部嶋や鶴のるる岩に降雪の浪にいくたひ消つもるらん 後鳥羽院

小町塚

○小野小町が事。きはめて。たしかならず。おとろへたるさまは。玉造といふ文に見えたり。其書にいはいく。予行路の次で。歩道の間。徑邊。途のかたへらに。ひとりの女人あり。容貌憔悴として。身體疲瘦せりと云々。予女に問ていはく。いつれの郷の人。たれか。家の子ぞ。父母ありや。子孫なき哉。女子に答て。いはく。吾はこれ。倡家の子。良室のむすめ也。壯時ハ。憍慢。最甚。衰日愁難。猶ふかし云々。今世俗に。うたふ卒都婆小町は。此所にてのことなるよし



極樂のうちならばこそあしからめ卒都婆なにかへくるしかるへき
 其志るしとして。今に其かたはかりのこれり。是によりて。小町塚といひならせり。玉造の文の事。高野大師の
 御作。ならざるやうにいへり。尤時代相違せりといへとも。大師御製作の。目録九十二番目に。いれりとあれは。
 疑心をなすべからず。則卒都婆小町の謠も。右の本をたよりとして。高野山寶性院有快法印の。作なりとそ
 古塚に今も狐のあなめくをのとはいはし阿部の海道

蘆分船卷二終

蘆分船第三

目録

田袋嶋	新御靈	難波御坊
津村御坊	座摩	稻荷
薬師堂 附青間池	瓢箪町	観音堂
三津寺	阿彌陀池	道頓堀

蘆 分 船 第三

田 蓑 嶋

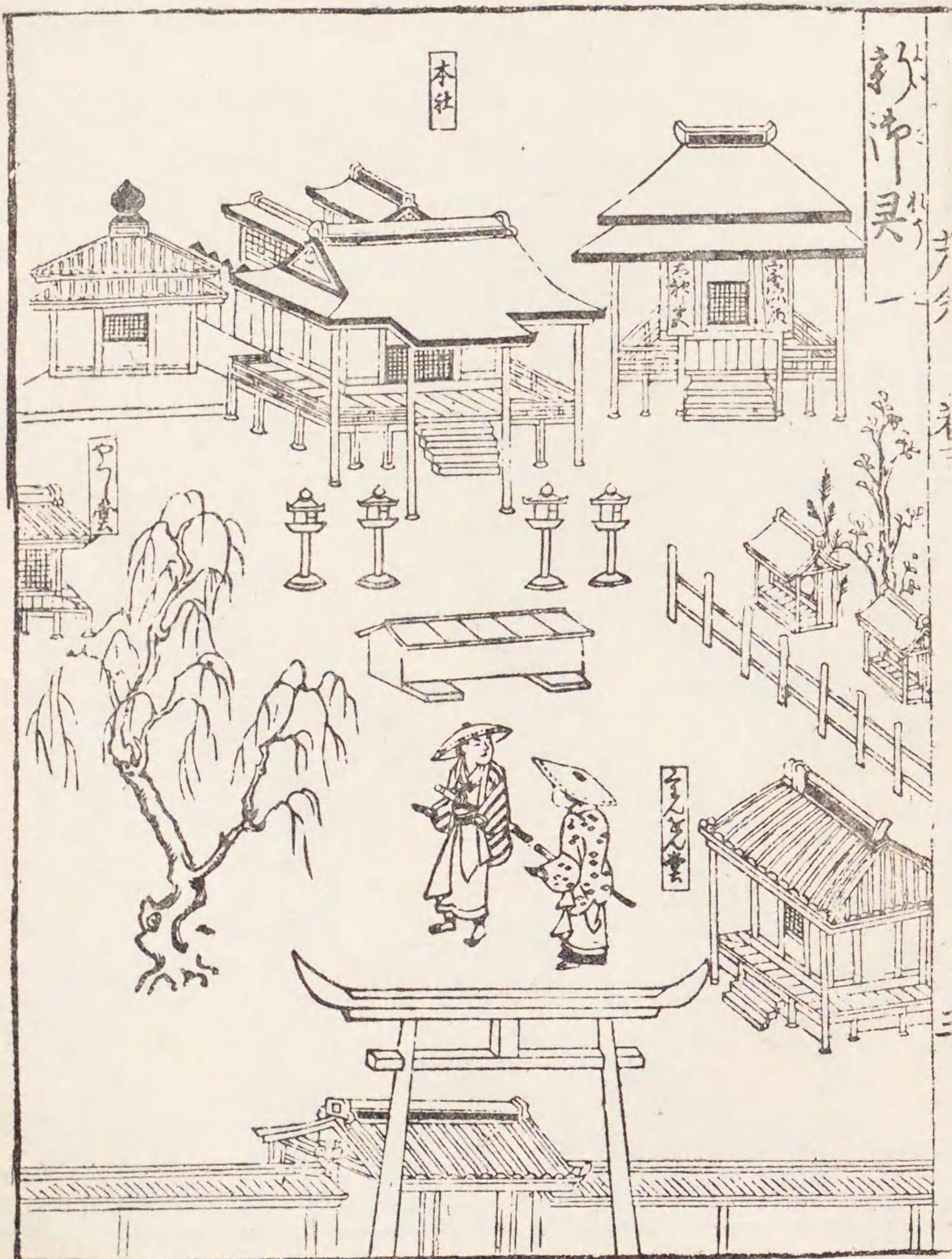
○此しまへ。天王寺のかたへらなりと。顯昭いへり。又宗祇方角抄を。見侍れは。天王寺のにし。乾のかたよりの。海邊なり。海道より。南なりとあり。又名所集に。西成の郡と。入れれり。いづれをか。證とせん。まかれとも所の人に尋侍れは。杖木橋のあたりを。田蓑嶋といふなりとまた佃村といふせつもあり後人考へし

なにはへまかりける時田蓑嶋にて雨にあひてよめる

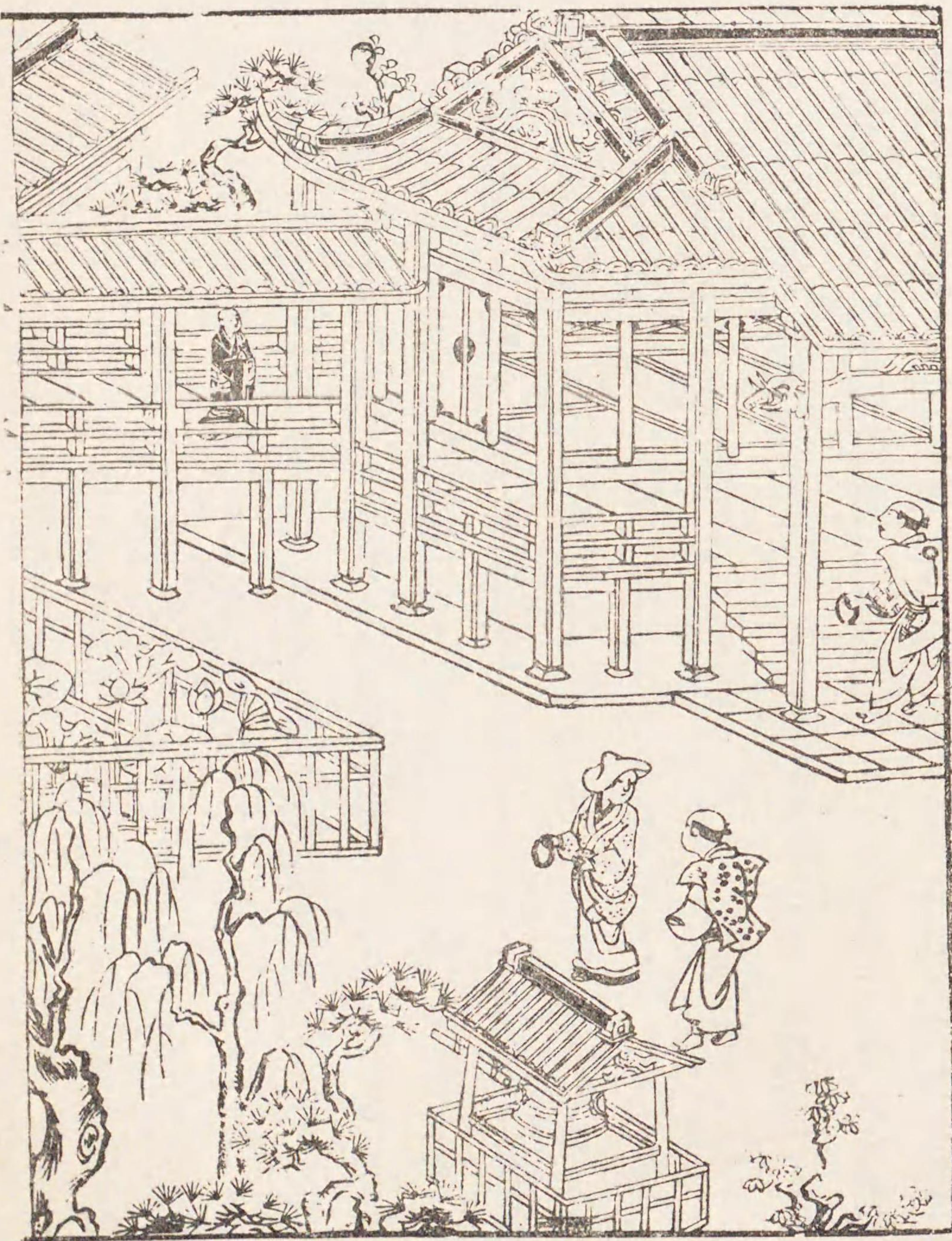
古今 雨によりたみの、嶋をけふゆけはなにはかくれぬ物にそ有ける 貫 之
建保 ふる雪にぬれてや寒き難波かたたみの、嶋の鶴の毛衣 兵衛内侍

蘆 分 船 第三

三

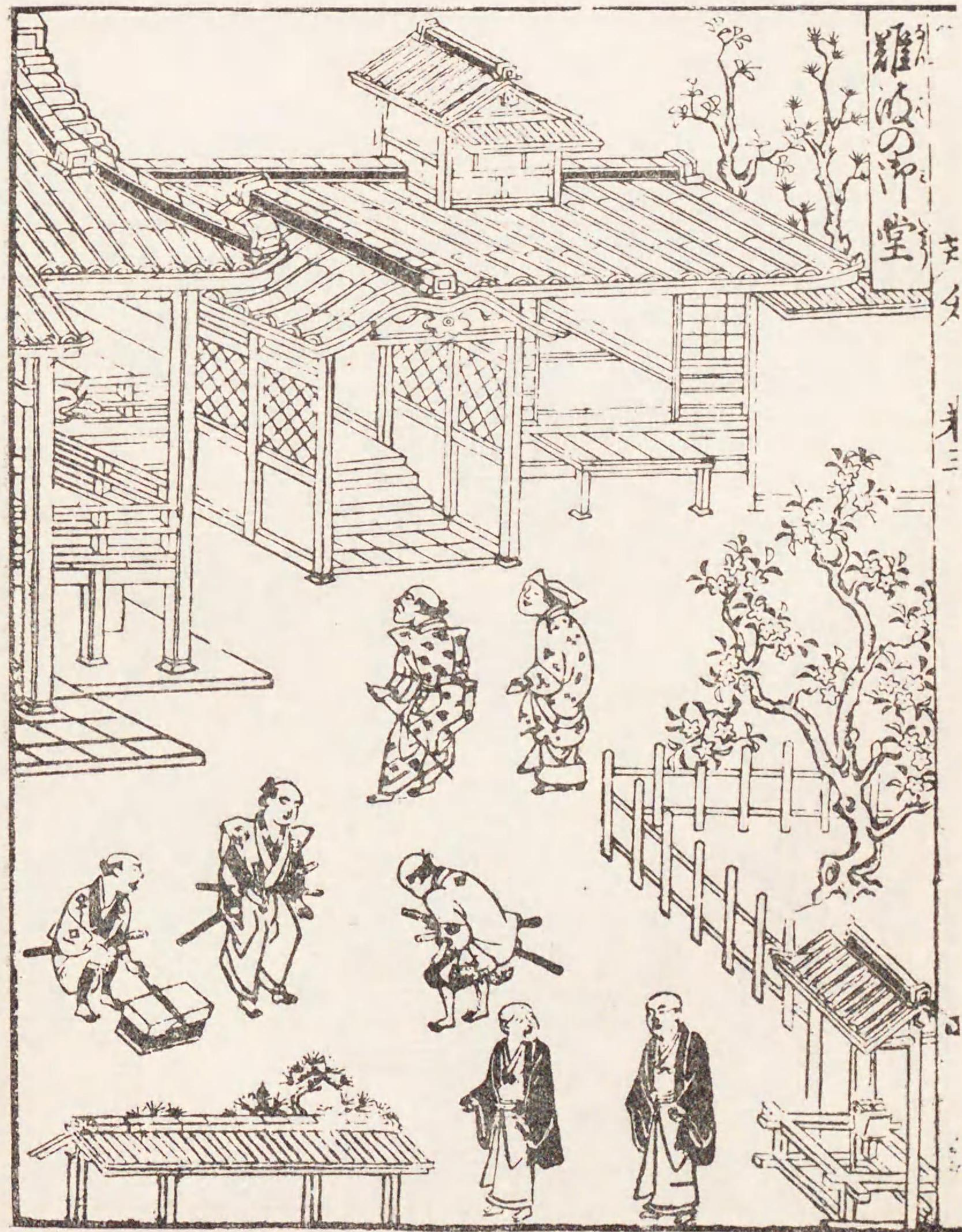


蘆分船第三



七

蘆分船第三



六

新御靈

○此社の濫觴。詳ならず。されハ。神道の奥祕ハ。たやすく。人のあるへき態ならねハ此等の御神の。種姓。あさくしく。いひ出んも。道にあらず。且ハ神慮の御内證にも。叶侍るましきとおもふから。さし置ぬ。一説に。鎌倉の權五郎。景正ともいへり。此景正は。鳥海の彌三郎に。弓手眼を射させ。其矢をぬきける時も。勇猛なりし事は。人のきふれしこと也。并十一面觀音堂あり。また神前に。をいて。としこと。正月十七日に。的射とて。弓を射侍る。またまつりは。九月廿七日也

當社南のかたに藥師堂あり。此尊ハ。弘法大師御作一并日光。月光。十二神ハ運慶靈應皆人の知ル處也。猶新坊法印の縁起に見えたり

難波御坊 東本願寺ノ末

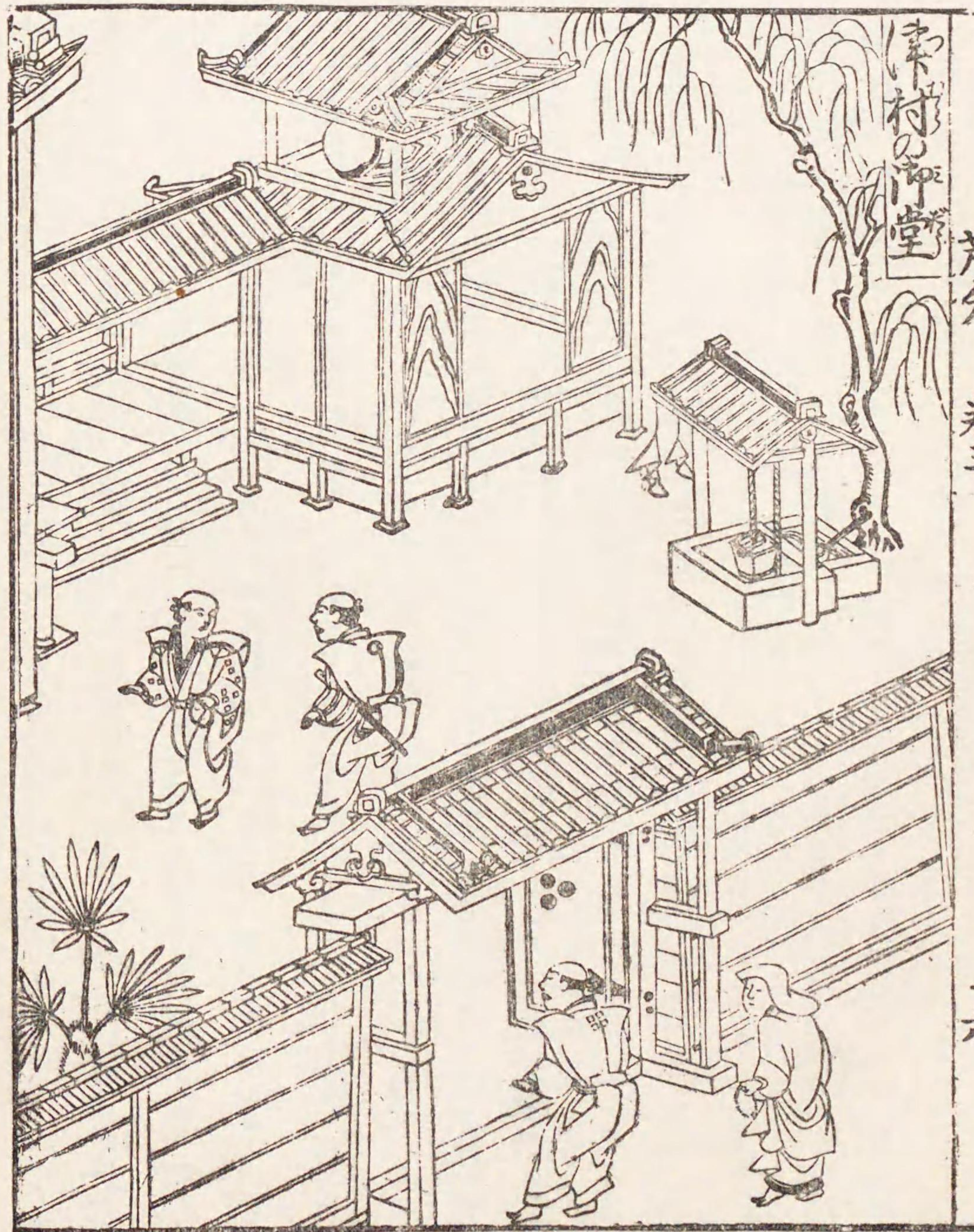
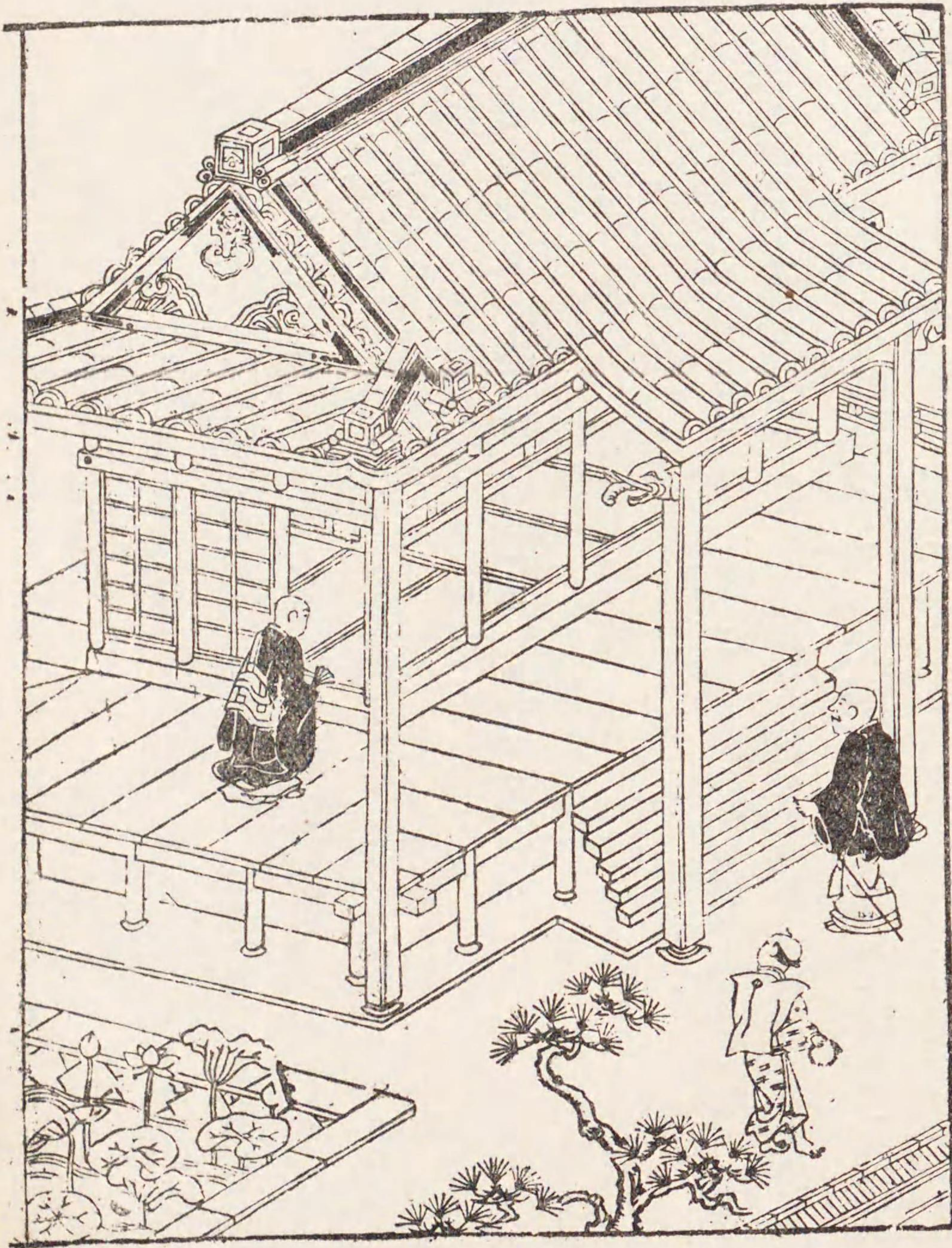
○開山親鸞聖人は。藤氏太職冠後胤皇太后宮の。大進有範の御子にてまします。承安三年に。むまれ給ひ。九歳にして。比叡山に登り。慈鎮和尚の。御室に入給ひ。御髪をおろし。其後建仁二年。御とし廿九歳の時。法然上人にたがひて法を聞給ふといへども。猶おろかなる。凡夫を濟度し給はむが爲。みづから御一流を。とり

立させ給ひ。あまねく。法をひろめ給ひ。御とし。九十齡にして。弘長二年十一月廿八日に。遷化し給ふ。(皇)八十九代龜山院仁九十一代伏見院仁兩帝より。勅願所の宣旨を蒙り給ふ。されハ。八世蓮如上人八十明應五年七月下旬はじめて。大坂石山龜が池の邊に。御堂を建立せられ。三とせの間。御止住有。證如上人の御代まで。御本寺たるのよし。傳記に見えたり。其時の御堂屋敷今の城の又石山の御坊といひし時の。手水の井戸。今の大手口。文祿年中に。道修町一町目に。御堂をうつされしか。慶長のはしめまでハ。渡邊の御坊と。いひしと也。其後慶長年中。開山より。十二世教如大僧正。今の上難波の地に。御堂をうつされ。建立の功なりしより。此かた。朝暮の勤行たゆることなく。參詣の老若。男女所せきまで。羣集して。夥しく。目を驚かす。朝時の鐘に。煩惱の夢をやぶりの。八の太鼓に。無明の眠をさます。法談聲たからかにして。もはら佛恩の深きことを。演。されハ。他力真宗ハ。是末世相應の要法とハ。古聖人の御遺戒にこそ

自力にてならぬ菩提のたねなれば彌陀にまかする身のうれしさよ

津村御坊 西本願寺末

○開山聖人の御事。東の御堂の下に。抑津村の御坊と申は。慶長七年に。開山より。十二世准如大僧正の御建立也。御本寺ふたつにならせ給ふ事は。十一世顯如上人御子三人まします



東村の堂

三

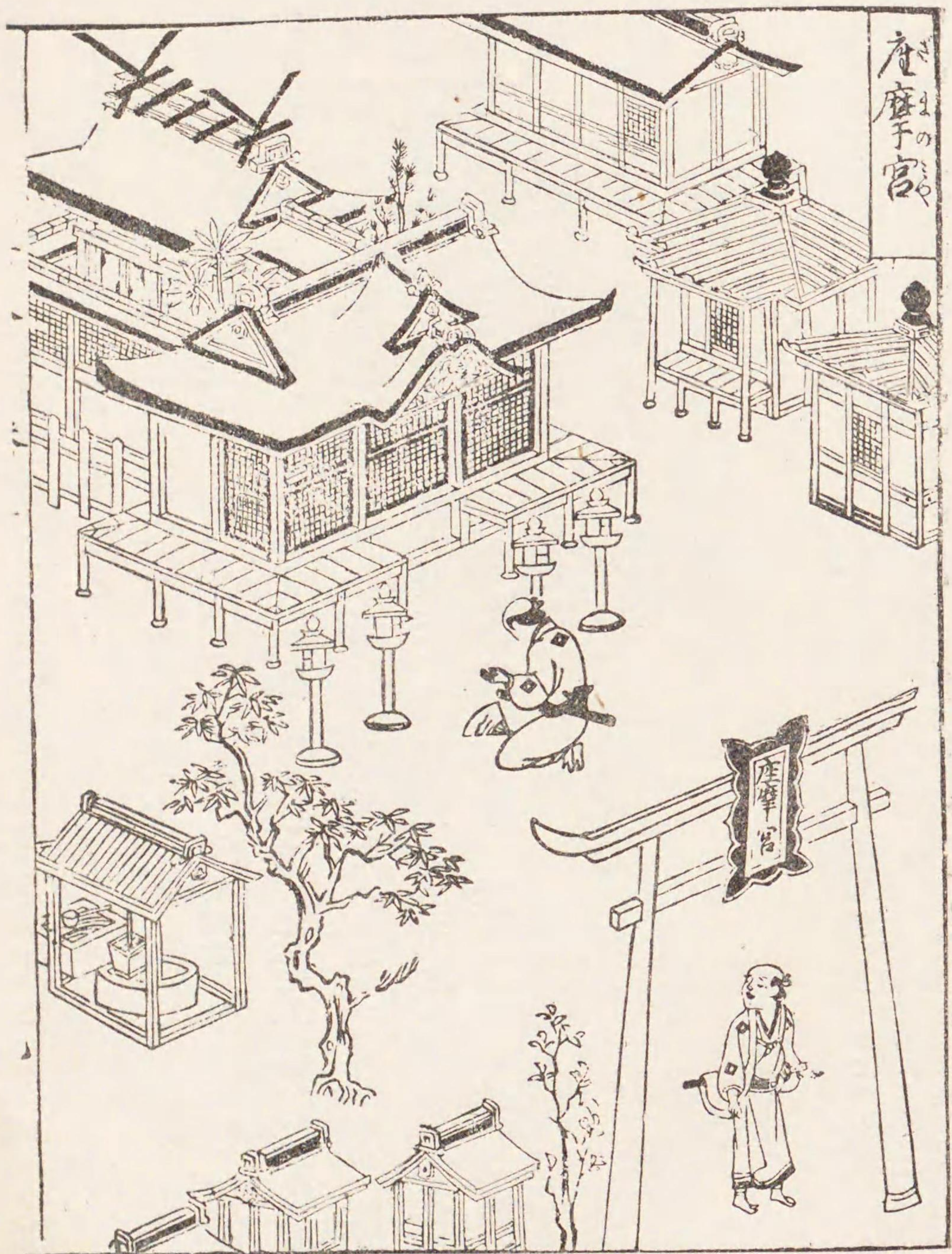
- 第一 光壽教如上人 東本願寺祖
- 第二 佐超顯尊上人 興正寺祖
- 第三 光昭准如上人 西本願寺祖

よかるに顯如上人御とし五十歳にて。文祿元年霜月廿四日に。御遷化也。其後慶長七年。東西ふたつにわかれさせ給ふよし。寺社物語に見えたり。まことに兩本願寺は 彌陀。釋迦の二尊。娑婆八千度の御來現にて次第相承の善知識と生まれさせ給ふにや。佛法ますくさかんにして。門前に市をなし。老若巷にあふる。參詣の男女一文不知の輩まで。行任座臥に。佛の御名を唱て。大悲弘誓の恩を。報ぜざるはなかりき。されば蓮如上人の御詠歌に

南無といふ其ふたもしに花咲てあみた佛に身はなりにけり

座 摩

○當社むかしは。八軒屋の邊にありしか。中比淡路町一町目にうつし。其後今の渡邊に。勸請しけると也。御神體は。底筒男。中筒男。表筒男の三座なりとぞ。神功皇后。三韓退治ありて。神功皇后十年。庚寅御歸帆のとき。はじめて。御鎮座ならせ。石上に。御休息し給ふ。今に八軒屋の時に。賤女來りて。醬をたてまつりけるとぞ。其式によりて。今に六月廿二日。御祭禮の神供に。醬をたてまつりけるは。かゝるゆへなりとぞ。彼賤女は 是



蘆分船第三

天朔女也。則當宮のうちに。いはふ小社是也。むかしは。醬料とて。田園七百六十石を。奉納せりとかや。また人皇四十八代。稱徳帝の御夢に。三座の神告たまふて

夜やさむ衣やうすきかたそきのゆきあひのまより霜やをくらん

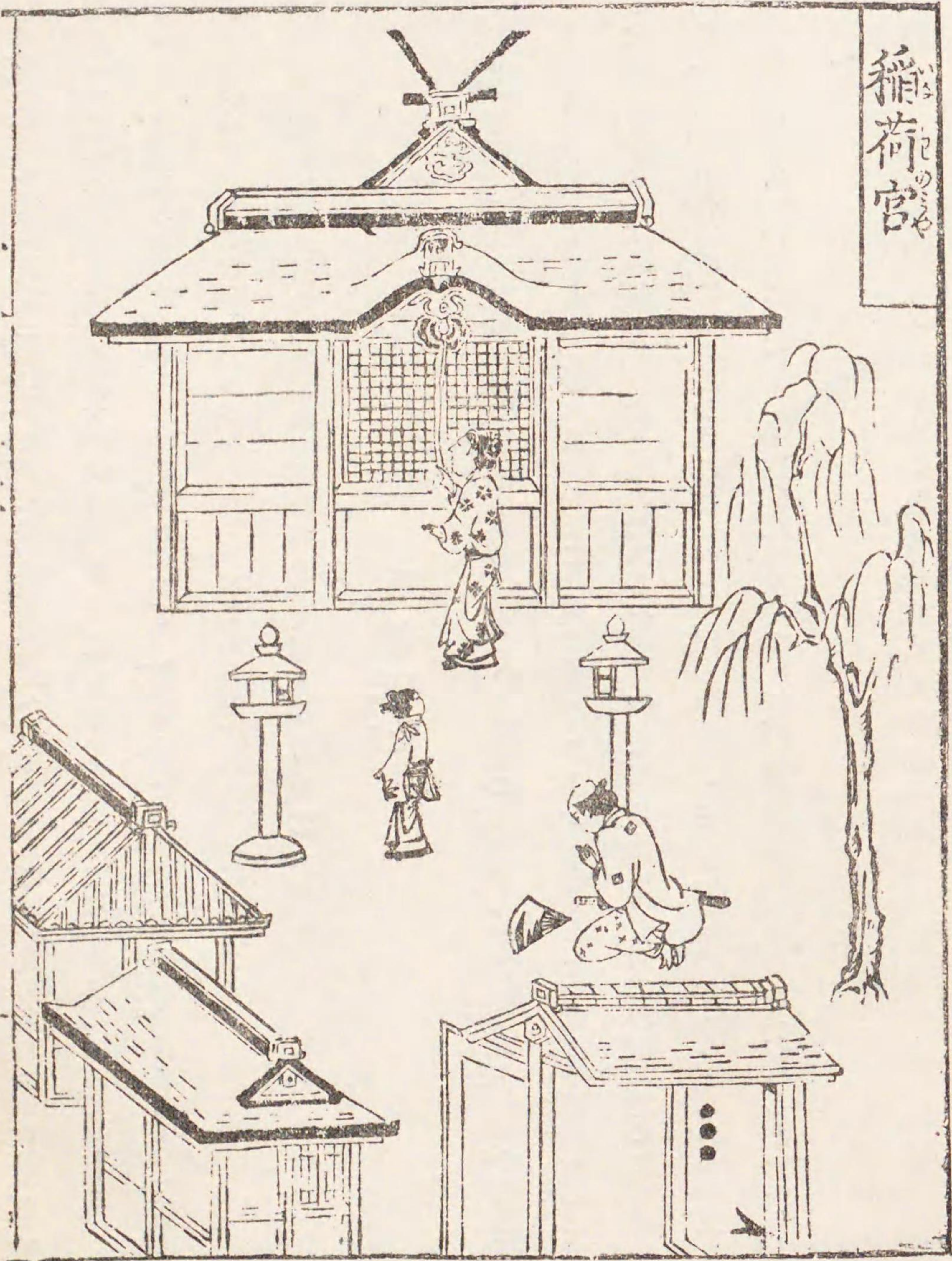
是神社の類毀を。なけき給ふ。神詠なればとて。むかしは。二十年ごとに。禁裏より。住吉のやしろを。御造營あり。此時はかならず。此社をも。つくりかへられけると也。又六十二代。村上天皇の御宇。應和三年七月廿五日。祈雨のために。十一社へ。奉幣を。さ、けられし御時も。當社其隨一なりとかや。むかしは。靈寶等ありといへと。度々の兵火に。焼失せり。またいづれの御世にかありけん。高貴徳王。座摩大明神と。勅筆をなしたる。并貞和五年。正月一日に。尊氏公より。おさめ給ふ。願書いまに。神殿にあり。又渡邊の氏族。いつかたにありとて。此宮の氏人なりと。申傳へり。由緒あること、なり

ねり物のほろミそよりもひしほをへなめてよろこぶ神のおはらへ

稲 荷 博勞町

○此所三社なり。第一平野大明神。仁徳天皇。第二祇園牛頭天皇。第三稻荷大明神也。そのかミ。上難波にハ。平野大明神を。尊崇して。上の宮と號し。下難波にハ。祇園牛頭天皇を。勸請して。下の宮と稱す。靈驗あらたなるこ

稲荷宮



と。他に越たり。七十一代後三條院。延久三年。正月當社へ行幸ありし時。一人の老翁まかり出て。道の案内を乞ふ。其名を問給へは。われは是稻荷大明神なりとて。忽に其あとを。うしなふ。是によりて。右三社の。御神あひならへて。御建立あり。并安樂寺。長樂寺をもつて。別當に附せられ。社司監物。圖書にも。齋束等をくたし給はる。此ゆへに。人ミな稻荷ある事をしりて。平野ある事を知らずとなり。されハ

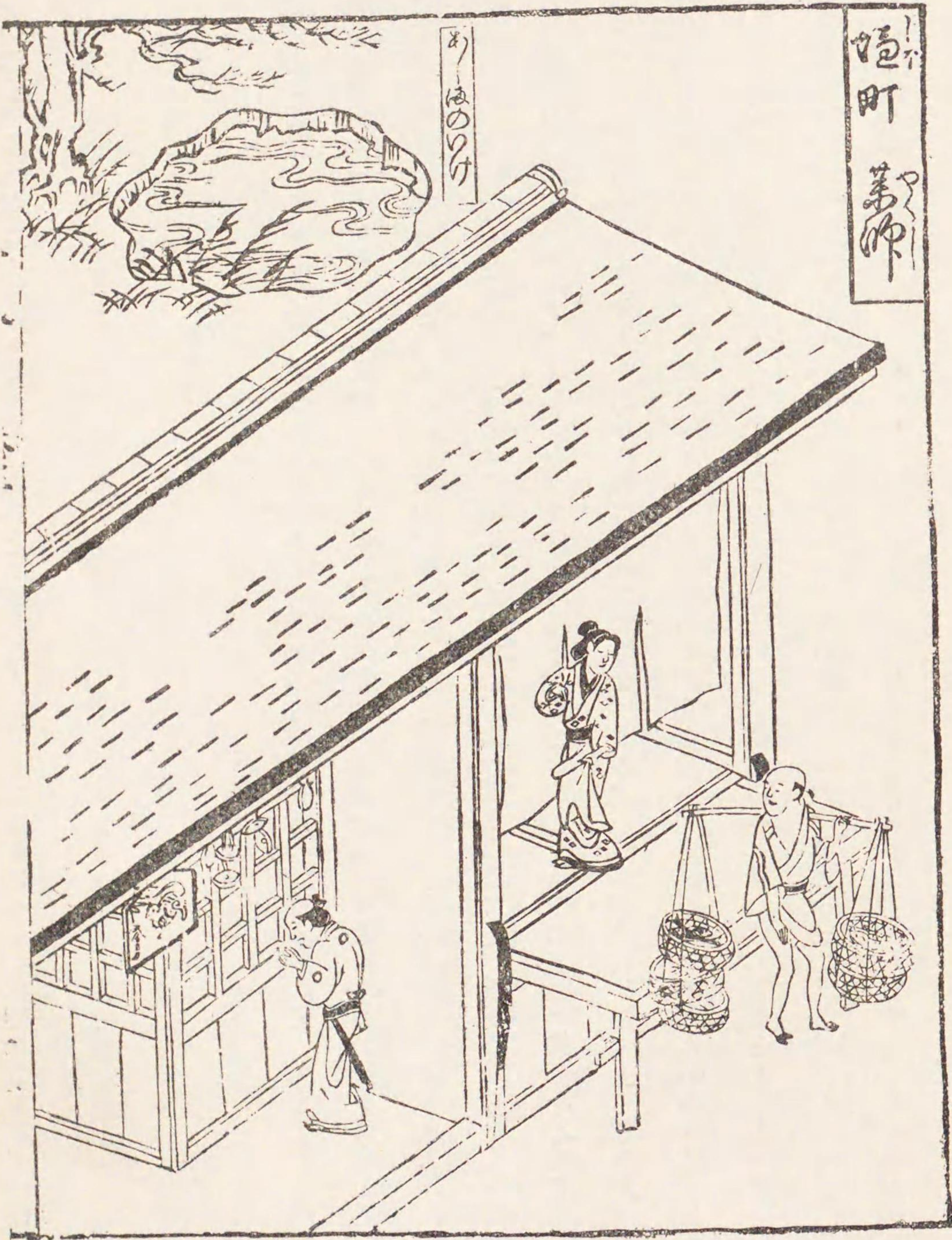
續古今
神祇

難波津に冬籠せし花なれや平野の松にかゝるゑら雪 家 隆

藥 師 堂 附 蘆 閒 池

○御本尊瑠璃光如来。弘法大師の御作也。此藥師むかしハ。此所に池ありしか。其嶋の上。安座し給ふと申傳へり。まことに靈驗あらたなるかゆへに。いまに。難波藥師と。あかめ奉るまた。此池を蘆閒か池と云人あり。宜なるかな。于今なにはの蘆とて。此あたりにあるを。見侍れば。片葉に生牙して。誠に世にたくひあらざるもの也。されは。物の名も所によりてかはるといへと。同じ難波のうちにてさへ。かゝるよしあしの違も。侍るよと先哲のあとを。あたひいにしへより。難波江の歌をつ。け侍らは蘆は見へすともよむへしといへるもかゝる名物たるゆへか

明 玉 難波潟あしまの池の水の色も淺緑にそ春はみえける 伊 勢



其外夢の浮橋。轟橋なと。いへる所なとあれと。正説たしかならざるがゆへに。其所をさして。いひ侍らす。猶尋給ふへし

瓢 箆 町

○彼まどひのひとつやめかたき。老たるも。若きも。智あるも。愚なるもかはる所なく。さまよひたるありさま。親のいさめ。世のそしりをつゝむに心のいとまなき。色の道。いとおかし。予過にし春の比夕月夜の道たゞしきに其姿を。人にあられじと。志のふの浦の。蟹のみるめも。所せく。くらふの山も。守る人まけきに。割なく通ひ來たり。あふさざるさの局格子のあたりに。立やすらひ。かなたこなたと。心をうからかし。目をよろこひしめ。遊女の。品かたちのすぐれたるを。うかゝんと。其おもさしを見やれども。其名をあらす。あるひハ。名ひきゝつたへしもあれと。其人をあらざれば。いつれをか。ほめ。いつれをかそしるへき。譽る人。そしる人共に。残らぬあたなるよに何ぞ。此たはふれをして。あそばざらんや。されば。木のはしのやうに。おもへるゝよといへる人さへ。色好さらん人ハ。いとさうくしといひ。物のあはれは。これよりそしると。詠せられし人も。いと戀しうむかしおもひ出られ侍る。あかれは。今の世の人々の。風義を見るに。我のミならず。貴賤僧俗ともに。色好むほと。學このむ人ハ。すくなく。たまゞ道に志す人あれば。あらむつかしの心學や。あら氣つ

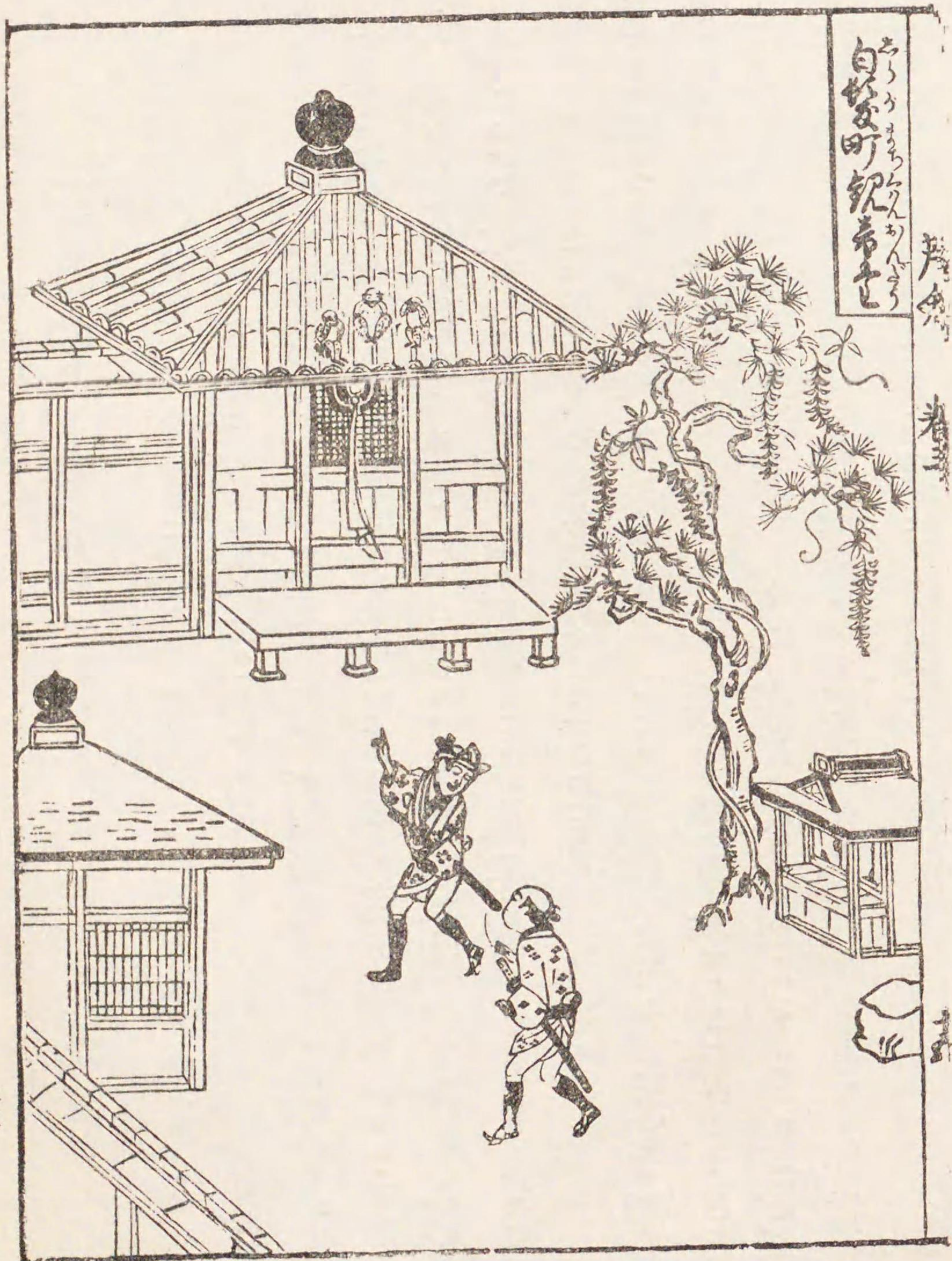
まりの佛學やくすんだ事なとハ。聞たくなひと。眠三寸見たし。一寸先ハ。闇の夜。月の夜なことも。たゞ夢の浮世に。あることなひと。うそ八百の話そくをバぬけさつたほんさまさへ。うでまくりして。八文字をふみ。おのが氣まゝに。ぬめりものゝなますをおさへた。瓢箆町といふあり。いかなるか是。顔淵汝まらすや。そも何人のかくは名付そめけん。其はしめを。きかまほしく。おもひまいらせりといと。千語文のはしぢかき。出格子に。立より。難波女のかつく袖笠に。ぬれ心ある。涙の雨をふせかせ。海士小船のこがるゝ思ひにみだれて。餘所のみるめのまけきを。はゞからす。沖のかぶろに。ことゝへば。いささら浪の音たにせず。もにすむ蟲にあらねども。我から。我ハ。さやハ。おもふなんど。ぬきんてゝ。やりてがつき聲も。きこえず。うんともすんとも。いふ人のなけれハ。さてなにとかせん。予思へらく。此所をして。瓢箆町と云事ハ。遊女共多あつまり。髪をゆふ。つとに起てハ。身をたしなミ。暮にはやみらみつちやの。高びく見えぬばかりに。白粉をぬり。門立の比をはれにと。ゆふべごとに。顔をけつらへは。夕顔をつくと云。えんによれるか。いやゝゝさてハあるまじ。元來是ハ。瓢あり。箆有。陰陽ふたつの。和合のミなかミ。天の浮橋。新町のはし。かゝる所に。二はしらの神。むまし乙女に。あへりといふより。今の世までも。たえせぬものハ。戀といふもの。實に戀は。くせものゝたね。小歌のたねを。まかせておけると。引さみせん三筋町からいとよる物ならなくにと。別をまたひて。呑盃を。つけさしにする。酒を入れてハ。お腰にぶらりとさけて出たる。瓢箆なれば。旅の空まで。身を



もはなれぬ。連理の契の数々うれしさ。百なり千なりと云心ならんか。本より。傾城と云事ハ。よそくの國から。われらか國につたへし事。今更云もくだくし。されども。世を亂し。國をそこなへる、かゆへに。傾國共名付たり寔。嬌聲美色ハ。易惑人とあれハ。ふるて。好もてあそぶべき道にあらず。みつからいまして。恐つゝしむべきハ此まどひ也

觀音堂 白髮町大福院

○御本尊十一面觀音。佛工奉開基ハ。沙門圓慶といへるガ。寛永年中の建立也。抑此尊像ハ。其むかし比叡山の別院におせしか。ある夜一覺と云。沙門に告させ給ふハ。我有縁の地。西南の海邊にありかしこに往て。廣く郡生を利せんと。あめさせ給ふにより。此所にうつし奉らんと。地景をうかふに。砌にハ潮さし來りて。浪南方無垢世界の莊嚴を移し。前ハあみだか池有て。水西方淨土の。功德池をたへ。ひがしに。三津の八幡。西に住吉大明神。いにしへより。鎮座し給ひて。擁護の稍盛也。かゝる靈地に安座せしめんと。すこしき假殿をかまへて。安置し奉りしより此方諸人信心の輩ハ。歸敬の首をかたづけ侍れハ。利生むなしからず。于今をいて誠心に念すれハ。應驗なしといふことなし



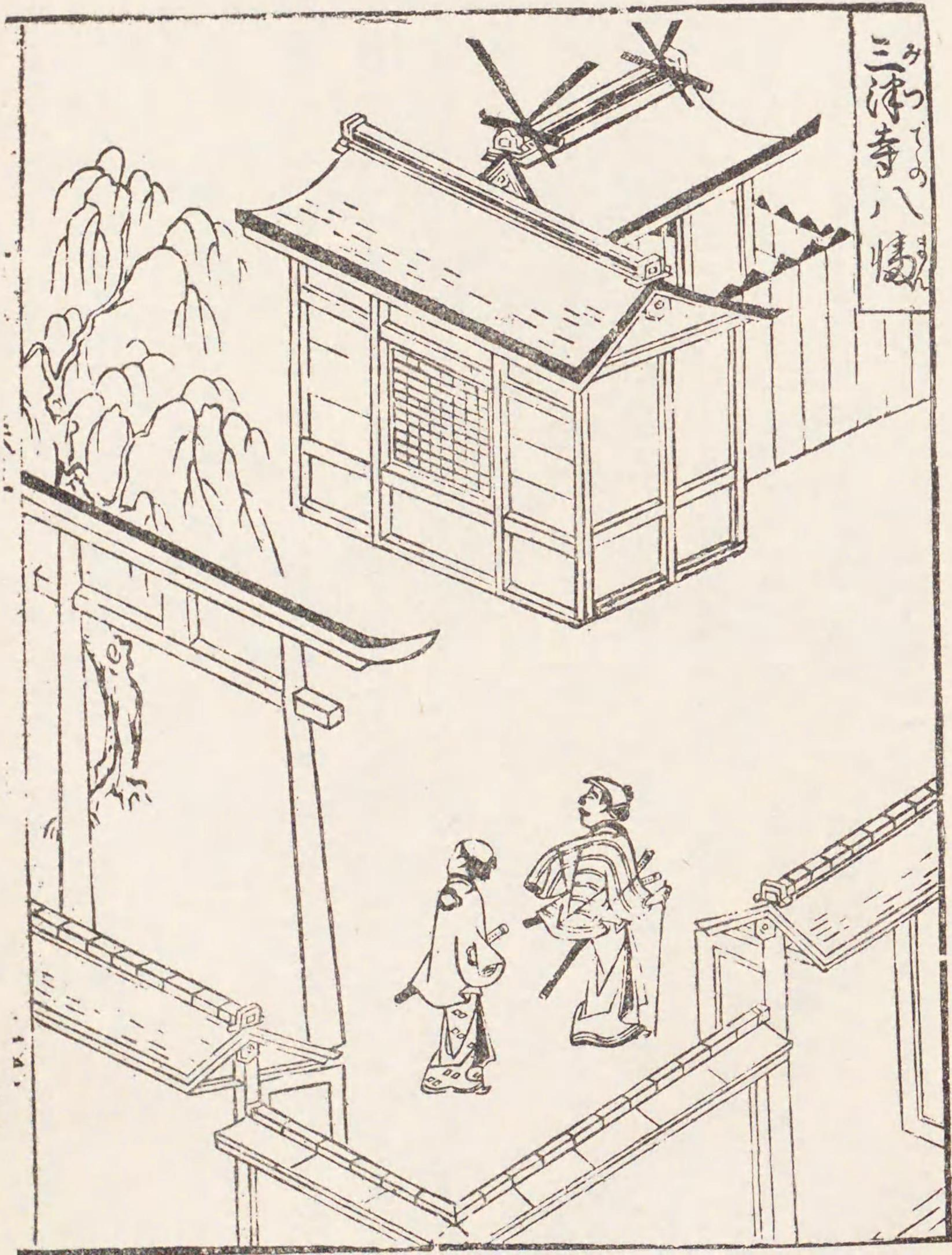
蘆分船第三

一一三

三津寺 八幡并観音堂

○當社は、應神天皇也。此帝御在位の時、難波に行幸あり。此ほとりに。寶蓋をめぐらし給ふ所となり。そもく此ミかと。神とあらわれ。大菩薩と。あがめ國々。處々に跡をたれ給ふこと。欽明天皇の御宇也。まかるに。此時。難波にいた。八幡宮あることをきかす。孝鎌天皇の御宇。天平勝寶元年。此地に。八幡宮を。建立せらるゝと也。其濫觴を尋るに。聖武天皇宇佐より。八幡を勸請し給ふ時。最初御在世の舊迹なるがゆへに。難波の三津に。うつらせ給ふ。此時にあたりて。神告て曰。三津寺ハ。是行基菩薩の止任の所也。我此所に鎮座あるへしとの。神勅にまかせ。寺を以て。宮とす。されバ。行基此所にをいて。蘆の葉のそよくを。き、給ひて

新古今 蘆そよくおほせの浪のいつまてか浮世の中にかひわたらん
 其後物かへり。星うつりて。幾の年序を經といへとも。今にいたりて。靈驗あらたなり。三津の浦。濱。松原。泊など、つ、け侍るも。皆此あたり也。むかしハ。此邊の民とも。鹽を焼。魚をとりて。いとなミとす。當社建立此かた。丹青海をか、やかし。魚恐れて出す。故に。漁人魚をとる事。あたはざるにより。其光を遮らんが爲に。海邊に筑山をつくる。其にしを。山西浦と號す。于今筑山のあと有。又傍に觀音堂あり。是又開基不分明。三津寺といふも。但所の名を以て。寺號とすると見えたり



蘆分船第三

夫木 あふことはよをへたつなと玉垣の三津の湊に手向をそする 光 俊
ゆく人の手向も見えす玉垣の三津の湊の五月雨のころ 行 家

阿彌陀が池

○三河の國の八橋ハ。名にながれて。今ハなし。こゝにハ。又四橋といふあり。それより三町ばかりにし。南商家のうらに池あり。是をあみたか池といふ。むかし佛在世の時舎衛國に。四種のあしき病ありて。萬民をなやませり。時に月蓋長者。目蓮尊者と。心をあはせ。龍宮城より。えんふたんこんをとりにて。御長一尺五寸の阿彌陀。觀音。勢至の三尊を。鑄給ひ。貴賤の病を。すくひたまへり。佛滅度の後。百濟國にわたり給ひ。一千餘歳の後。齊明王より。吾朝欽明天皇の御時。日本にうつらせ給ひ。攝津國難波のうらに。と、まらせ給ふ。今此池。信濃國の住人。本田善光夫婦都に上りけるに。如來の御告ありて。如來を信濃國にくたし奉り。一寺を建立し。今に善光寺と申けるハ。わが名に。よせしゆへなりとそ。されハ如來の御歌に

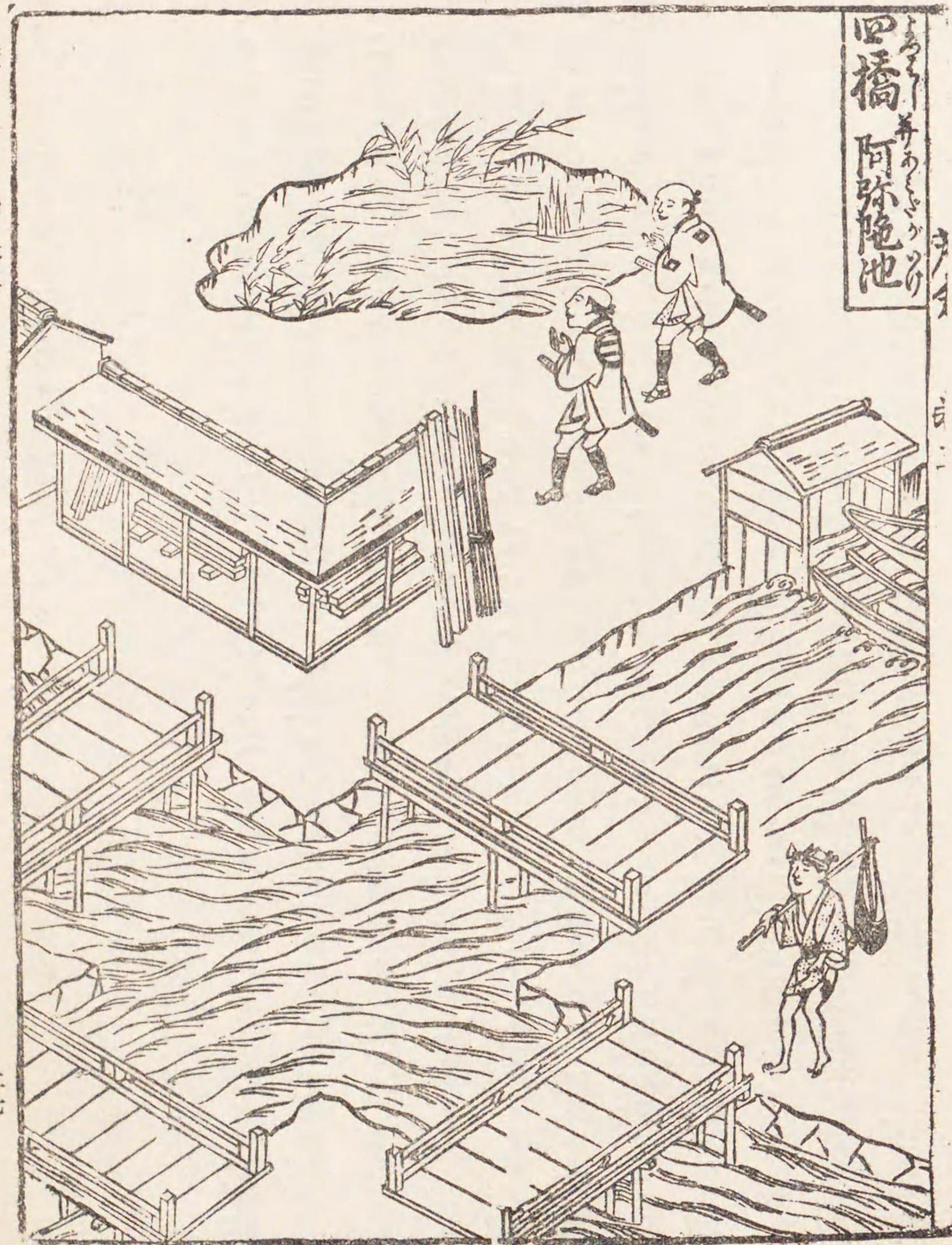
風雅集

まぢかねてなけくとつけよみな人にいつをいつとていそかさるへき

うろくすももらさすすくふふるしにはあみたか池にうかふ鯉鮒

藤原宗益

因に云。天王寺のみなみに。佛跡寺といふあり。是ハ守屋太子へ。法敵となりし時。此如來をふきつづさんとせ

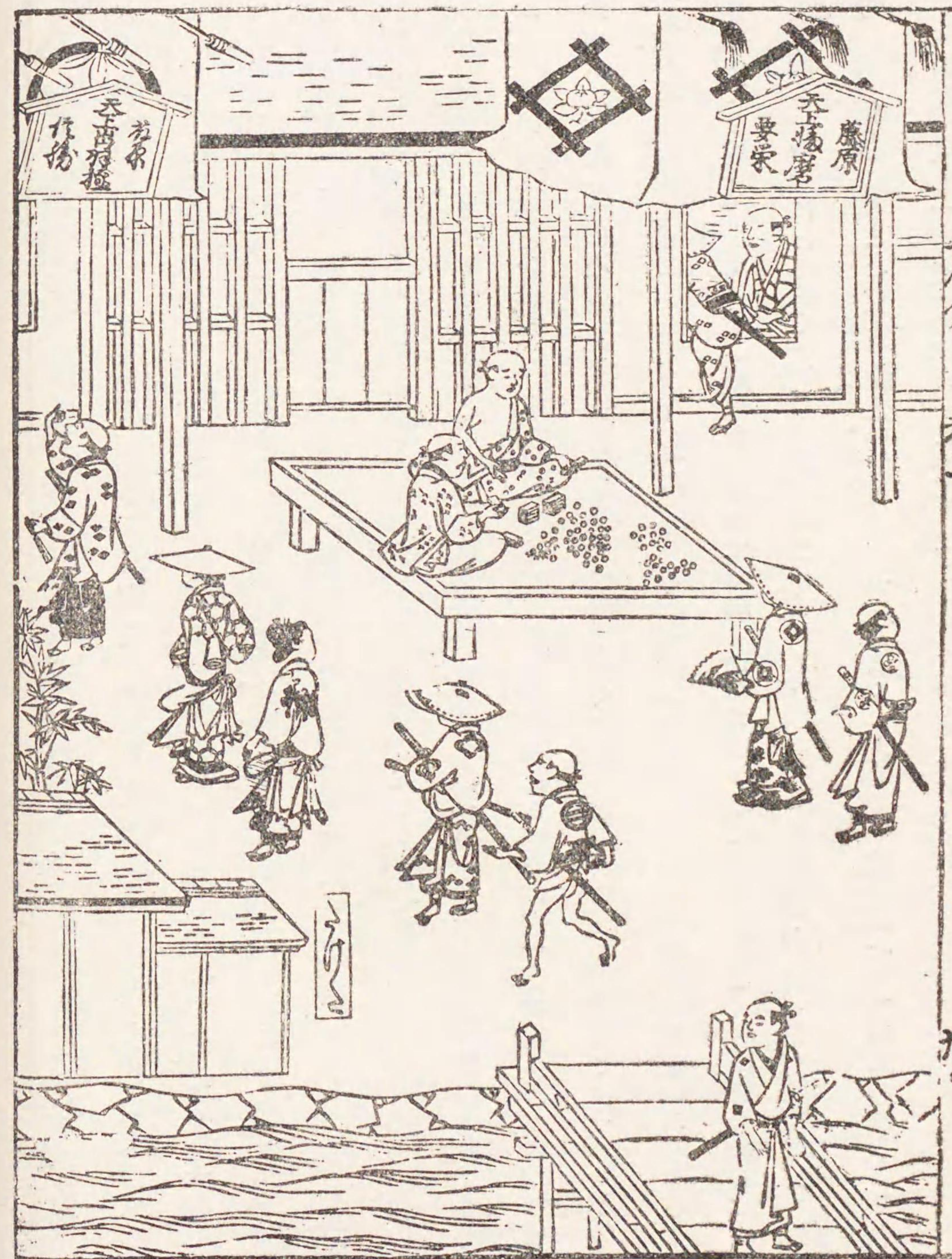


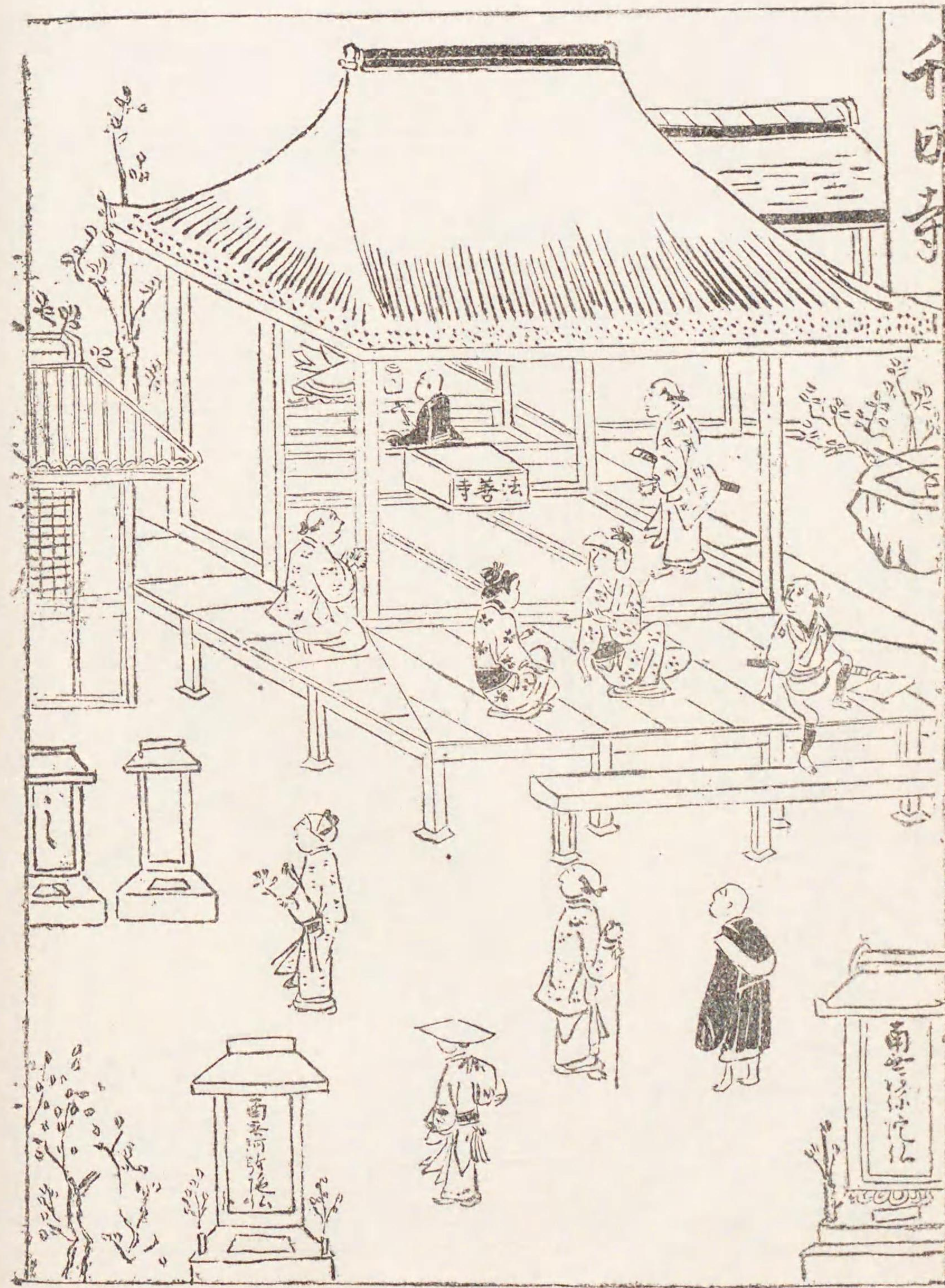
し所となん。さるによりて。于今た、ら堂とも。いへり

道 頓 堀

○おさへく。よろこひあれや。天下泰平にして。國富。民さかへ。里の長も。萬歳をうたふ。歌舞妓若衆の。小歌のこゑには。道頓堀江の魚もおとり。引三味線のかへの流。さつゝたる琴の音には。芝居の軒端。けた梁の塵もうごきいづれへ。まびりをきらす。見物の貴賤目はつかしき。四條五條は。物の數かへ。もうこしまても聞えわたりし。日本橋のはしうへ。老若男女袖をつらね。くびすをついて。朝にへ。とうからくの太鼓の音を。聞たかくの狂言。つくしがはしまり申と。いふやいなやに。むかし見し人。爰にきたりて。へたりと逢たり。さてもその、ち。ひさしう見なんだ。あて上るには。何をかたるそ。是々説經そこには。舞あり。孔雀鸚鵡に。種々の唐鳥。錢へもどりじや。元通くによし。虎のいけとり。竹田がからくり。時計の車の砂道。石ミちめぐりありきて。あなたへざらり。こなたへざらりと。あそびたへふれ。まばしかほと。千日寺に。立より。足を休めて。そこらの人の爰かしこに。集りをのがさま。物かたりするを。き、侍りしに。むかしく寛永のはじめつた。此里よりも。たつみにあたつて。久寶寺の安井のなにかし。平野道頓といひし。坊主のおつとり鍛にて。土をうこかしそめしゆへ。おのづから所の名として。道頓堀とそいふなり。芝居役者の事は。去じころ洛陽のこ

とをかける。四條川原の所に。あくまで。いひ述べれば。其品をあけて。爰にいはむも。ことふりにたれへ。さらば是より。世の中に。もてあそびぬる。わざなから。よき道もあり。あしきもあり。其中にある俗友のあつまるうちに。ひとりのこざかしけなるが。いひ出けるへ。先後世をねかんとおもへ。小乗より。大乘をこそ好むべし。三界の導師。釋迦如来。御説法まぢくなれども。未顕眞實の妙法は。神力を志めし述べ給ふ。誠に正直捨。方便無上の道にて。高祖日蓮は。上行菩薩の再誕なれへ。たふとしといへり。又。傍なる人の云。八萬諸聖教。皆是阿彌陀と云。一向専念無量壽佛ともとけり。超世の悲願普く。ミよの佛。尊敬あり。いにしへ。今の天子をはしめ奉り。公卿公方のたつとませ給ふ。萬民の御ちかひ有難しといへり。今一人の云。題目の宗すくれたりといはむか。念佛の義殊勝といはんや。其勝劣を知らず。ことをいはんとすれば。一方の氣に背きまかも謗法のとがもいかならん。況互に心のいかりや出くらん。まかし我寺。たうとしといへるかことし。それくの機に應して。有縁をみちひかん爲に。さまの方便を。をしへ給ふと也。こなたは。他宗の奥議へあらねとも。八宗十宗をたとへていは。白川。かも川。かい川や大井川。かつら川。なに川。か川と。名は替れかし。おちあふ所は。淀川ならずや。たとへ廣く。細く。浅くにござりて。なかるゝとも。元來水の性へ。一味清淨也。角はいへども。見る事。聞事に。まとひて。佛性の妙理は。我からふらすとて。一首の歌を。うち誦しける





かゝる物語を我も實とき、居けるうち。とかくせしまに夕陽西に傾けはけふもはや。命のうちに。暮にけり。あすもやきかん。入逢の鐘に。をのく目をさまし東西。南北のちまたを。わかちをのかさまくかへり行。寔に朝にハ。むらかり集し人も、漏刻の水の残りなく。いつの間やら。なくなりて。簾疊など、とりはらひ。目の前にさびしけになり行こそ。世のためしも。おもひ出られて。哀なると。彼法師の口すさひける事。ふとおもひいつるより。われらか命の程。けふのうちも。いさ知らず。市のかり屋のまであし、獨のこらぬうきよの中。終に消へき野路の露。いつかハ我も此送葬の場にて。煙ともならんことおもへハ。今一入心ほそくそ侍る。惣してなきからおくる所。爰のミにもあらねとも。廣き大坂のうちなれハ。火葬の煙。たえやらず。また其形其まゝ。土に葬るもあり。古墓いつれの代の人ぞ。姓と名とをまらず。化して土となる。西施が顔色。今いつくにかあるといへり。誠に。夢の浮世のあたし身と思しれとも。驚かすうけかたき。人界に有かたき。御法をうくといへとも。跡よりは。貪嗔痴のさまたけて。六根の罪に。おほれ。輪廻の業に。まとりぬらん

やけは灰うつめは土となる物を何か残りて苦をはうくへき 夢窓國師

蘆分 船 三卷終

253464

蘆分船第四

目録

玉造稻荷

遍明院

專修院

本覺寺

神明

森明神

大蓮寺

生玉

藤棚

籠岸

并渡邊

國分寺

淨國寺

高津

朝日宮

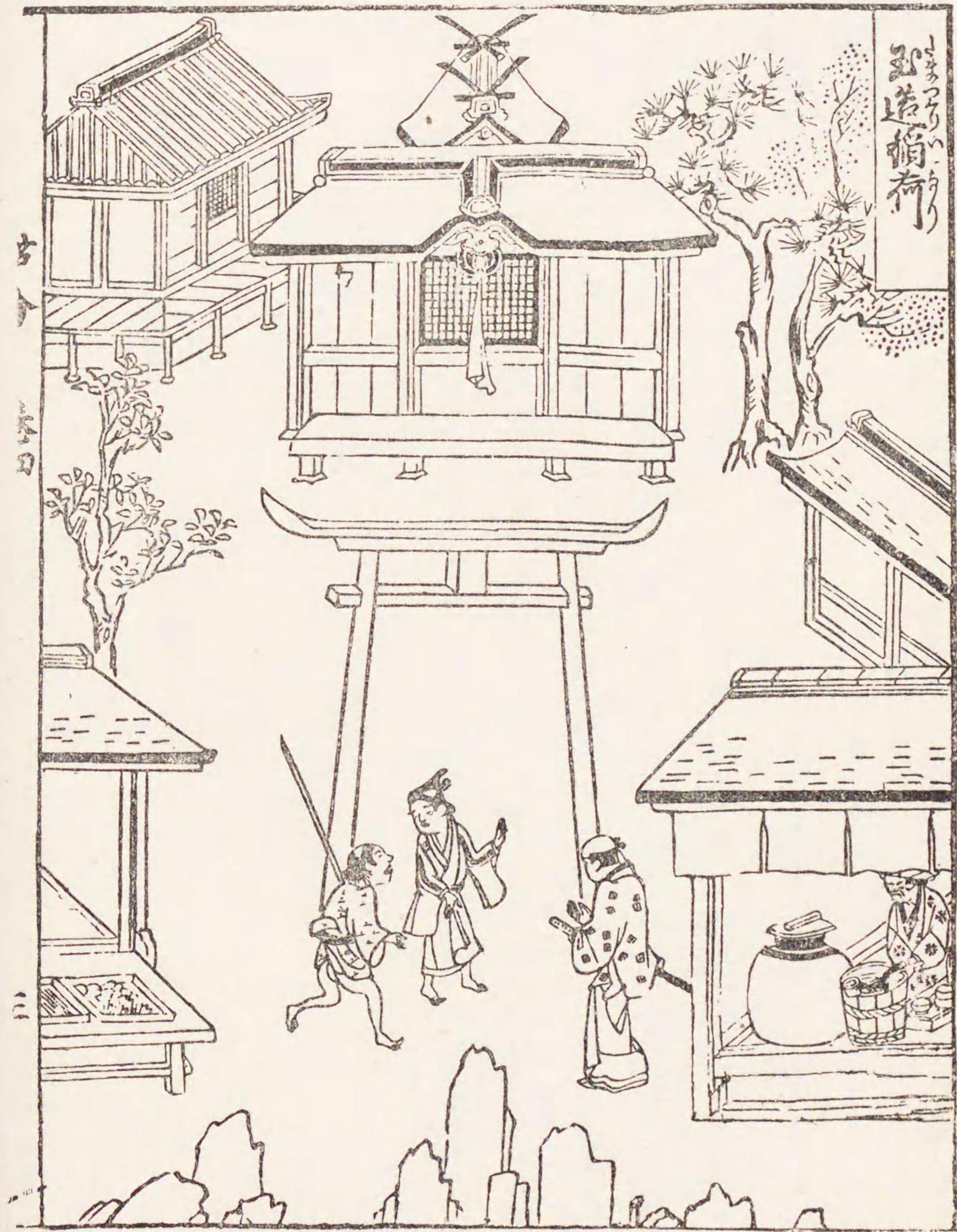
蘆分船第四

蘆 分 船 第 四

玉 造 稻 荷

○此やしろへ。上御前。中御前。下御前。田中大明神。すべて五社也。抑此御神へ。垂仁天皇の御宇。攝津國。難波の京のひかしに向て。一の翁。稻をになひ休ミ給ひしが。忽一の星となり。卯のかたに。あからせ給ふとなり。此こと帝。叡聞ありて。御すかたを。文字に述。いなり大明神と。勅筆を染下し給ると也。其後人王十六代。應神天皇の御時。中天竺より。一の白狐飛來れり。背に三寸の玉あり。見る人奇異のおもひを。なしけるところに此玉のうちより。童子三體あらはれ給ひて。我は此神の身體也四月初卯に。神慮をすゞしめ祭事あるへし。萬民國土。安全に。守るべしとて。神殿に入給ふ。それよりして。初卯を祭禮とす。扱かの玉を封じ込し所なればとて。玉造と號しけると也

名 寄 住吉の名越の岡の玉づくり數ならぬ身は殊そかなしき 好 忠



さてまた。こゝを。栗山といふ。聖徳太子もり屋と。たゝかへせ給ふ時。此山にて。供御をめしけるに。栗の木をきりて御はしに奉る。其時太子。祈誓して。の給へく。戦にかつべきなら。此はし木。今夜の間に。枝葉出へし。さもならんには。其まゝあるへしとて。御はしを。土にさしをき給ふに。一夜のうちに。枝葉さかへしかは。ほとなく。守屋を退治し給ふとなり。是によりて。栗山と。いひけると也

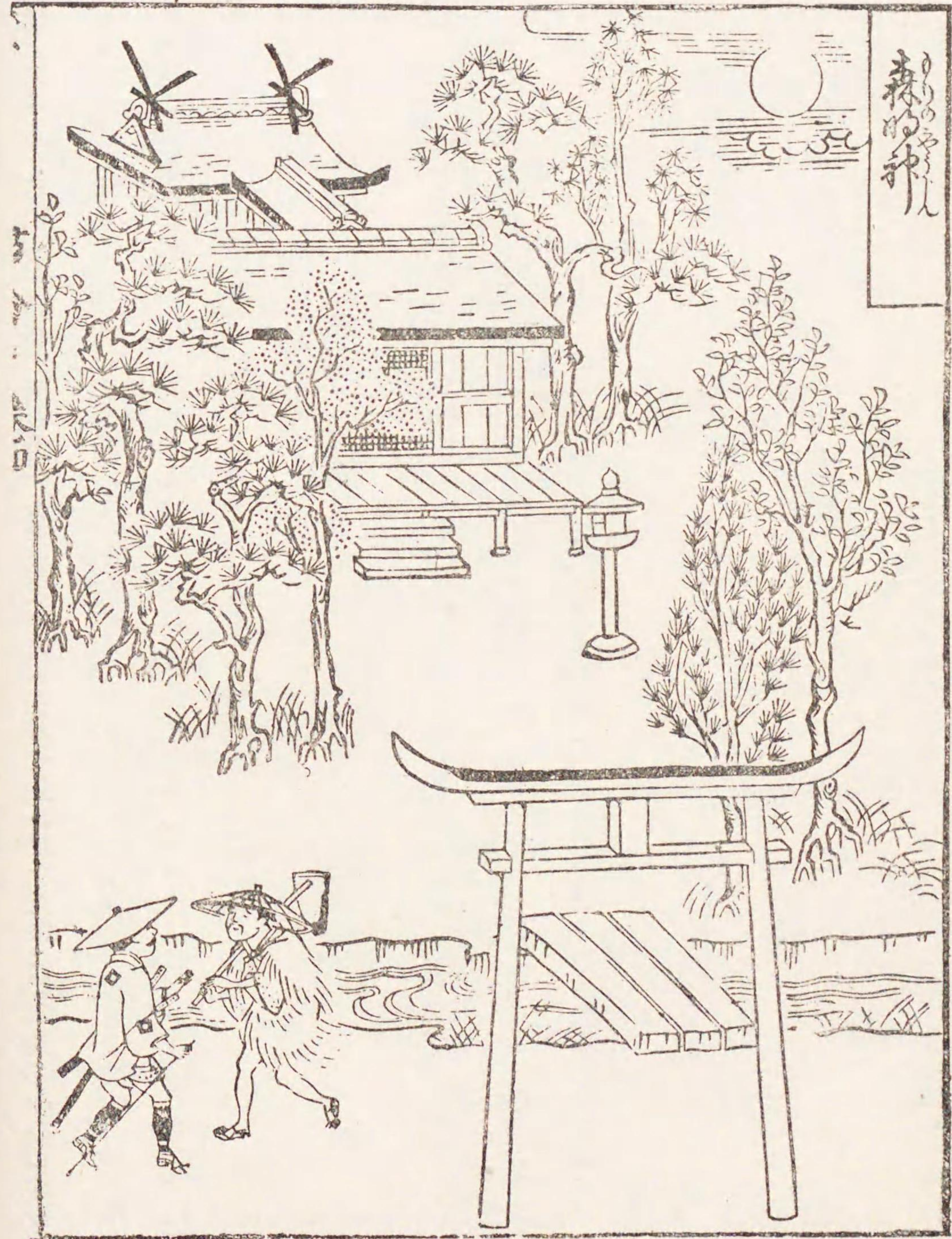
森明神

○當社は。用明天皇とばかり申傳へ。御鎮座の年曆。たしかならず。むかしは。神寶舊記等も。ありといへとも。度々の回祿に。焼失しけると也予過にし春の暮つかた此御神に。まふでしに。折しも。花の咲匂ひ。夕月の木陰に。うつりけるを。なかめくゝなとし。あはれと見る人もかなと。宮ることふりにたる。ありさま。おもひやり侍りて

咲花の木の間もりくる月影は誰見よとてかひかりそふらん

國分寺

○當寺は。聖武天皇の御願也。御本尊。十一面觀音。閻浮檀金の像也。され。天皇。日本國中。一國に。一寺



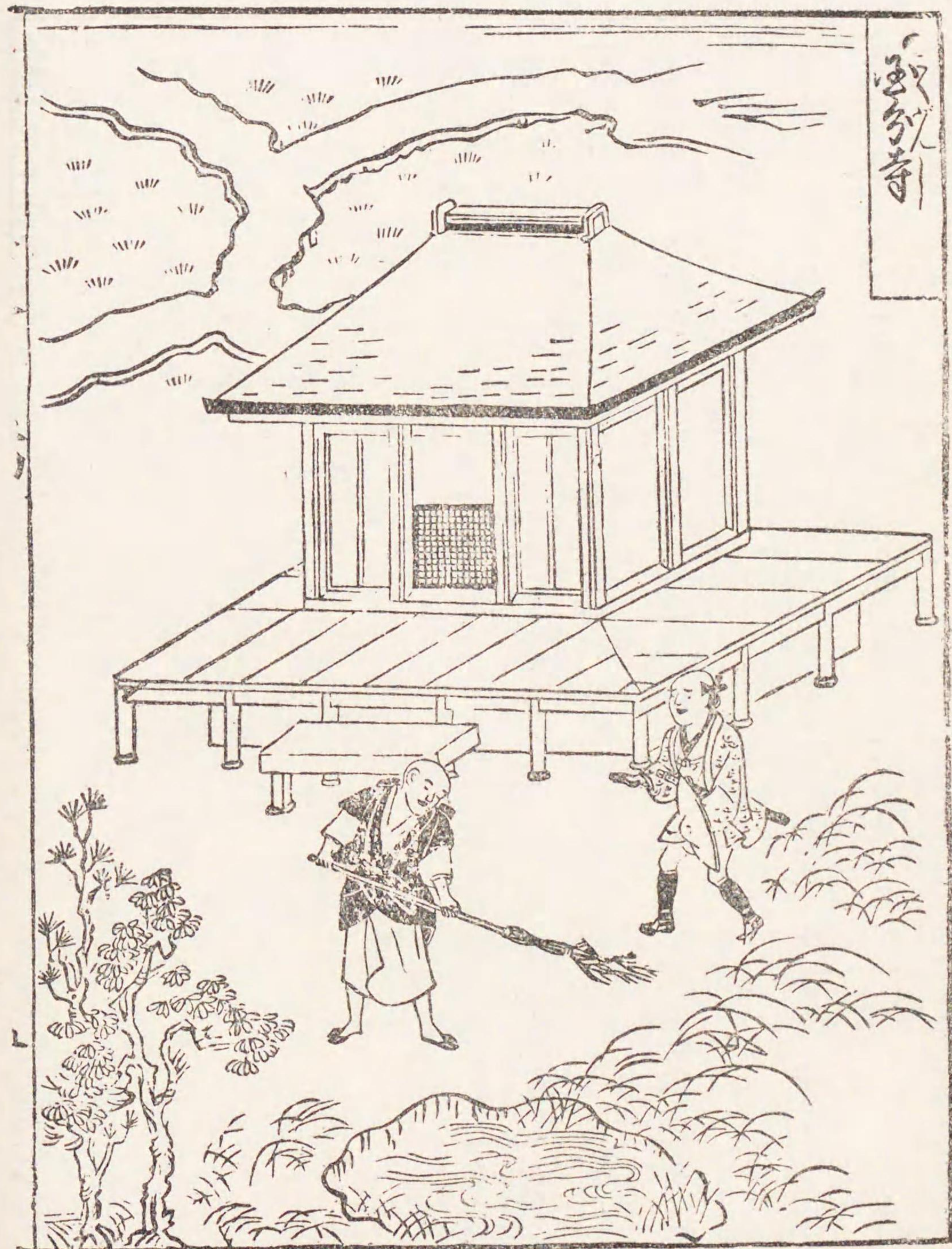
を。御建立ありし。其隨一の。御寺なるがゆへに。國分寺と。號せられけると也。又天満より。長にあたりて國分寺とてあり。則其里をよんで國分寺村といふ。按に。同寺兩所に。わかつ事。いか、いぶかし國分寺ハ。天平九年に。建立とあり。又同十一年には。每國に。國分尼寺を。立給ふとあれハ。此等の事によらハ。當所ハ。若國分尼寺にても。あらんか。後君子の考を。俟もの也

遍明院

○東高津の野中。すこし人家をはなれ。九折を。攀のほりて。南向に。難波寺遍明院といふあり。御本尊ハ。十
 一面觀音。并不動。毘沙門なり。抑中尊の。觀世音菩薩は。御長六寸三分也。其來由を尋ぬるに。長谷寺の觀
 音と。同木同作とかや。されハ。此尊像ハ。惡七兵衛景清。年來持念せし。守本尊にて。わたらせ給ひ。日向國
 宮崎にありしが。ゆへありて。近江國。三井寺。智増院の寶佛たりしを。いつの比にや。此寺に安座せしめ給ふ
 と也。景清武勇のことハ。人の忘れ所也

景清か守本尊を頼む身も皆三界の籠破りなり 藤原貞因

又本堂より。うしろ北の方に。仁徳帝の宮有。并天神八幡稻荷の三社有



大蓮寺

○山號は。如意珠玉山。院號へ。極樂院。寺號をへ。大蓮寺といふ。文祿年中。應蓮社。顯譽魯道泰純上人。泉州堺より。此地にきたり開基也。むかし今の御津寺のあたりに。ありしか。中比東照神君の命によりて。西横堀川邊に。うつしけるか。元和年中。今の高津郷に引けり。其後魯道和尚へ。洛陽淨福寺に。任持す。第二世典譽上人。代々今の住職に。いたりて。血脈相續して。名法の僧歴々たり。本堂の本尊阿彌陀。多武峯沙門 同繪像。定惠の作也。

あみだ 源信僧都御號也

- 一 七觀音堂中尊は千手觀音惠心の作也
- 一 藥師堂。中尊石佛也。是は泉州堺より夢中の告ありて。當寺へ來らせ給ふ。其よしあり
- 一 鎮守祠。天照太神辨財天。天滿宮也

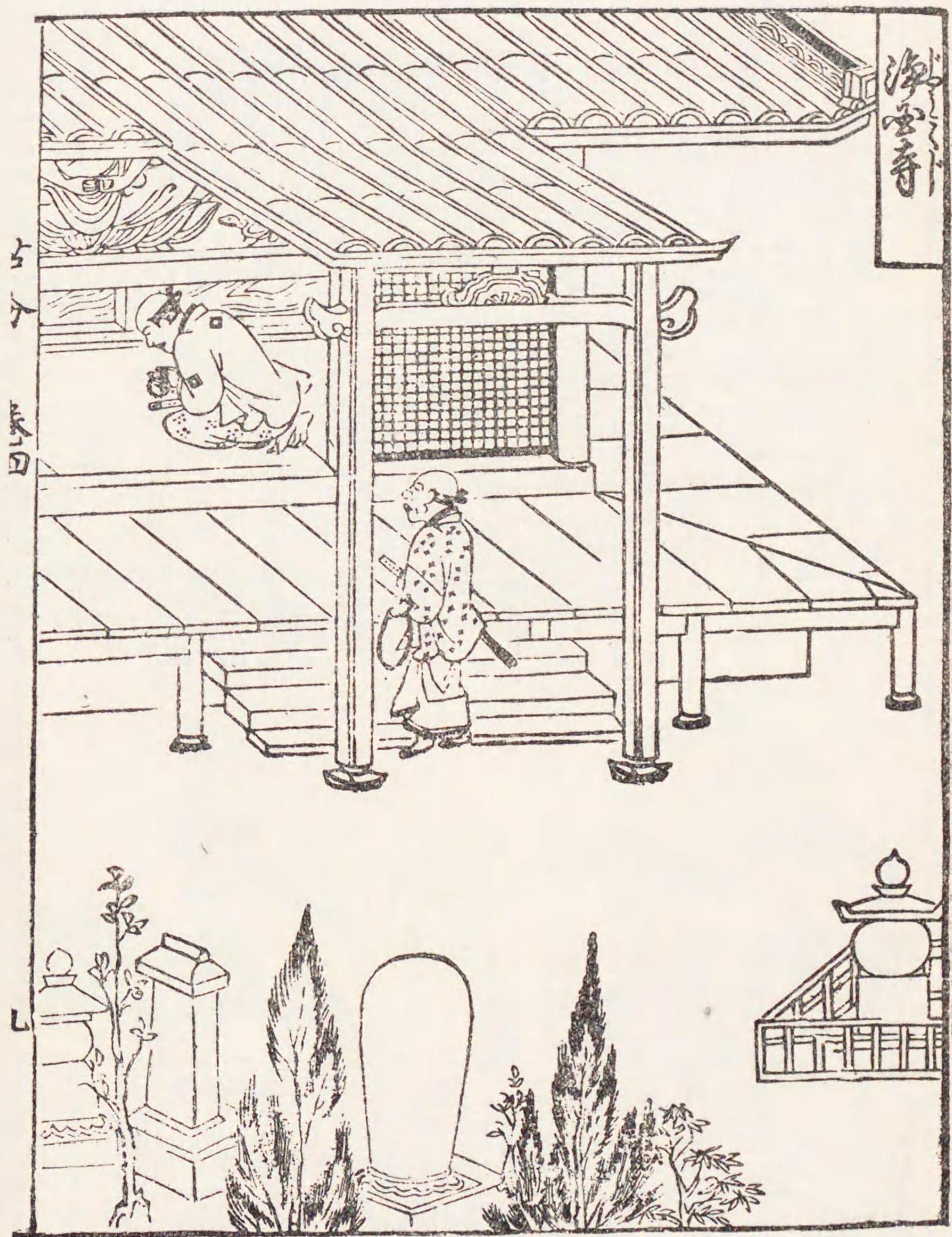
其外名作の本尊。畫像等。載するにいとまあらず。中にも。多田滿仲念し給ひし。佛舍利傳來して。今現に有

淨國寺

○無衰山。金立院。淨國寺。開山へ。寂蓮社圓譽上人。生緣山城 菊池氏 文祿三年の草創也。されば。後白川法皇と。法然



蘆分船第四



上人と。一心寺新別所にて。日想觀を。修し給ふ時。石をして。鐘鼓となし。ならさせ給ふ。時に。一人の童子來りて。我は。是。西金山といふもの也。上人に。鐘鼓をまいらせんとて。則上人と共に。鑄給へる。御かねなればとて。于今兩作の鐘ともいへり。又子泰のかね。大佛供養のかねなど。云傳へし事は。寺の起文に。見えたり。あかるに。此鐘鼓。いかなるゆへありてか。此寺の靈寶となり。今諸人に。拜見せしむ。寔に疑地に涉る類に。あらず。殊に上人。ミづから筆を染させ。一紙の文をもつて。靜尊に。さつけ給へる。其詞にいばく

西金山渡海日域流布粵於天王寺日想觀成就之時予希有哉倍與對面愚老志深一丁之鐘鼓奉鑄寄進者也寔此鐘直來打者忽三毒滅三惡道可遁音聲

キクモノハ。四惡趣ヲ。遠離スベシ。愚老一代之化益此鐘可有

南無阿彌陀佛

源空在判

授靜尊畢

かくありといへとも。いかなるゆへありてか。一心寺を出て。今此寺に。傳來せり。かゝる濟生の御寶こそ。眞實なるへけれ。かなたにありしか。こなたにありとも。なんぞかくべつのおもひを。起し奉らん

一本堂の本尊。無量壽如來。御長二尺三寸。慈覺大師の作なりしを。第六世三譽不樂。丈六の阿彌陀を彫刻して。右の本尊を。内陣佛とす。又寺内藥師堂あり。是則佛工春靈驗あらたなること。他に越たり。其外靈寶牧あくるに。

いとまあらず。されば法然上人

口にある南無阿彌陀佛の味ひを自力の人はくひまらぬ也

専修院

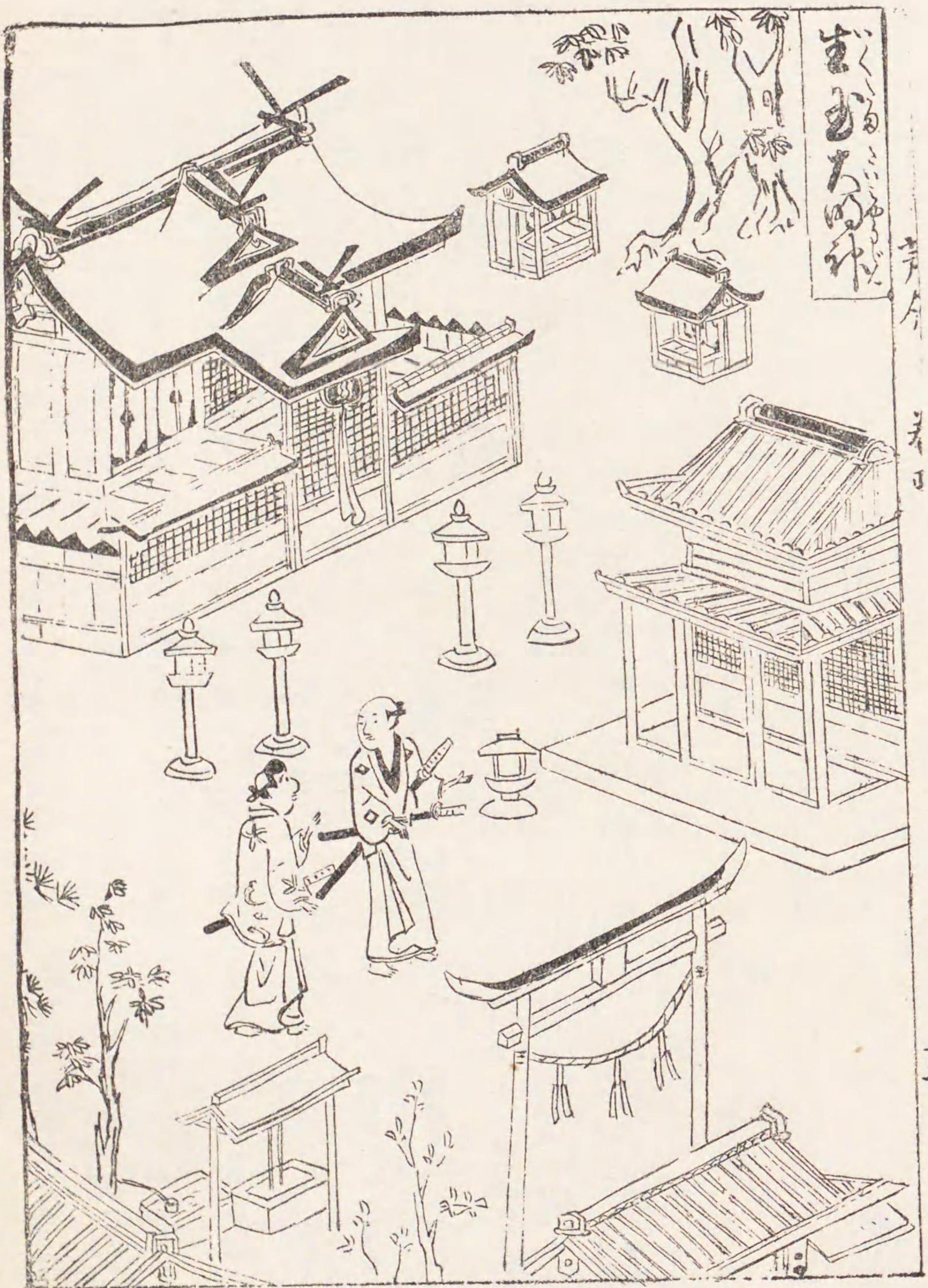
○御本尊。地藏菩薩。御長二尺八寸。慈覺大師の作也。此尊むかしハ。相模國淘綾郡。林村におはしましけるを。徳治年中。洛陽閑室僧都。荷負し來りて。市原にありしが。ゆへありて。此寺の本尊に。安置せしむ。抑此地藏の。靈應をかたり。奉るうちに。其品多し。中にも。永仁年中。鎌倉ちのらに。悉之助大夫とて。有得なる人いましけり。めしつかへる。下人男女ともに多し。其中にすかた尋常にして。心やさしき。下女一人ありしが。あるしによくつかへ。後世をこゝろかけ。慈悲あさからず。爰に高安と云いふ處に。耕人の晝食を。毎日
に持はこびしか。地藏堂に。立より。是は。主人の爲。是は。耕人の爲。またハ身の爲とて。晝食の初尾をとり。地藏に供し奉る。ある時。傍輩惡心を起し。食すくなしとて。あるじにさ、ゆ。助大夫がつま。下女を。近付。此ことはりをいへど。毎日歩をはこび。初尾をそなへ。侍りけるゆへ。妻跡をたひ。地藏堂のやうすを。見つけ。いづれも。われにさ、ゆる處。たがふ所なしとて。本より邪見。放逸のものなれば。下女か貞に。あてんとて。火箸をやき。下女がかへるを。待居たり。ほとなかへる。やがて焼がねをあて。なやます。人々。是をみて。



おとろきぬ。まかれども。下女すこしも。さへがずして。臥居たりけり。其時助大夫地藏堂の邊をみれり。煙たつ。急きまいりて。堂のうちを見れり。薩埵の右の御顔。やけふすほりぬ。奇異のおもひをなし。家にかへりて。妻にかたりはんべりけれり。其時彼下女をめしよせ。面をみるに。焼かねのあとなし。間ども。覺すといふ。不思議におもひて。いろ／＼と問は。下女心がけの通。あきらかにかたる。其時助大夫。夫婦がいはい。汝は他を思ひ。身をおもひ。地藏薩埵を。供養せしこと。夢にもあらず。世にすくれたる。おこなひをなし侍る事。なきてもかへらず。自他の爲を。おもふか。ゆへに。今薩埵の。汝か身がはりに。立たまふ。既に佛意に。叶たるものとて。彼下女を見て。たつと敬し。則助大夫が娘となし。かしづきけると也。かゝるゆへある尊なれり。世俗につたへて。肪焼地藏とも。申奉る是也

生玉

○此命は。新田部直の遠祖とかや。天孫瓊杵の尊。あまくたり給ひし時。またがひつきし。三十二神の中天の命と也。神武天皇戊午年春二月。難波の崎にいたり。給ひし時。まつり奉ると也。又ある人のいへるは。大己貴神天の羽車にのりて。虚空を飛行。自在にありきて。妾をもとむ。時に。節渡の縣に下りて。ひそかに。大陶祇の女。活玉依姫に。契りをごむ。其行道を。人知事なし。其むすめはじめて。孕しかは。父母あやしみて。誰人か



來ると、へは。女こたへて。神人のごときは。屋上より来て。共にまくらを雙と云。さらへ。證據をみると。菅玉卷とて。絲を玉のごとくに。巻てほどけへ。くるくると来るやうにして。針をもつて。神人の衣裝につけて。或はゑりに付。此絲を認て。明るあした。尋行に此絲鑰の孔より出て。節渡川を経て。吉野山に入。三諸山にと、ともいへり。其まけるいと。三輪かね残しゆへに。三輪山といふ。其神は。則大三輪の神是也。今此説によらへ。大己貴命。活玉依姫と。契たまひ。男女一體のかたりあれへ。三輪の神慮うつりますにや。去じ明應年中。本願寺の僧侶。此所に来りて。寺院を創し神地を境内にまじへけれへ。神不潔なるを。にくみ給ひ。彼僧にたゝりとかめ給ふによりて。神殿をつくりかへんことをおもひ。社司藤原吉勝をして。願辭を告。つるに神殿を。うつしかへけり。今の旅。其後織田信長公。兵火に。殿閣ごとくく。灰燼となりわつかに。神聖を別所に。うつしけるを。店の邊。豊臣秀吉公城。柳をつき給ふ折から。今の神地に。うつし給ふ。時の奉行は。片桐市正且元と。申傳へり。としこと。祭禮は。九月九日也。門前のかたはらに。淵々たる。池水の嶋さきに。辨財天の一社。鎮座ならせたまふ。

守人も花に老せぬ宮木かな

宗 祇

高 津

○此やしらは。仁徳天皇と。申傳て。たしかならず。予おもふに。若此御神は。比咩語曾の神社にてや。おはしますらん。まからば。御神體は。大己貴命の御子。下照姫也。さあらば。此御神と。出雲御崎神とは。本朝和歌の大祖と也。又ある説に。垂仁天皇の御時。都怒我阿羅斯等といふ人。意富加羅國にありて。あめうしに。田器をほせて行に。忽に見えず。其跡をふるしに。たつねゆくに。牛の足跡。ひとつの村に。と、まれり。時に。一人の翁來りて云。汝か求る牛は。此村の中に入れり。志かるを。郡公とも。此牛を殺して。食せり。さて牛のぬし來りて。牛をもとめは。其あたいに。なにも。寶物をやらんといへり。もし郡公とも。牛のあたいに。なにも物をかえんと。おもふと問は。郡のうちに。まつる神を得んと。答よとをしへり。其祭神は。白き石なり。其後翁をしへしごとくに。こたへしかへ。郡公とも。白石を牛のぬしにあたへたり。其石化して。見めよきをとめとなれり。阿羅斯等。大によろこびて。是にちきりをこめんとせしかは。終にうせさりぬ。のちに其童女。日本の難波に。いたりて。比賣語曾の社神となり給へりとぞ。右の説。いづれか。是なることを知らず。知者の參考に。備ふるもの也。いにしへは。境内六町四方にて。仁徳帝の皇居の。地ともいひ傳へり。繩の浦など、いふ所あり。尋ぬへし

夫木 荒にける高津の宮をきてまれはまかきの蟲やあるしなららん

後鳥羽院

春の夜の月に昔やおもひ出る高津の宮に匂ふ梅か枝

覺正法師



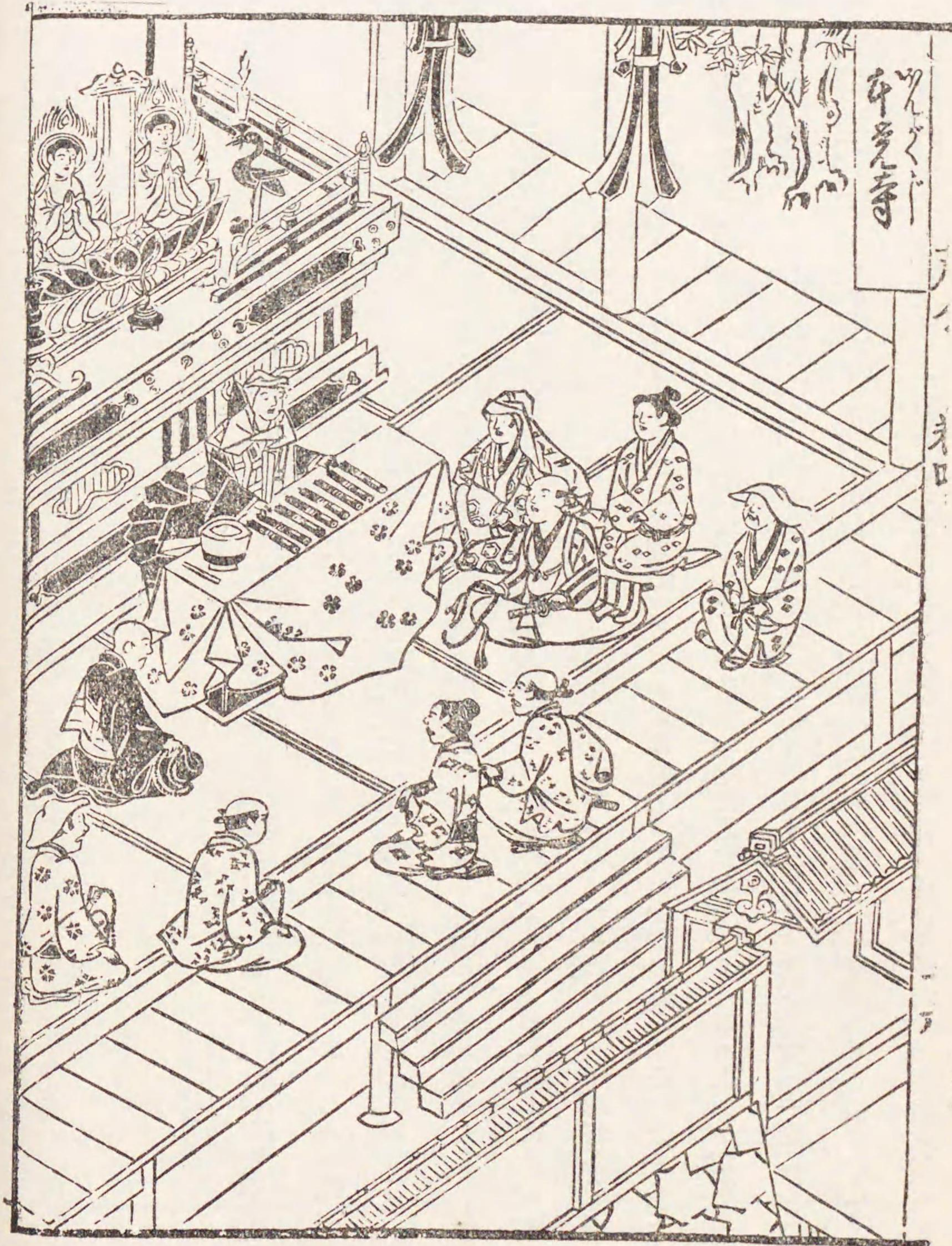
紅葉する高津の宮に風吹は錦をあらふ繩のうらなミ

定

家

本覺寺

○眞如山本覺寺、開基ハ。定證院日守大徳也。生縁は加州金澤の産武田信濃守末葉武田禪正入道義次の二男善壽丸といひしか少小なりし時より。佛道修行おこたらす。永祿五壬戌年。當寺を草創也。あかしより此かた。第二圓乘院日幸代々歴々相續せる名坊也。されは。本寺の開山日蓮上人(安)生國は。阿房國小湊といふ所也。氏は人王四十五代。聖武天皇の末孫重忠といへる人の御子也。母は清原氏の女となり。ある時光明赫奕たる。日天子蓮花に。座しながら胸の中に入給ふと夢見給ひてより。妊胎ありて。貞應元年。二月十六日に生れたまひ。御名を。藥王丸とぞ申ける。既に。十二歳の時。清澄山にのほり。學問せさせ給ふに。一を聞ては。十の理をさとり十八歳にして。髪をおろし。やかて沙門のすがたにならせ。ミづから日蓮と。御名を改め給ふ。それよりして。いよく修行功なり。妙法花の利益ふかく。後五百歳こうせん。流布の時にあたるを。ミそなひし。一切衆生をすくひ。給はむとの大願をおこし。あまねく。法をひろめて弘安五年。十月十三日に。御とし六十一齡にして。遷化まします。寔上行菩薩の再誕として。今日のもとに跡を垂給ふとかや。御一生の靈瑞あくるに。いとまあらず。今此宗の繁榮あるも。ひとへに。高祖の徳の厚にきせずんハ。いかてか。四百年前の今の世の人なんぞ信心を



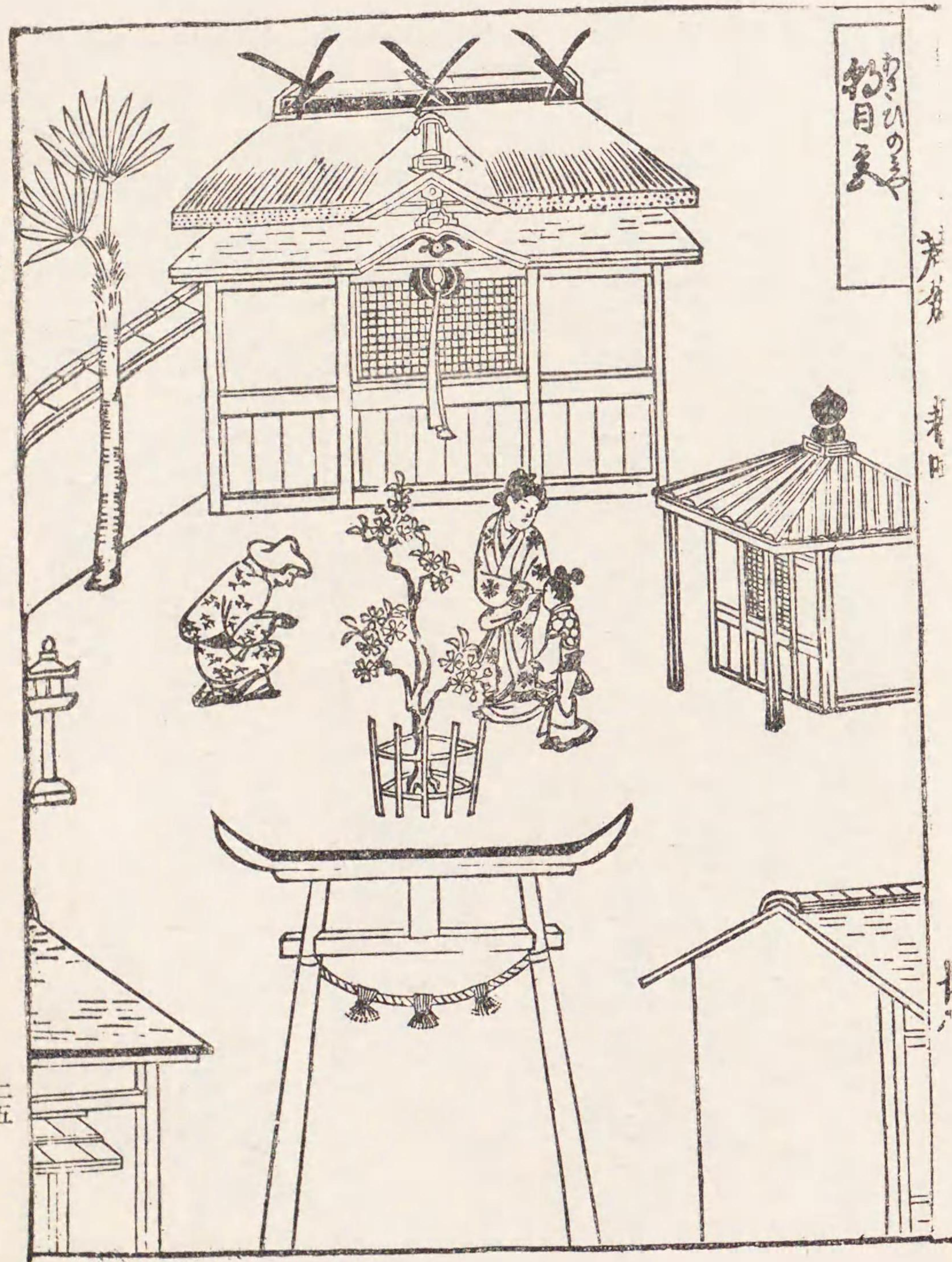
なすへき。されハ。當寺の靈寶あまた有中に。日蓮聖人の御消息二幅花落弘通開山日像聖人大まんだら一幅其外
 代々の聖教等箱にミてり。又日蓮聖人の御歌とて。今世に。吟し弄し侍る中に

たち渡る身のうき雲もはれぬへしたえぬみのりの鷺の山嵐
 峯の松谷のかしハ木いかなれやおなし嵐に音かゝるらん

藤 棚 谷町

○今はむかし。此あたりに。一子をもてるあり。此子十二歳の折から。いかなる宿世にやありけん。此所に池
 ありしが。此池水に。おほれむなしくなりけり。父母。朝になけき。夕にかなしむこと。孔子の鯉魚にわかれ。
 白居易か。子を先たて。枕に残る薬を。うらむことはり。またあるへきにあらず。則彼子の塚をつき。其ある
 しに。一本の藤をうへけると也。其藤今は。枝葉繁茂して。藤の棚といへり。彼子の石塔など。近曾までも。あ
 りけると也。かの角田川の。柳のことなど。おもひいてられ。いとあはれにぞ侍る。堂の本尊ハ。長谷寺の觀世
 音を。近きに。安置しけると也

藤さけはおられぬ浪の花もなし



おひのま
物目

若菜

若菜



おひのま
物目

若菜

若菜

朝日宮 松や町北裏町

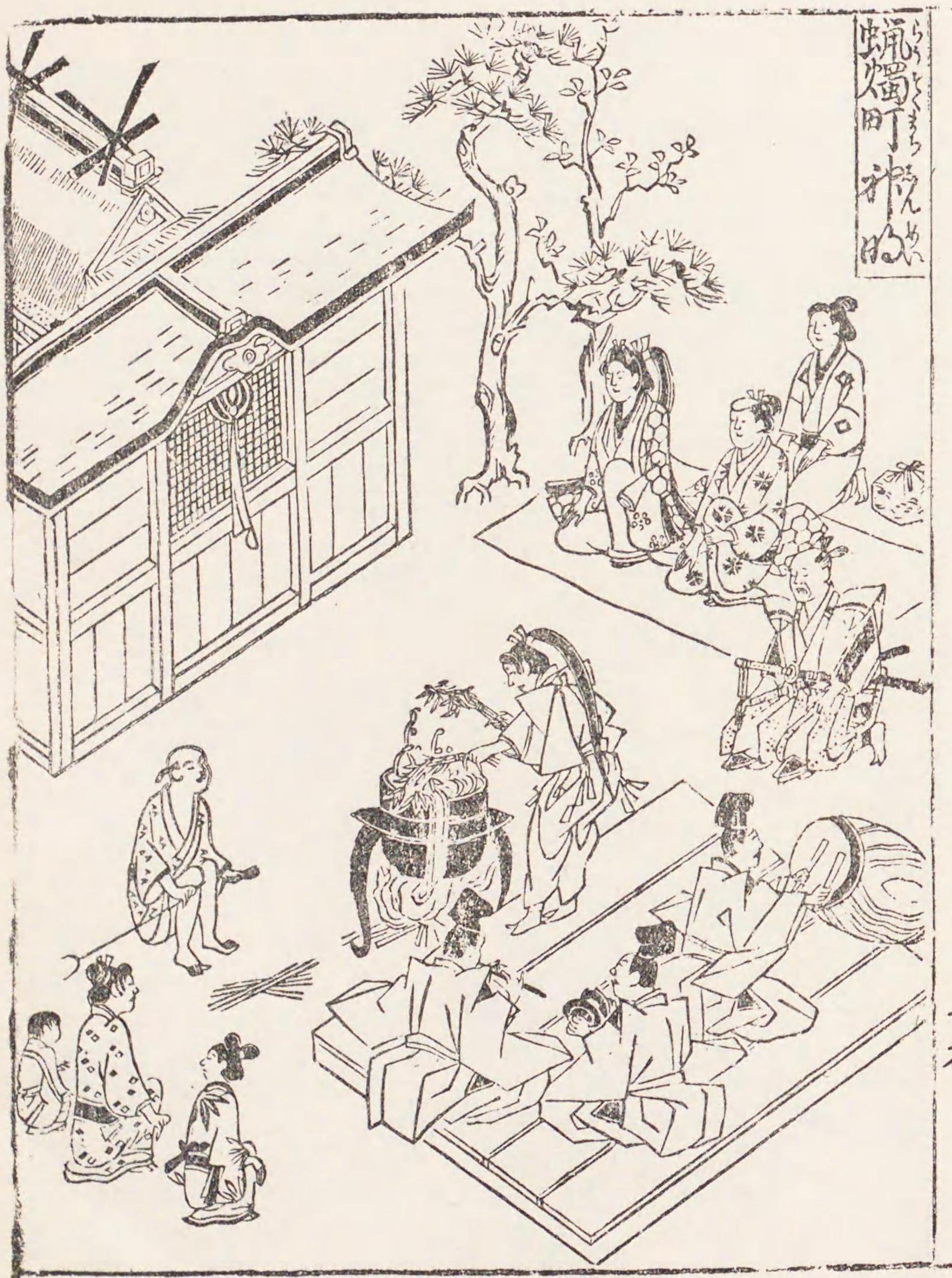
○此宮は。天照皇太神也。予考奉るに。此神明は。後鳥羽院。文治元年。二月十八日。源義經と。梶原景時と。逆櫓の論ありし時利運を祈らんが爲に。攝州東成郡に。一社を建立し給ふとあれハ。若此等の御神にや。尋ぬへし。また當社より。北ひがしのかたに。一社あり。日月の宮といへり。是また來歴。たしかならざる事也

日の御影花ににほへる朝かな

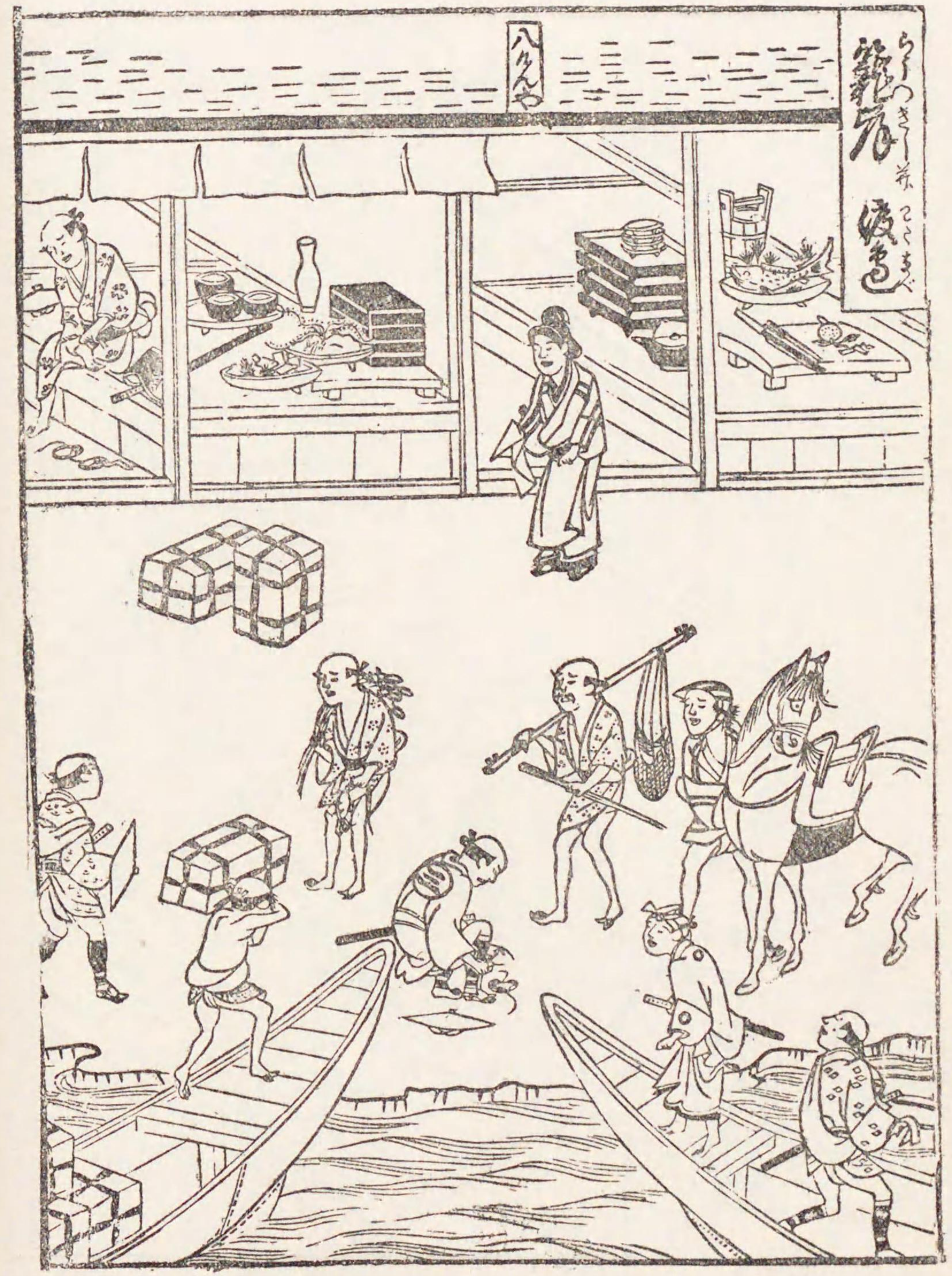
心敬

神明 蠟燭町

○此社は。人皇百十代。後陽成院御宇に。伊勢國に。北黒田のなにかし。ある夜不思議の夢ミしか。日月の御影。竈に。二夜三日。光明赫奕とひかりを。はなち給ふと。さめてのち。妻女にのりうつり給ひさまく。奇異のこ。とありて。攝州大坂に。鎮座あるべしとの。神勅ありしゆへ。此むね吉田家へつけ、れハ。其むかし。かゝる事なきにしもあらず。是は。伊弉諾。伊弉册の二神也。急ぎ大坂に。勸請すへしとて。この所の。守護神となし奉る。御神體は。天照太神宮。八幡大菩薩。春日大明神の。三社也とぞ



蘆分船第四



籠ろうの 岸きし 并ならひニ渡邊わたなべ

○籠ろうのきしのこと。まかとおれる人まれなり。ある人のいへるは。論ろんの岸きし。也是こゝは。後鳥羽院御宇ごとほのうゑいんみよ。文治元年ぶんぢげんねん。二月十八日。義經よしのねと。梶原景時かぢはらかげときと。逆櫓さかろの論ろんをなせし所なるゆへ。かくいふとなり。是こゝ今の。八軒屋はちけんやといふ所にあり。并渡邊ならひわたなべといふ所。さだかならず。まかれとも。宗祇そうぎ方角抄ほうかくしょうに。天王寺てんわうじの北一里きたいちりなり。長柄ながつは此所こゝより。北きたなり。淀川よどがはの末すへなりと侍はんべれは。是又こゝ。今の八軒屋はちけんやあたりを。いふならし。彼渡邊かのわたなべの綱つなが。由緒ゆいじよありもやすらん未考いまたかんかへす

堀川百番 五月雨ごごいの日數ひかずつもれと渡邊わたなべの大江おほえの岸きしはひたらさりけり 隆源

蘆分船第五

目録

難波嶋

三軒屋

衢壤嶋 并竹林寺

茨住吉

龍溪禪師庵

天神御旅所

野田

傳法

野里川

姫嶋

蘆分船第五

蘆 分 船 第五

難 波 嶋

○難波に。つゝきたる所也。昔日。難波の住人。ひらきし所なれば。此嶋の名とするにや。されば。難波といひ出せる。因にあけていはく。難波津に咲やこの花と。王仁か讀つゝけし。名木のあり所。大坂のうちにてはなし。其根本を。たつねけるに。尼が崎の城下に。ありとなん。後人尋給へ。其ころあるべきこと。いさゝか。詞をよせ侍るもの也。いづくは。あれと。此浦のけしき。猶いふにたらず

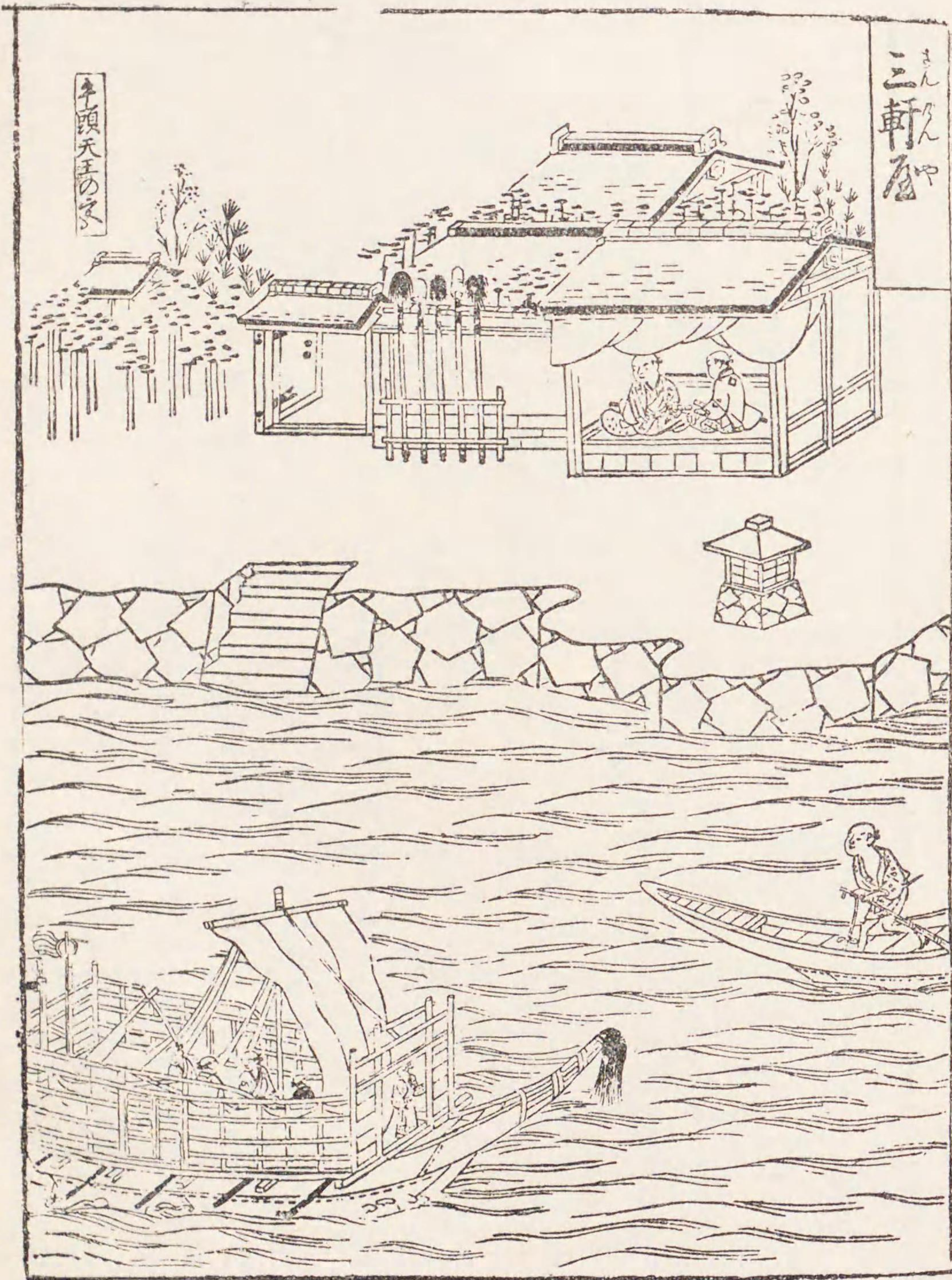
難波人見やはとかめぬ浦の春

昌 琢

三 軒 屋

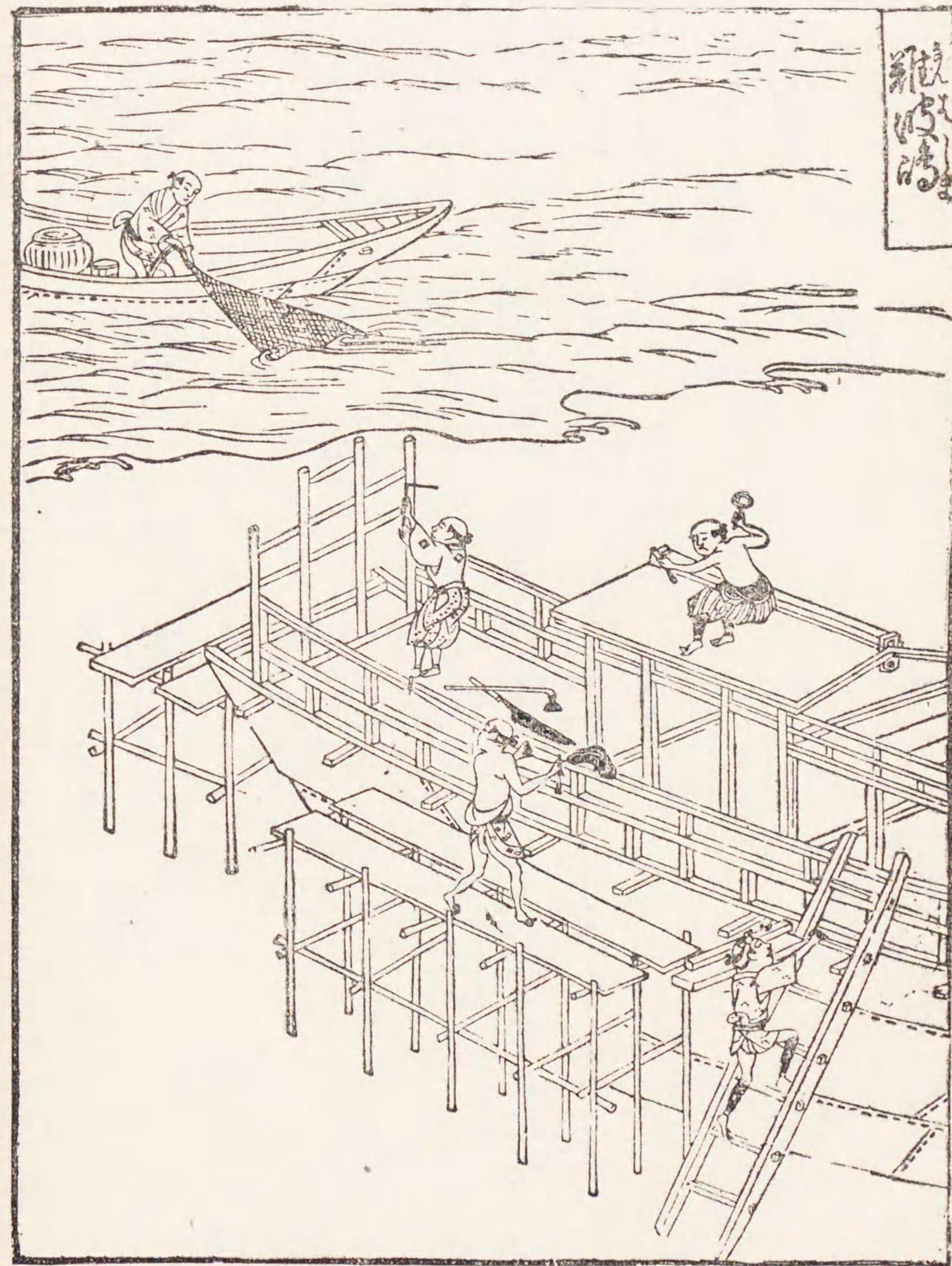
○あめつちの。ひらけるはしめは。洲壤のうかれ。たよへると。たとへば。なをあそぶ魚の。水の上に。うけ

蘆分船第五



五

蘆分船第五



四

るがことしと也。此所にしへは。嶋崎にて。人の家。まだ定まらず。纔に三軒の民屋を。たてならべしゆへ。
 誰か名つくるともなく。をのづから。かくいひならせると。見えたり。また所の。守護神は。牛頭天皇(王)となり。
 此御神は。素戔鳴尊の童兒の時の。御名也。また武塔天神とも。申たてまつる。今の祇園是也。まことに。神慮
 擁護ますにや。次第に。人家満々。軒をならべ。繁榮して。旅泊の船の出入。まげく。いと賑やかなり。又向に
 あたりて。前垂嶋。尻無川など。いふ所も。つきたり。西へ。蒼海はるかにして。遠寺の鐘もつけ。れは。
 遠浦の歸帆も。見えわたり。瀟湘ともいはまほしき。風景いかでか。筆力に及べき

鴈もなく月さへ春の海邊かな

立 仲

衢 壤 嶋 竹林寺

○此寺は。香西哲雲。寛永元年の草創也。本尊は。阿彌陀如来。惠心志かるに。哲雲は。恭大樹の鈞命により
 て。此土泥の地を。開發し。則衢壤嶋と名づく。其比。笈頓法師といへる。念佛の修行者。此嶋に來り。一字の
 地を乞。草庵を。結構して。朝懺暮悔の勤。おこたらざりしゆへ。いよくちからをそへ。建立のこゝろさしを。
 はけまし。哲雲居士の。菩提所とし。靈座を。安置し。哲雲山。香西院と。號し供花。燒香をなせる僧侶。相續
 せり。されハ。哲雲は。文武の道を守り。和漢の才も。他に越侍りしと也ひと。せ病にかゝりて。東武へくたり



衢壤嶋 竹林寺

し時、林道春。一詩をもつて、訪ひける。其詞に

香西哲雲老人。嬰疾歿於東武之江府。余聞其訃。不^(甲)耐悲傷。於是代薤蒿以吊慰。

十如禪師云々

羅山子扒

雙鑠此翁尤拔羣

治民督役每辛勤

愁心深積士巖雪

變作關東日暮雲

又寺内に。難波津のむかしを。おもひやり。其色香をとめんと。一本の梅をうへをき。其花さかりなりけれへ。一枝を手折て。烏丸光廣聊へ。たてまつりけるとして

敷島の道に名たかき君なれへかさしに送る難波津の梅

御かへし

折人のなくはみやこに誰あらん色をも香をも難波津の梅

茨住吉

○當社は。寛永元年に。香西哲雲。所の守護の爲にと住吉大明神を。勸請しけると也。俗につたへて。いはらすみよしといふ事。惑説也。本宮へ。當國西宮の邊に。ありとそ。此社のかたはらに。茨なとおひまけるかゆへ



茨住吉

に。いふと也。祭ハ九月十五日也

物とかめし給ふ神にあるやらんか、りかましきいはら住吉

龍溪禪師庵

○いはらすミよしより。西北にあたりて。龍溪禪師の。草堂あり。此禪師ハ。去じとし。西海浪をたへ。此あ
たり悉く。大潮にひたりし時。いかなる。宿世にや。潮に溺て。遷化し給ふ。時に辭世

龍溪禪師

今晨怒氣向人嘆喝

幾回受屈爛藤條

三十年前恨未消

一喝却倒胥江八月潮

目龍溪法子臨終偈以次其韻

老僧隱元

臨行一喝全賓主

不孤生鐵鑄藤條

忽見墨痕疑盡消

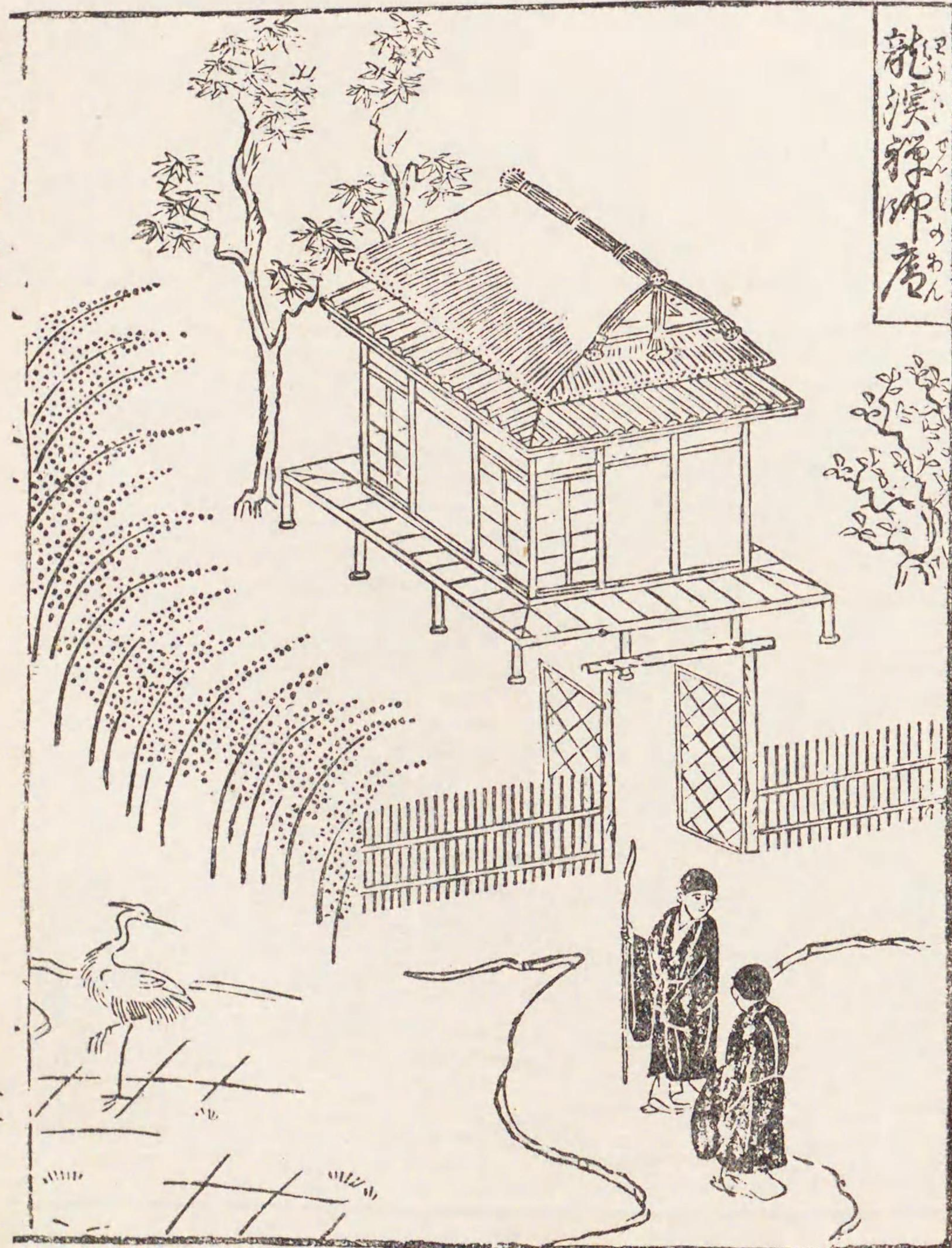
涌起滔々四海潮

(榮)

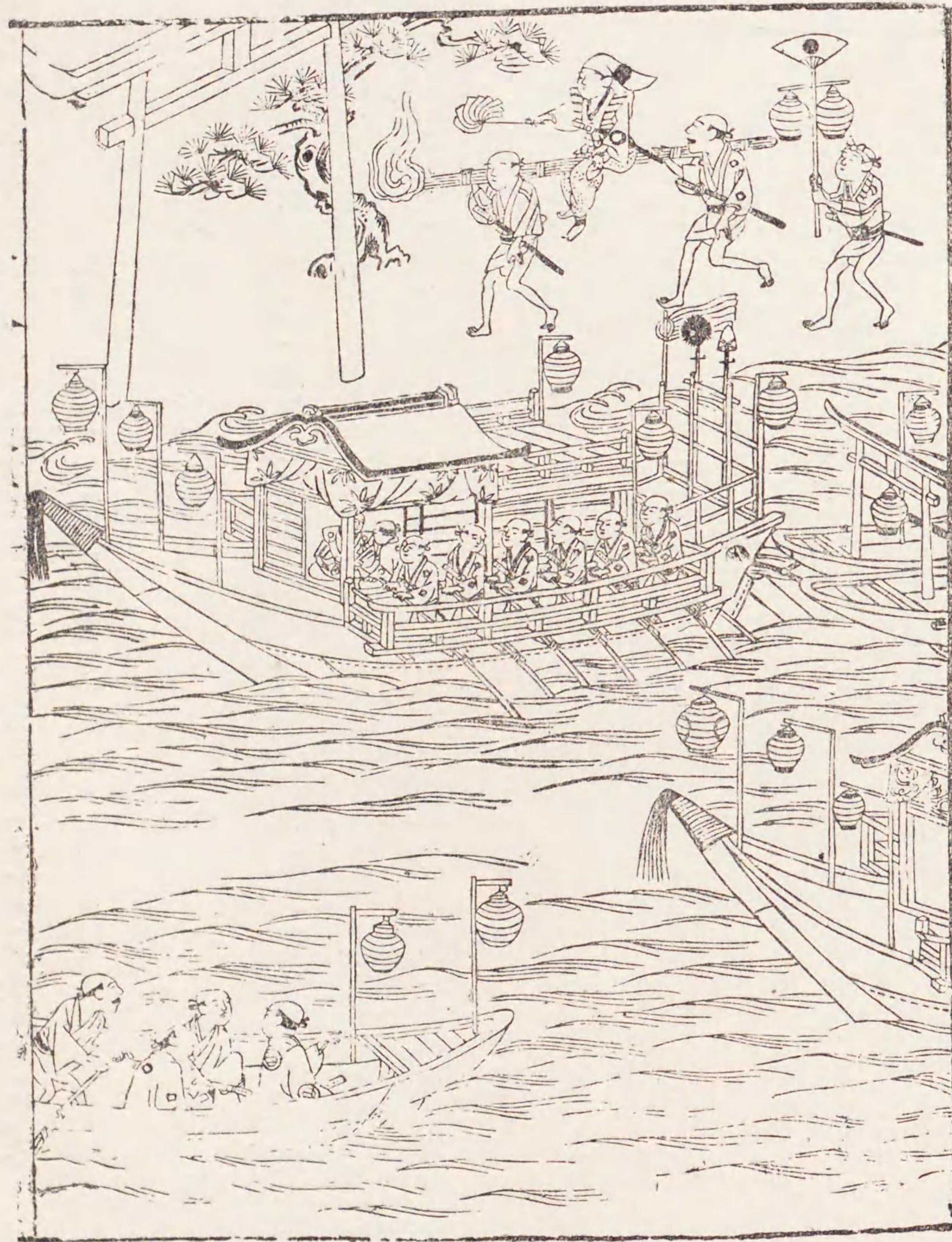
かゝる禪師ハ。いかなる再来にや。黃壁山隱元禪師と。心を一にして。富田普門寺を奉り。其後東武にくたり。

忝も鈞命によりて。五ヶ庄を下し給へり。黃壁山を開基し給ふ。其功あさからさる事也。されハ龍溪禪師勅命

龍溪禪師庵



蘆分 船第五



によりて。大宗正統 龍溪禪師と。贈官をなくしたる。希代の名徳なりしゆへ。粗詞をよせ侍る也

ともつなは生死の岸にときすて、解脱の風にふなよそひせよ

天神御旅所

○本は、京町といふにありしが。近曾惠比須嶋といふにうつしけり。としこと。六月廿五日。天満宮の。祭禮には。神輿二社を。此所にふるなり。其義式いふにおよばず。所の人へさら也。洛陽。遠き縣の人も來りて。羣集し。河逍遙數千の船をうかへ。灯のひかり。西海をか、やかし。魚鱗も。いかでをそれざらんや。寔に夥しくそ侍る

神こゝろとる手になひく榊かな

野田

○福嶋といふ所より。にしかたにあたりて。名にしおふたる。野田といふ里あり。されハ。よし野のさくらに。野田の藤。高尾の紅葉など。熊野のあま犬うつわらへまでも。唱歌しける。名所。寔見てもくも見あかぬなるべし。そのかみ。慶長年中の比まては。見物の貴賤。羣集して。此藤を愛ぬ人はなかりしとや。されとも。



時うつり。事さり。たのしひつき花やかなりし時の。樓閣なども人すまぬ野らとなり。所々に。其かたばかりのこりて。むかしの藤の。古枝は。枯槁せり。あかりといへども。そのゆかりとて。今も木高きあふちの梢ともに。そこはかと。咲かゝりたる。花のかたはらに。小堂を。あつらひ。其名を。藤庵と號して。惠心佛の。阿彌陀如来を。安置し。念佛修行者の。おこなひすまして。いまそかりけり。まことに。ほさち。聖衆。來迎を。藤咲空の。紫雲によそへ。臨終正念ならん事を。ねがへる。さま。いとたのもしくそ。覺えしか

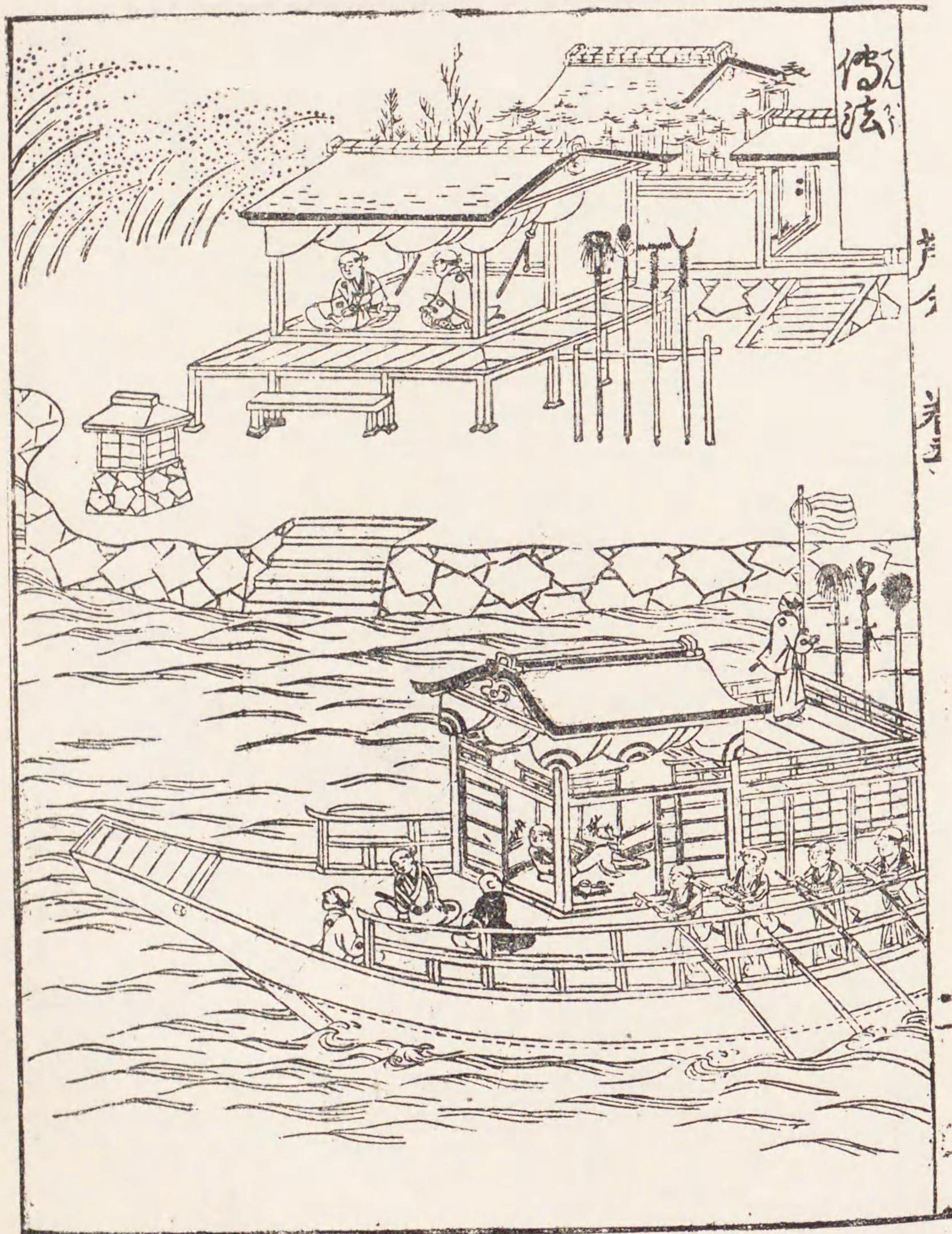
句へ藤いくかといはん春もなし

宗 祇

傳 法

○此所は。むかし欽明天皇。我朝へ。佛經を。ひろめ給ひし時。御經とも。はじめて。著岸の所なるによりて。かくいひけるとなり。あかれとも。またある説に。鳥羽上皇覺鑊上人を。歸依し給ひ。高野山に。傳法院を。建立あそいしける時。用木を。船積せし湊なれり。いふともいへり。さるによりて。紀伊國に。又件の船の。つきし湊あり。于今其所をも。傳法といへり。いつれか。是なるをしらす。又さかさま川など。いふあり

野 里 川





○麓に。止觀の海をたへといへど。是は四貫嶋をながめて野里川といふ。所にいたりぬ。されば。其昔嶋村の何がしといふ人。此所にて。合戦しはてける。其幽靈とて。于今蟹の甲に。人貞すわれり。名づけて。嶋村蟹といへり

姫嶋

○姫嶋といふ所。豊後國と。當國とにあり。最初應神天皇の御時に。新羅國より。女神。其夫を。うとミのがれて。吾朝つくし豊後の國に。來れり。其すミし處を。姫嶋といへり。又つくしは。吾夫のきたる事あるべしとて。それより。此所にすめり。さるによりて。姫嶋といふ。和銅四年。河邊の宮人。ひめじまの。松原にて。うつくしき姫の。かへねを見て。よめり

いもか名は千代になかさん姫嶋のこ松かくれに昔おふるまで
 續古今 見渡せは沙風あらし姫嶋や小松かくれにかゝる志ら浪 中務卿
 姫嶋の小松かくれにゐる田鶴は千年経るとも年老すけり 鎌倉

蘆分船第六

目録

曾根崎

堂嶋

大融寺

附神明

北野天神

女夫池

鶯塚

釋迦堂

崇禪寺

大願寺

三寶寺

鶴塚

東照權現宮

天満宮

附星合池

蘆分船第六

蘆 分 船 第 六

曾 根 崎

○此處の名たる事。いかなるゆへとも。知らず。いにしへより天満天神を氏神とあふき奉る。此御神のことは。皆人のあれることなれり。又いはしにもあらず。此巻のうちにも。粗かきつけ侍れば。同じ事。いはむもつなける。犬のはしらをめくるににたれり。指直ぬ。されハ當社の御神と。北野の天神。天満宮。此三社を。世人。かなへの三足にたとへて。三鼎の宮ともいへり。猶由緒あることによ。尋ぬへし

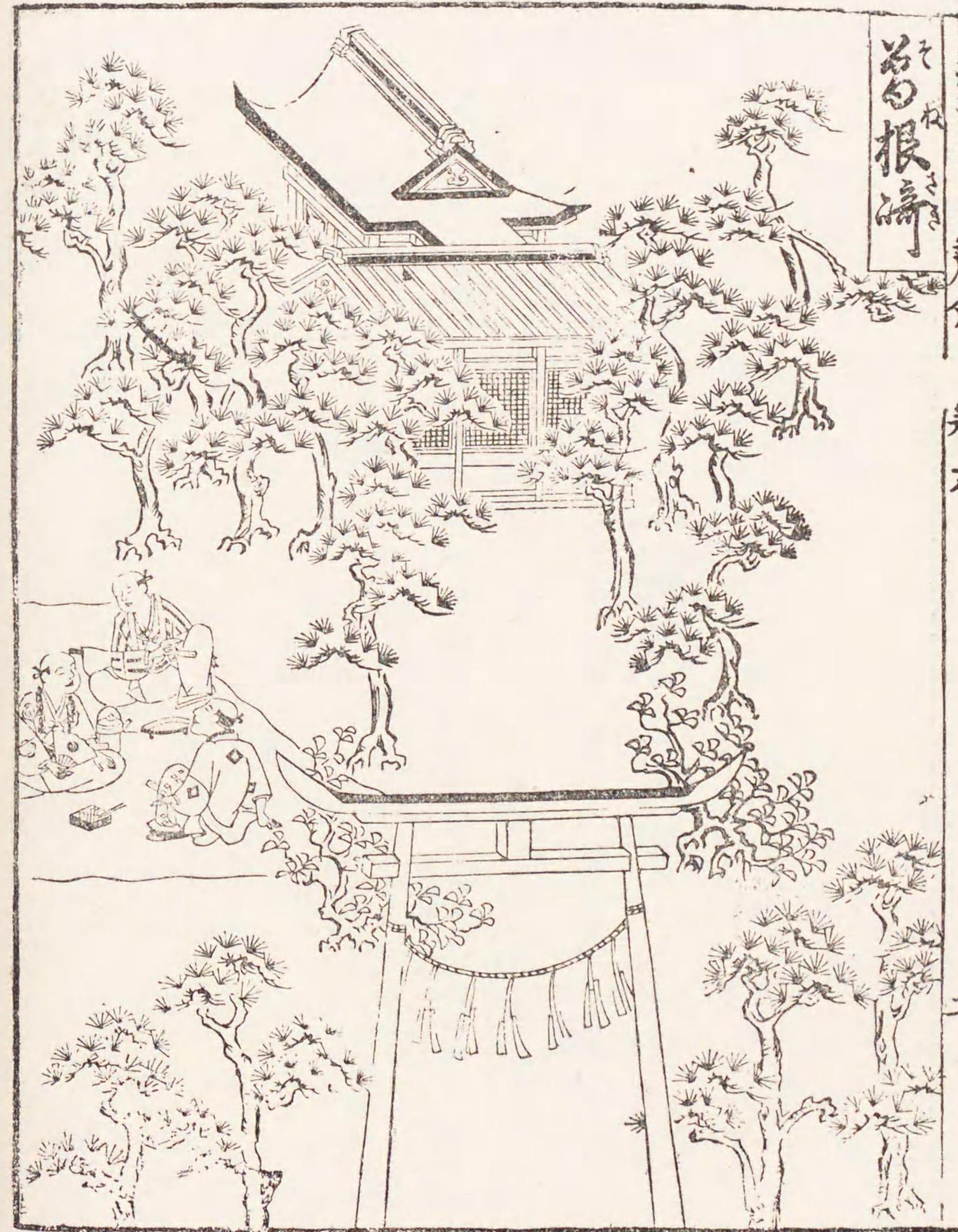
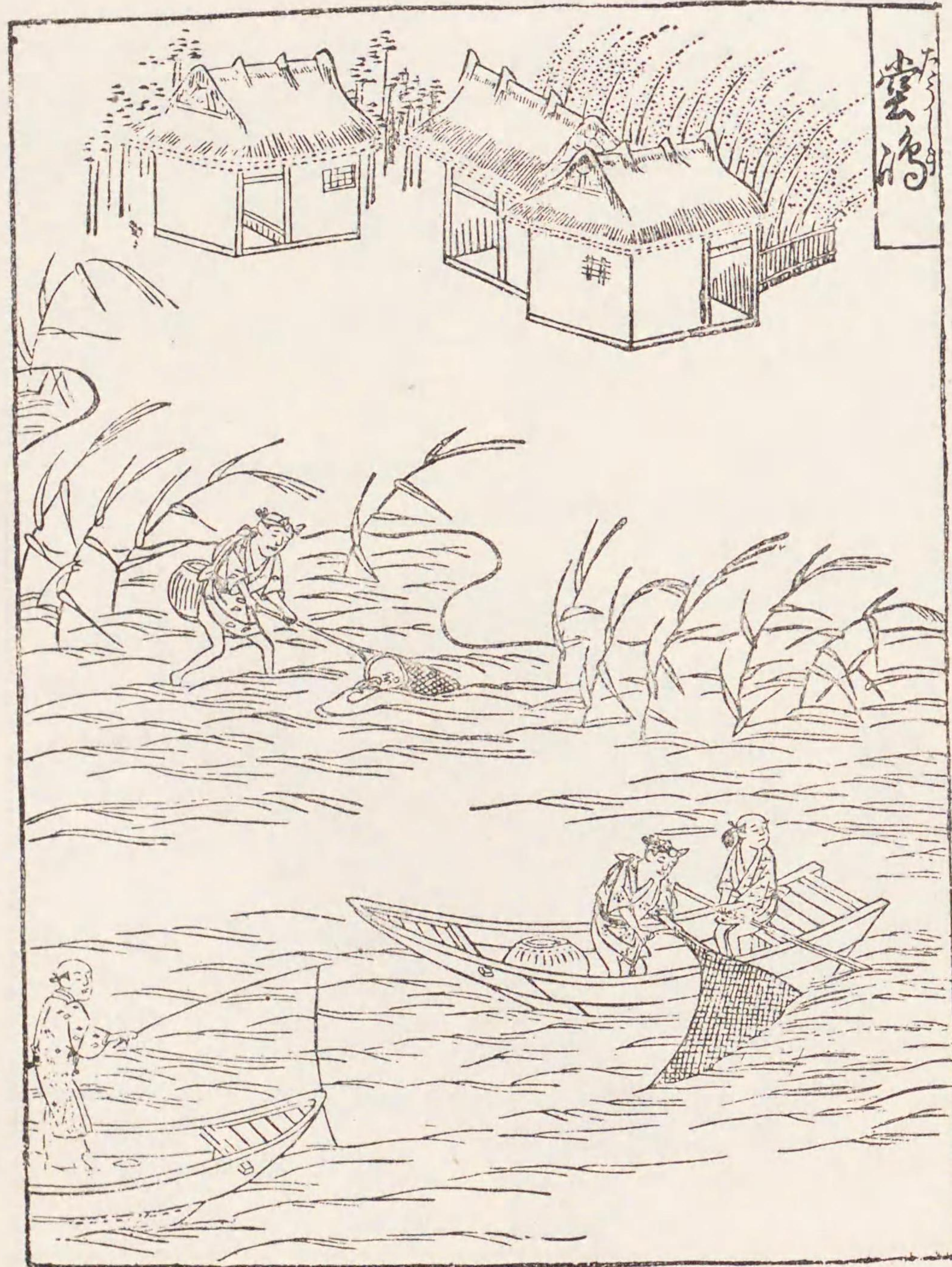
陰涼し千世もと祈る神の松

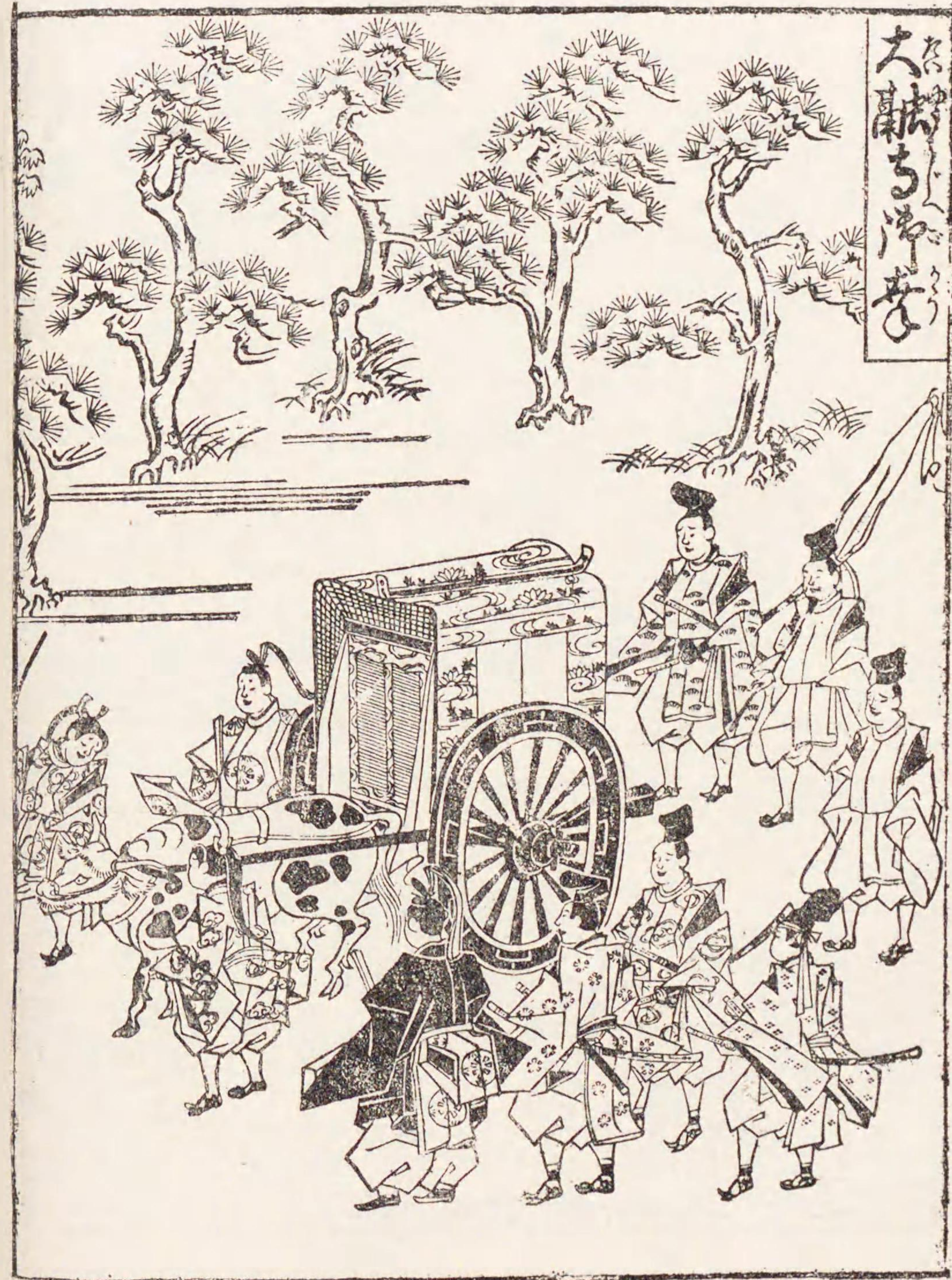
立 仲

堂 嶋

○此嶋は。そのかみ。聖徳太子。守屋大臣を退治し給ひて後。玉造の岸の上に。伽藍を建立せんと。おほしける

蘆 分 船 第 六





に。猶も。守屋か。憤やます。其亡靈風波となり。彼用木を。たびく吹ながし此處にとまりしにより俗につ
たへて。堂嶋といふなり

とつとその昔も今もふる雨のもりやハ法のさまたけそかし 権大僧都日興

大融寺 并神明

○佳木山大融寺ハ。嵯峨帝弘仁辛丑御幸ありし。勅願所也。御本尊は。釋迦。藥師。千手觀音の三尊也。則
弘法大師を請し。開眼供養をなし給ふと也。并天照太神。是ハ此寺より。南東二。辨財天女の。二社を勸請し給ふ。
是又人法繁昌の鎮守とし給ふ所也。其後源左大臣融公。志願を凝し承和乙丑山鐘經七堂を。建立し給ふと也。
故。融公の御諱を以。寺號と。命し。大融寺と稱し給ふと也。又後鳥羽上皇。當寺へ承元丁卯鳳輦をめぐらし
給ふと。縁起に見えたり。靈寶あまたある中に世尊說法の時の袈裟あり。并嵯峨帝御隨心の御守本尊。柏殼のう
ちに。觀音。勢至阿彌陀の三尊則弘法大師の御作也とかや。又中將姫種字を。御ぐしの髪にて。縫給ふ。四天王
像一幅。其外數種の珍器珍寶ありといへとも。一々あくるに。いとまあらず
一 當寺の觀音は。大坂三十三所の第一番の札所なりまた此あたりを。床の尾といふ。是は源義經と。梶原景
時と。逆櫓の論を。なせし時。其櫓の木を伐とりしところなるゆへに。かくいふとなり



北野天神

○此御神ハ。京北野の聖廟より。四十年餘後の造營と也。むかし此所に。一夜に。七本の松生出たり希代の事なればとて。則大融寺の僧奏聞をとけ。寛正四年の。倫旨等ありと也。又ある説に大融寺の境内に。梅塚といふあり。むかし菅丞相宰府へ。左遷の御時。此所に御一宿ありて。詠しさせ給ふ。御歌とて。さる人のかたり侍りつる。

世につれて難波入江にもこる也道あきらけき寺そ戀しき

かゝるゆへあるによりて。此所に。天神を。勸請し王城の北野を。うつし其名とせるとも。いへりたづぬべし

女夫池

○此池のこと。あかとしたる。證説たれされる人もなし。あかれとも。所の人のいひ傳へ侍るハ。今はむかし。ある夫婦ひよくの契りをなせしか。夫さある事ありて。田舎わたらへをしける。其時男のいはく。年の三とせを待べしやがて歸こん。其過侍らハころにまかすへしと。まかんでにけり。まことに。月日の行事。誰と、むへき關しなければ。ほどなく。三とせに。なりけれども。出越男もこお妻いよく。おもひにあくがれ臥ておもひ





起ておもひおもひあまりて。此池水に。入むなしくなりけり聞人聲をのミ泪をおとさすといふことなし彼男夢にもあらず我かすみかに立越來れば本すミし所とも見えず。物かへり。すさまじく草のミたかく生しけり。あれはて。わかおもひし妻もなし。あたりの人に。問ければ。件のことなるとかたりしま。きくよりも。はや胸うちさへぎす。ろになみだせきかねて。終に此池頭にきたり足ずりをして。なけとも。甲斐なし。今あるへきにあらずとて。むなしくなりけると也。いとあはれならずや。さるによりて。今の世までも俗につたへて女夫池といひけるとなり

水もらぬ契のすゑはくひたけにおもひまつみし女夫池かな

鶯

塚

○此所を。鶯塚と名つけたる事。むかし。此邊に富人一子を愛せり。此子鶯を飼て置こと年久しくなりぬ。志かるに。此子例ならぬ身となり常なき。風にさそはれ。此世を。はやうして。はかなくなりぬ。父母かなしみに絶入。若を先にたて。つれなく残りける。うき世のほどをうらみ。ある時。彼母鶯に向て物いひける。なれ誰をよすかとし。今よりのち。此家にいるへきそとあれ。實鳥類とはいへとも。此言葉をや。きしりにけんこゑのかきり出して。其儘死にけるとなり。則其鶯を埋し所なれはとて。于今鶯塚とそいひけり

堂



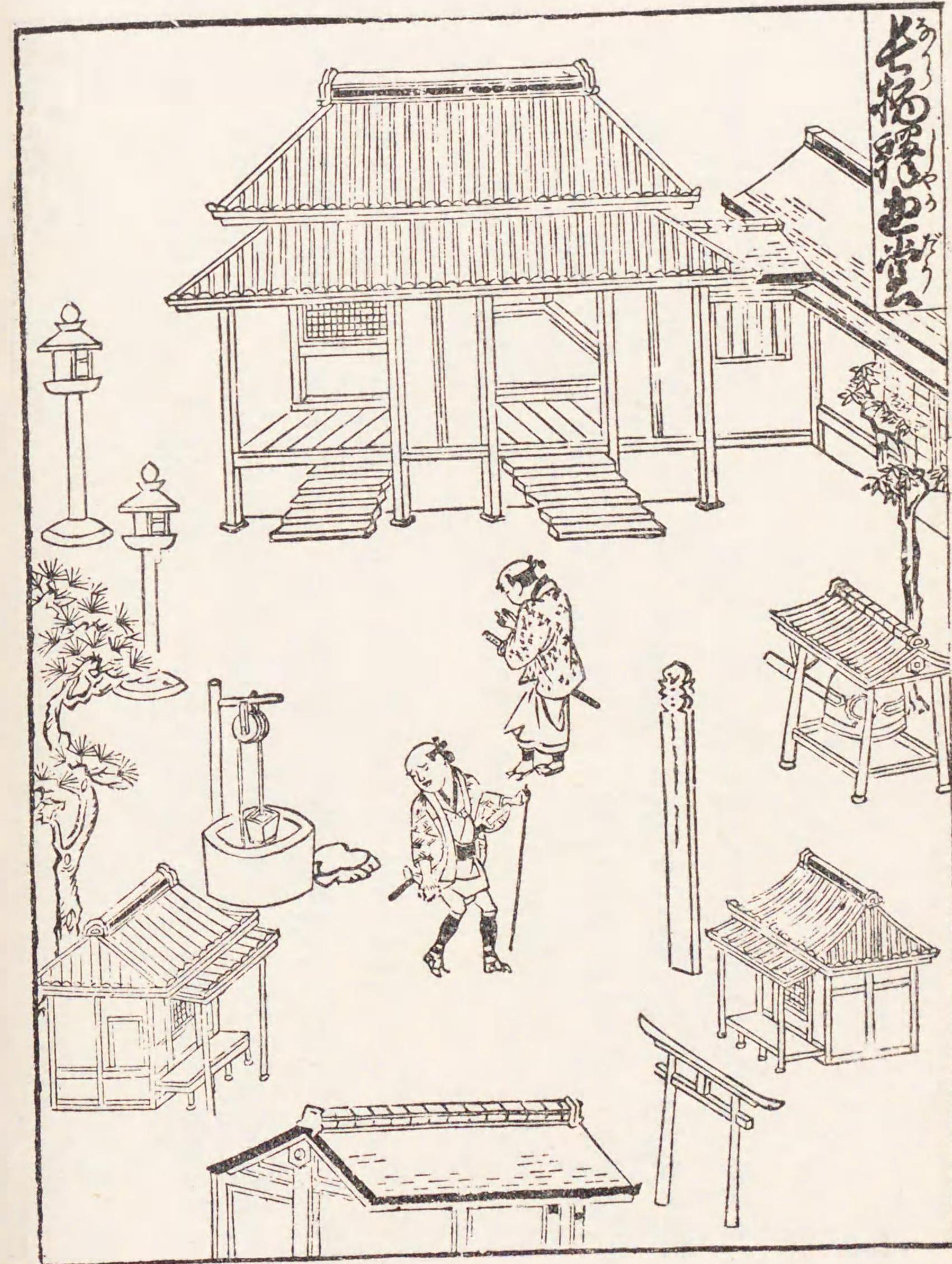
釋迦堂

○此所へ。長柄の皇居の御時より。昆沙門堂の城なり。あかるを仙樂堯鑑上人。洛陽嵯峨の尊像をうつし。釋迦如来を安置し。堯鑑も寓居し則五臺山。清涼寺と。號し給へり。本堂の御本尊へ。阿彌陀定朝作也并聖德太子の作の地藏堂あり。されへ。此寺に六字の大名號あり。是は河内國玉手珂璋上人の筆翰なり文字の大さ。二間ほとつゝにして則布甘端をもつて。上下十五間餘有之。寔に。世に類あらざる。希代の寶物なり

崇禪寺

○當寺の御本尊は。十一面觀音。聖德太子作なり開基德叟和尚也。大檀主へ細川左馬頭持堅公。普廣院殿の。御菩提の御爲に。建立ありしと也。其遺跡とて。于今公方義政公の御袖判を。所持し來れり。寶物あまたありといへとも。涅槃像一幅リリヤ。又此寺のうしろの。松林のうちに稻荷大明神のたゝせおひします也。此所をして。惣社の濱ともいへり

大願寺



○孤雲山大願寺こうんざん だがんじ。推古天皇すいこの御宇みよ。賜勅さうちやくの練若れんじやくにして。御本尊無量壽佛也みほんぞん むりやうじゆふつ。則岩氏平生すないし へいせいの持尊ぢしゆんの古佛也こぶつ。

むかし攝津國難波せつ のくに ななばの岸と。同國垂水の里なるみ さと。棹指させさしの宮と。其際二里南海あいたり なんかいの入江いりえにして。數十の嶋あり。懸橋處々かすはし ところどころ。數國往還すこくわうわんの通路つうろたりといへとも潮浪岸うしろをうかち。洪波江こうはえにさかのほりて嶋橋とうきやう頽落たいらくすること。幾度いくたひなり。故からがゆへに。難波ななばの名あるともいへり今の大坂難波橋おほさか ななばし。其隨一なりとかや。諸人あまにん通路つうろの絶たえたる事をうれふ。蜀せきりく蕘さかりあるひハ云い。人柱ひとしじゆを入れて。築補ちくほあらハ。嶋橋成就しまはし じゆじゆせんと。天てんまことに。人ひとをして。いはしむるにや。諸人の愁傷あつちゆうじやう既に。上聞かみきこに及およしかハ。則諸官すなよかんに詔みことりありて。通路相成あひなるん事を。議ぎせしめ給ふ。諸官すなよかん議定ぎぢやうありて。垂水の邊なるみ へに。いたりて。關せきをする。人柱ひとしじゆの任にんたる人を期ます。期する所を知らず。むねあるをや。垂水のささとに。岩氏いしといふ人あり。關せきを越こる時。たへふれて云い。袴はかまのままちに。つぎのあらんを。人柱ひとしじゆとせは嶋橋成就しまはし じゆじゆせんといへり。官是くわんを見るに。岩氏いしの着きたる。袴はかまつぎあり。則捕取とらして以もつて。人柱ひとしじゆとなすに。嶋路しまぢをのづから稼穡かせう豊饒ほうじやうの地ぢとなれり。今の中嶋なかつしまといふ是也。勅宣ちやくせんありて。人柱ひとしじゆの入いたる邊に。練若れんじやくを建立けんりやうありて。岩氏いしの冥福めいふくをいのらしめ給ふ。今の大願寺だがんじ是也。又歌うたにハ。橋下寺はしもとともよめり

現六 長柄なる橋もと寺もつくるなりおこさぬ家を何にたとへん

又此邊またこのへに淵ふちあり則岩氏人柱すないし ひとしじゆに入いたる池いけなりとかや。むかしは。龍灯りゆうとうあかりたるよし。今の世よにも見る人もありけるとなり。されハ岩氏いしの娘むすめありしか。河内國かんなみ。禁野きんやにゆく。ものいはさること久し。父ちちの單言たんげんして。其愁あはれにか、



蘆分 船第六

れる事を傷むにや。夫啞なりとおもつて。垂水のさと。母のもとに。おくりけるか。夫猶わひしくや。おもひけん。手して。女の顔に。水そ、き露か玉かといひて。心ミたれど猶物いはす。唯うちわらひて。たう紙に。書付のこしたる歌

露か玉かなにかと人のとふものへきえ歸りぬるわかなみたかな

又彼婦を垂水のさとへおくる時。夫則弓をもつて。義送するに。雉鳥ちまたになく。夫と是を射る輿中の愁婦聲うちあけて

ものいはし父はなからの橋はしらなかつは雉鳥もいられさらまし

夫と啞ならざる事を。ありて。終に。ひきかへる。今に其地をよんで。雉鳥繩手といふ。此婦後に。發心して。山崎にすミけるとなり。今の不言寺といふ。是なりとそ。又北國に行けるともいへり。其終る所をしらず。又勅宣によりて。古橋木を以て。地藏菩薩の像を。刻むて。大願寺に安置せしめ給ふ。供養の勅使四條大納言公任卿佛前に胡跪し。又自詠して

なから江やもにうつもれし橋柱また道かへて人わたす也

時に地藏菩薩に微笑の色有是を難波の笑地藏ともいへり



三寶寺

○當寺は。大日といへる。沙門のすみし處也。まかるに。此大日と申せしハ。悪七兵衛景清が伯父なりしか。いかなる事ありけるやらん。景清此大日を殺せしとなり。それよりして。悪の字を。世にいひそへけるとなり。惣じて。景清に。かぎらず。義平が。伯父の義廣を。うつにより。悪源太と。よれけるも是等の事に類せるか。また。傍に。景清がなみだの池など。いふ所もあり高濱といふも此邊なり

續後拾賀きてみれハ千代も經ぬへし高濱の松にむれる鶴の毛ころも

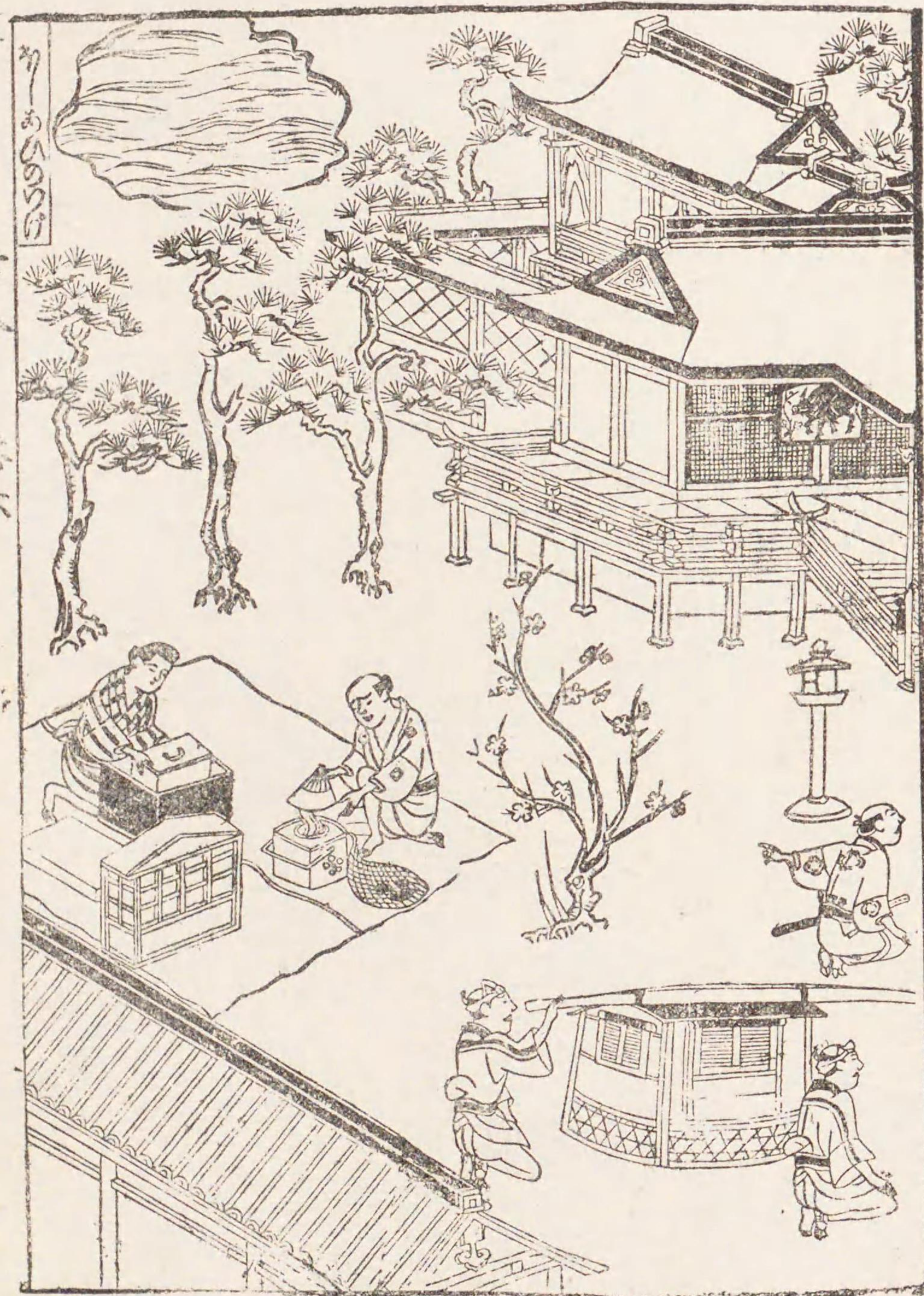
太上天皇

鶴

塚

○澤上江といふ。所に。いたれハ。後白河法皇の御母の爲に。御建立ありける。母恩寺といふ尼寺あり。此所より。北ひかしの野中に鶴塚といふあり是近衛院御在位の時仁平の比ほひ。主上よなく。御腦あり。有驗の僧侶に仰て。大法を。修せらるゝといへとも其志るし更になかりしを。則公卿せんぎありて。變化のものゝ。わざなるへしとて。源平兩家の武士を。えらへせ給ふ中にも。兵庫守頼政に。仰付られ討とめし。鶴をうつほ舟にをし。いれ。淀川になかし給ふとなり。其ぬえ此ところのうき洲に流とまりて。朽ける所なりとて人鶴塚といへり





天海文附屋



天満宮

○當社は。人王六十二代。村上天皇御宇。天曆年中に詔を以て。當地に造營ありとかや。御代々々天子御震翰(宸)の御名號等を。奉納せり。年中數ヶ度の神事これありといへども。六月廿五日。九月廿五日に。神馬をひかせ。大形ならぬ祭禮也。又星か池など、いふ所もあり。されこの草紙をおもひ立し事ハ。花實庵貞富といひし人に。いさなへれ。きさらき下の五日に。此御神に。まふて。かなた。こなたと拜みめぐり。御自愛の梅の木陰に。まはし休らひ居て。難波の名たる。ミヤしろ。いとたうとき古寺の事此こと彼こと山また。山の物語など。ものし侍りしに。有難事のミおほかりき。あかへあれど。あれる人まれに。あて。さたかならねば。其ひとつ。ふたつをもとめて。物のはしにあるし。後見ん人のためにと。おもへと。元より。我は。紀の海や。若の浦邊に住こし身なれば。鶴寸もあらぬ。道のあなひ。所にいひをく。いはれなきかと。難波のあしのミちあるへをは。ひたふるに。たのむの鴈のかへるさに。花咲實る庵に入。筆の海の手引にまかせふるき都の靈佛靈社を拜みめぐり靈寶等を拜見して始終六卷となし侍りぬ。まことに貞富ハ。やさしくも。敷島の道に。心をよせ滑稽にいにしへの。守武宗鑑の。古風を學び。哥ハ貞徳翁雄長老のあとをたひて。寛文のはしめつかたに。されうたの百詠をつらねしにも。松江維舟法橋より。花實庵甘露の百首と。えほうしを着せられ。世上に。流布して。皆人の慰と



蘆分船第六

なれりとかや。かく道に心さしふかきにより。予於駿府神道の古今傳受せしことを。あり。あるて。懇望せり。其心さしのまことを。感じて。則惣社司農より傳受せし。古今灌頂をさづけ。和哥の五議三體を。相傳し侍る。其よろこひのあまりにやゑびす歌に

おか玉の木を望ミ得て職人のさしいた、ける箱傳受かな
かへし
おか玉の器量見つけて職人にさしわたしける箱の寸法

東照權現宮

○當御社は。元和二年に。松平下總守良忠創建し給ふ。開山ハ。三江和尚也。則神宮寺を。九昌院といへり
萬代のはしめとけふを祈置て今行末は神そあるらん
萬代を松にそ君を祝ひつるちとせの陰にすまんと思へハ

難波石下記者一多あり治く本傳也
治を其紀陽藤原氏く家より傳して初
紅修國君よまゝにえ一く不孝よりて南山
よとすらく一傳受せりて其のこゝに後言秘傳
に眼をさす一遊小京春壽院道作付中
波門下身自をら傳て其を鳴海山事
久一終よ或良高野大明神より益神祿
威の神夫通る意集ると云類号を初
治ひ一とる其功を地へ編纂して十冊
とよらとせよ侍りて書とて集録一冊

貴古賈世於嘆德之好深為筆後
加者也

于時延寶三知夷則既望日

洛葉東山萊門磐溪

右蘆分船者捕州難波地景
古今名所記也予潛求之聊為
童蒙繪其所令板行者也

延寶三年

陽月吉辰

書林

山本氏理兵衛開板



なには繼